

ロによれば人間は心身の二者よりなる。されど心は直ちに聖なるものにあらず。聖なる心即ち聖靈は、新人の心にも宿りて之を支配し、以て永遠の生命となる實在なりき。而してパウロは肉體と靈とを相對せしめ、肉を以て吾人を神に背かしむる罪惡の住所となしぬ。されど肉そのものは決して罪惡にあらず。そが一度罪惡によりて占領せられ、その爲めに使役せらるゝに及びて、初めて諸惡行の淵源となるなり。而して罪惡の必然的結果は人類を死に導くものと見たり。然らば罪惡は如何にして人生を支配するに至りしか。そは往時アダム、イブの惡行によりて種播かれ、その結果として死の惱みも人生に來れるなり(羅馬五の一二以下)。斯くの如く靈と肉とを相對せしむるパウロの思想は、明かにギリシア哲學の二元觀の影響によるものなり。されど彼はギリシアの思想の如く救済を靈のみに限らず、肉體をも併せて救はるべしとなせしが故に、肉體を輕視し、厭惡せず。從つて厭世的傾向を取るに至らざりき。

パウロは靈を以て新人の心意を支配し、永遠の生命と幸福とを與ふる實在となせり。我等はこゝに暫く彼が靈に關する思想を見ん。古代の人類が有せし世界觀

は所謂靈魂論 (Animism) にして、自然界の諸現象を一種の人格的實在によりて支配せらるゝものとなし、人類も亦之によりて種々なる活動をなすと雖、時に他の靈來りて人の心に宿り、不可思議なる現象を惹起することありと考へぬ。この人格的實在を靈と云ふ。而して自然現象は各人類に對して利害の關係を有するが故に、彼等は之を支配する靈にも亦善惡の別を付し、其間に價値の高下を認めたり。例へばイエスの福音中に見ゆるサタンは惡靈にして、天童の如きは善靈なりしなり。斯かる神話的思想は、後に哲學に入りてプラトンの思想を飾り、宗教に入りて秘密教の根底をなしぬ。パウロが靈の觀念も亦この思想の結果に外ならず。斯くして彼は啓示のみならず、神に關する知識をば悉くこの聖靈の作用に歸し、新人は之によりて平和と幸福とを得べしと説けり。祈禱の如きは、その最たる作用にして、吾人が感極まりて之を語るに由なく、「オー神よ」の一語に萬腔の思念を洩す時、靈は我に代りて祈れるなり(羅馬八の二六以下)。而してこの靈が肉體に宿りて生れたるもの、即ちイエスにして、吾人が靈と交渉する結果は、信愛望の三者により現はされたり。

斯かる性狀を有する人類は、如何にしてこの靈的實在なるクリストを介して萬能の大神に救濟せらるべきか。パウロは之に答へて、それは只義によりてのみと云へり。吾人は神の恩恵と彼に對する信仰とによりてのみ義とせらるゝなり。パウロによれば、人類は悉く罪惡の奴隸にして一人の神によりて義とせらるべき者なし。然るに神は無限の恩恵を垂れて、不義なる者をも義なる者として之を赦し、罪人をも善人として之を救はんとす(羅馬三の二四、四の五)。故に義は神の愛に等しく(羅馬三の二六)。義とせらるゝことは救はるゝの謂なり。而して又義とせらるゝとは神の本質を受くるを意味す。故に義とせらるゝに依て、我等は神の第一子なるクリストの同胞となり、彼と同く肉と超越して靈的實在となる(加拉太四の六)。茲に於て我等は罪の奴隸にあらず、自由なる神の子となりしなり。神の子の自由は必ずや善行をなし得る自由ならざるべからず。故にパウロが新倫理觀の根本思想は、汝がある如くあれ。若し汝等が靈によりて生きなば、亦靈によりて行ひべし(加拉太五の二五)と云ふに盡く。而して此神の恩恵と不離なる關係を有するものは、信仰に關する思想なりき。パウロによれば、恩によりてのみ義とせらるゝと、

「信仰によりてのみ義とせらるゝ」とは同一意義を有せり。然らば信仰の意義は如何。吾人は罪深き者にして救はるべき價值を有せざるに拘らず、神は無限の恩恵を以て吾人に祝福を垂れ給ふが故に、我等は小兒の如き信頼と感謝とを以て、神の恩寵に縋るべきなりとの念は、即ち信仰を示すものなりき。而してこの念こそ實にパウロが經驗せる宗教的意識の真髓にして、且つ我等は神が人類救濟の爲めに遣はせるクリストに信頼し、全く己れを捨て、彼に捧げ、然る後凡てを彼より受くべしとの思想は、實にパウロが信仰の中心なりき。

五 カソリック教の成立

斯くの如くクリスト教は使徒パウロによりて故國ユデアを去り、ギリシア、ローマの地に移植せられたりと雖、數千年來、互に相異なる文明によりて養はれたる異邦人の思想及び感情が、ユデア人のそれと相異なるは論を待たず。故にクリスト

教が異邦人によりて認容せられんとするにも亦彼等がキリスト教を攝取せんとするにも、共にその間に多大の順應的變化を経ざるべからず。先にパウロに依りてギリシア化せられたるキリスト教は、爾來益々異邦の文明によりて廣められ、深められ、且固められて、終に所謂カソック教を作るに至りぬ。我等は先づキリスト教がギリシア、ローマの世界に入りて如何なる困難と戦ひしかを述べんとす。キリスト教がギリシア、ローマに入て、戦はざるべからざりし勁敵に三種ありき。政治的迫害、ノステイシズムの壓迫及び哲學的批判即ち是なり。吾人は先づキリスト教徒に對する、ローマ官憲の迫害より説かんに、由來ローマ人は、ローマ市に於ける各民族は、其故國に居る者と同じく自國の法律に従ふて、民族の神を崇拜せざるべからずとの思想を有せしが故に、キリスト教がユデア教の一派として見られたる當時は、一の迫害を與へざりしも、一度ユデア教に反對せる者と認めらるゝや、彼等は國法を犯せる罪人と見られ、遂に古來未だ見ざる大慘劇を惹起するに至りしなり。就中狂烈なる迫害者を、キロ帝在位紀元五四—六八となす。ペテロ、パウロを初めとして、幾千百のキリスト教徒はこれが爲めに神の救済を信じ

つゝ從容として殉教の死に就かざるべからざりき。然れども西曆紀元四世紀の初葉に及び、コンスタンティン大帝がローマに君臨するや、キリスト教は遂に帝國の國教となり、歐洲に復た拔くべからざる根基を置けり。

第二の勁敵たるノステイシズムは、秘密教とユデア思想との混血兒とも云ふべきものにして、そが最大の目的は、當時の人心が渴望しつゝありし幸福なる來世の保證にありき。故にそは一度パウロの救済的教理を聞くに及びて、之を等閑視する能はず。神の子が天より下りて目のあたり贖罪の死を遂げ、然る後復活して死と地獄とに打勝ちて天に歸れりと教へられ、直ちに此思想を採用して、彼等が信仰の中心となし、之に衣冠するにギリシアの神秘思想を以てせり。されどノステイシズムは、實に斯かる受動的態度のみを以て満足する能はず。他方に能動的態度を探り、猛然キリスト教會に肉迫し、そを己れの思想感情と同化せずんば止まざらんとするに至れり。此結果キリスト教徒は從來の幼稚なる地上の神的王國に關する迷夢より醒めて、信仰によれる幸福なる永生は、物質と死との桎梏より救はれて、天の王國に入ることを意味すと考へられ、幸福なる來世の保證は、眞生活

の完成と連続とによりて來たるとの思想を生ずるに至れり。斯かるキリスト教の變化は以てギリシア、ローマの民心を收攬する所以なりしなり。最後にギリシア哲學の影響に就て述べんにキリスト教は素より精細なる論理的思索の結果にあらず、只宗教的經驗より來れる感情に過ぎざりき。故にそが度異境に入るや、ギリシア哲學の峻烈なる批判の下に置かるゝは蓋し自然の數のみ。茲に於てキリスト教は何等かの方法に依て自己の信仰を辯護せざるべからず。然るに當時の改宗者中には、已にプラトーン又はストア哲學の思想を懐ける者ありしが故に、彼等はかのロゴス説を採用して教會の教理を組織せんとせり。何となれば斯くしてのみ當時の思想家は初めてキリスト教的信仰に入るを得たればなり。

斯くの如くキリスト教は四圍より襲ひ來たる幾多の辯難攻撃の中にあり、而も所謂護法家(Apologetis)によりて其教理に多大の補足改釋を行ひしが故に、其必然の結果として信徒間に種々なる異説を生じぬ。茲に於て之を統一して秩序を保つべき必要を來たし、三種の教權を制定するに至れり。僧職、信條及び經典之を三

種の教權と云ふ。

初めパウロがキリスト教を歐洲に移植せる當時、諸所に散在せる各教會はキリストに對して敬虔なる同胞の集合なりしかば、各信徒は互に平等の地位を占め、直接に神に接するを得たり。而して後一世紀の間、彼等は長老又は教父(Paterfamilias)と稱せし代表者を選び、之に一切の教務を委任せしなり。然るに一度キリスト教會が内訌外患に遭遇するや、そは從來の長老制度を改めて各教會を統一すべき監督長老(Bishop)を選出し、之に教理及び信條の全權を集注すべき必要を生ぜり。故に監督長老は教會の君主となり、使徒の後裔と認められ、キリスト教的傳説の占有者と考へらるゝに至りぬ。斯くしてパウロが説ける神との直接交渉は、西曆紀元二世紀の末葉より、監督長老にのみ限るものとなり、賞罰與奪の權はこれの掌中に落ち、クリストの代理者として天國に入るべき鍵を握るに至れり。故に救済はかれの審判によりてのみ決定せられ、個人の信仰と良心とより來たる福音的自由は全く地に墮ちて、こゝに初めて統一ある、而かも形式的なるカソリック教の基礎を開けり。而して當時最も勢力ありし教會をローマ、アンテ、オキア、及

ピアレキサンドリアの三教會となす。
 キリスト教は斯く一方に監督長老によりてその外的統一を計ると共に、他方に信仰箇條を設けてその内的統一を計り、以て異教的思想の侵入を防がんとせり。而して信仰箇條は凡て監督長老の制定する所、教會の存立上缺くべからざる者と認むるや、直ちに採りて之を使徒より傳はれる真理となし、使徒の名によりて發布するを常とせり。之を傳説主義と云ふ。こゝにその内容を見んに、最も重大なるものは三位一體の教理と、之に伴ふキリスト及び人類の性情に關するものなりき。而して洗禮と聖晚餐とは、信者たらんとする者に缺くべからざる儀式となり、之と共に僧職の神聖犯すべからざるものなることを教へたり。斯くして教會には殆ど眞の宗教的經驗を有する者なく、宗教を單に信條と同一視し之を學ぶを以て信者の義務となし、而も宗教的智識の多寡によりて敬虔の度を判ずるに至れり。之を唯知主義といふ。
 而してキリスト教は又ノステイシズムの刺戟によりて、經典を編纂せざるべからざるに至れり。初めノステイシズムの主張者マルシオン(Marcion)西暦紀元一四〇年

頃は舊約書の否なるを唱へ、之に代はるべき經典の必要を叫び、路加傳及びパウロの書翰を撰みてその用に供せり。されど其時キリスト教會は之に對應すべき一の經典を有せず。西暦紀元二世紀の中葉より、主(Lord)の詞として有名なりし共觀福音書が舊約書と共に讀まれざりしにあらざれども、制定せられたる經典制定の必要上、かの共觀福音書に加ふるに約翰傳を以てし、就中馬太傳を最も有力なるものとして之を卷頭に置き、而してパウロの書翰の如き勿論之を除外すべきにあらざれども、それが律法に對して餘りに反感を抱くが故に、提摩太書及び提多書を加へて之を敎化し、之に對するに使徒行傳を以てして四福音書に附加し、最後に教會の書翰なる約翰書、彼得書及び猶太書の如き文献を殿せしめてこゝに新經典を作れり。こゝは西暦紀元一八〇年以後キリスト教會の用ふる所となりしもその編者を明かにする能はず。或はローマ教會より出でしものならん。之を新約全書と云ふ。斯くしてキリスト教はこれ等僧職、信條及び聖典の三者が悉く使徒より來れるものなることを明かにせり。
 斯くキリスト教が一度教權を制定するや、略、その統一を完うし、且つ異教思想の

侵入を防ぐを得しと雖、尙各教會の間に多少の異説なきにあらざりき。而してローマ教會は、古來ベテロ及びパウロの法を説きし處として重んぜられ、教理乃至儀式の如きも信徒に多大の信頼を博しつゝありき。然るに西暦紀元四世紀に入り、かのコンスタンティン大帝ローマに君臨するに及び、キリスト教を好遇して自ら其信徒なりと公言し、西暦紀元三二三年に至りては遂にキリスト教を國教となしぬ。而して後かれが西暦紀元三三〇年都をコンスタンティノブルに遷すや、こゝにギリシア教會の興隆を來し、ローマ教會と相對してキリスト教會内の一大勢力となり、他日キリスト教の東西分裂を來すべき素因を作れり。

キリスト教をして東西に分裂するに至らしめし遠因は、實にこれのみにあらざりき。古來教會は其中に互に相容れざる二種の思想感情を包含せり。そは即ちローマ精神とギリシア文明との對立に外ならず。然るにコンスタンティン大帝一度キリスト教内に二大教會を作るや、兩者の軋轢は日にその度を加へ來れり。故に大帝は彼等を調停して平和なる解決を見んが爲め、遂にニケーア(Nicea)に第一回の宗教會議(西暦紀元三二五年)を開けり。蓋しキリスト教の根本教理は神がクリ

ストによりて人類を救済するにありしが故に、問題は必ずや神、クリスト及び人間との三者を中心として起らざるべからず。而して第一問題たる神性論はニケーア會議に於てアタナシウス(Athanasius)が唱へし父なる神と子なる神とは同一なる性質を有すとの結論に達し、後コンスタンティノブルの會議(西暦紀元三八一年)に於て聖靈を之に加へ、遂に三位一體論を形式せり。而して第二問題たるクリスト論は、エフェソス(Ephesus)の會議(西暦紀元四三一年)及び第二コンスタンティノブルの會議(西暦紀元五五三年)に於て、クリストは純然たる神にて又完全なる人なりと説く神人論も決したり。されど斯かる教理上の統一と、未だ其根底に横はる二大思潮の對流を如何ともする能はざりき。聖靈問題に關してギリシア教會はそを父よりのみ出づとなせども、ローマ教會はそを父と子との二者より出づとなし、加之ローマ教會は古來の歴史的關係より法王の最上權を要求せしと雖、ギリシア教會は之を否定せり。斯くて兩者の矛盾、反目は益々其度を加へつゝありき。然るに西暦紀元四七四年西ローマ帝國の北方蠻族の爲めに滅亡するや、ローマ教會は政府の遺業を繼ぎて人民を支配し、法王は皇帝の位に坐して民心を收攬

し、教會の基礎漸く鞏固ならんとするに際し、法王はギリシア教會より獨立して、こゝに政教一致の王國を建設せんとする野心を懷きぬ。然るに機會は終に到來せり。先に述べしが如く、キリスト教がギリシアローマの地に入りてより眞信仰に生くるもの少く、次第に異教的風習を採用して、偶像崇拜に耽り、クリスト、マリ、或は使徒等の畫像を崇拜するに至れり。されど當時東方に起れるマホメット教徒はこの風習を見て之を難じ、偶像崇拜は眞神の教にあらずと論じぬ。茲に於て漸く偶像崇拜に反對する信徒を生じ、遂に偶像破壊の亂を生ぜり。故に東ローマ皇帝レオ三世は天下に令して偶像崇拜を禁じ、ローマ法王にも之が勵行を強ひぬ。されど法王グレゴリー二世は之を峻拒して、突然ローマ教會の獨立自治を宣し、全くギリシア教會と分離するに至れり。時に西暦紀元七六二年なり。後屢兩教會を合併せんと企てしものなきにあらざりしも、終にこれを完うする能はずして止みぬ。

六 ギリシア教會(正教會)

東ローマ帝國の衰頽に伴ふてギリシア教會は、回々教の爲めに東方に其勢力を失ひしと雖、なほこれと同時に北方に向ふて著るしき發展を遂げ、先に失へる所を償ふて餘りありき。西暦紀元八六三年モラヴィヤ(Moravia)の王ロステスラン(Rostislav)ギリシア皇帝に書を呈して神學者を招き、斯くてキリスト教の經典をスラブ語に翻譯し、後西暦紀元九五五年ロシアの王女オルガ(Olga)コンスタンティノープルを訪ふて、キリスト教徒となり、その孫ツラディミール(Vladimir)王位に即くに及びキリスト教を國教となし、教會を起して國民を教へぬ。之をロシア教會と云ふ。時に西暦紀元九八〇年なり。斯くしてギリシア教會は東歐の天地に強大の勢力を得て、蠻民を教化し、その國民性と合して文明の動力となり、今なほ彼等の精神界を支配しつゝあり。

然らば斯かる發展を遂げたるギリシア教會の内容は如何。人若しギリシア教會の壯嚴なる禮拜と繁雜なる儀式と、古典的畫像及び神秘的思想等を觀察して、一方に之を原始キリスト教會に比し、他方に之をギリシアの宗教的思想乃至儀式に比せんか、何人と雖、明かにギリシア教會は前者に屬せずして、後者に屬することを認めん。實にギリシア教會はギリシアの東帶を著けたるキリスト教の子に、あらずしてキリスト教の衣冠を著けたるギリシア思想の子なりしなり。其中より只一の「クリスト」なる名辭を除かんか、そは全くギリシアの宗教史中に入るべき者なりと云ふも、敢て過言にあらず。されどこはギリシア教會の一般觀察に過ぎざるが故に我等は下に其特質を稍詳細に述べし。

ギリシア教會の最大特質の一は實に傳説主義なりとす。而して謂ふ所の傳説主義とは、即ち古來の傳説を尊び之に絶對的服従を要求するの謂なり。ギリシア教會の思想によれば、聖なるものは天地間に自由行動をなすものにあらず。そは傳説中に著へられたる者なり。吾人が一切の需用は此傳説と稱する資本より供給せられ、而も其資本は往時使徒等が教へし所と全く同一ならざるべからずと。我

等は斯かる思想の萌芽をば新約經典の中に求むるを得べし。例へば使徒行傳の如きは、教會存立の必要上、異教的思潮の侵入を防止せんが爲めに、彼等(教父)は常に使徒より學べりと云ひ、使徒の教理は確實に永續すべしと教へたり。然るに後に至りて、教會は其存立乃至統一上必要として創造せる教理、或は儀式をも之を使徒の遺訓となし、之を信奉して宗教的義務を嚴守すべしと説くに至れるなり。次に吾人はギリシア教會の第二特質として正教主義を擧げんとす。正教主義とは健全なる教會の教理に絶對の價値を置き、之を以て救濟の最大要諦と見るにあり。即ち曰く、人若し正當なる教理を知るにあらずんば救濟せらるゝこと能はず。そを有せざる者は凡て人間の權利を失ひ、天刑者として國民の交際を拒まれ禽獸視せらるべしと。現今に於ても未だ斯かる狂信的思想はギリシア教會の内に其跡を絶ちしにあらず。然らばそは如何なる原因によりて來れるか。世人動もすればそをギリシア思想の結果なりと云ひ、或はローマ法の影響に因るものとなす。されどこは未だ事理を穿てる言にあらず。蓋しキリスト教は初めローマ帝國に入りて異教徒の攻撃と、ローマ官憲の迫害とを受け堪へ難きを忍びて、然る

後漸く當時の地位を得たるが故に、今やその反動として終に異教徒を壓迫し、彼等を禽獸視するを正當なる行爲と認むるに至り、且つ當時東方より來れる君主絶對權に關する思潮は教會の權利を無限に擴張し遂にかゝる偏狹なる思想を生ずるに至れるなり。斯くして教理は絶對の價値を有するものとなり、宗教即教理の趣を呈し、宗教哲學を組織して知識主義の傾向を取るに至りぬ。

斯かる傳説主義及び正教主義に伴ふて必然に來たるべきギリシア教會の第三特質は、實に儀式主義にありき。何となれば、若し宗教にして傳説的教理の複雑なる組織として存在し、而も之を知る者は知識ある二三の人士に止まるとせんか、他の信徒は悉く外形的儀式に因るにあらずんば、何人も救濟の道を求むる能はざればなり。斯くして教理は象徴的行爲によりて、一定の形式中に具體化せられ、了りぬ。蓋し吾人は儀式の意義如何に關して全然不可解なりとするも、尙其中に一種の神秘的靈力を感得するを常とせるが故に、これに依りて救濟せられたるかの如く想像し、而も此想念はやがて救濟の一路となるなり。斯くの如きは、實にギリシア教會の信徒に共通せる宗教的感懐なりしならん。斯くて神との交渉は

凡て神秘的宗教の儀式によりて行はれ、種々なる記號乃至繪畫等を缺くべからざるものとなすに至れり。故にギリシア教會に於ては、萬事形式の中に封鎖せられ生氣ある信仰は全く地に墜ちて神は峻嚴なる義務をのみ強ふる暴君となり、人は只其怒りに觸れざらんとを力め、恰も昔日のユデア教に見る如き面影を呈するに至りぬ。

而して最後に教會組織の大要を述べんに、上に總主教 (Patriarch) ありて教會を總攬し、之に隸屬するに府主教 (Metropolitan) 大司教 (Archbishop) 舊教 (Bishop) 及び補祭即ち神父 (Presbyter) 等を以てせり。而して總主教の置かれたる教會はセントピータスボルク、コンスタンティノブル、アレキサンドリア、イェルサレム及びダマスカスの五教會なりとす。各總主教の下には、聖會議 (Synod) なる者ありて教會の政治を議し、就中コンスタンティノブルの聖會議が各教會に最も重大視せらる。されど斯かる教會の政治は普通信徒の毫も與り知らざる所、且つ彼等は直接に神によりてさへ救濟せられず、必ずや僧侶の媒介によらずんば之を能くする能はずとなせり。故に僧侶の權勢は次第に擴大せられて專擅を事とし、遂に、よらしむべ

し知らしむべからず主義の専政制度を見るに至れり。これ實にロシア及び其他の東歐諸國民が永く君主專政の下に平靜なる生活を送り得し所以なりとす。されど斯かる形式的教會の中に、尙一の自由なる信仰に生ける一派なきにあらざりき。之を遁僧主義(Monasticism)と云ふ。彼等は沈黙を守りて純潔を念とし、現世を遁るゝのみならず教會をも遁れ、虚妄なる教理を避くるのみならず、正教の教理をも語るを好まず、己が目に神の榮光を見るまでは專念冥想して止まず、平靜なる生活と永遠の幸福とを求むる外何物をも貴しとせず。故に彼等に對しては教會もその儀式も何等の價値を有せざるなり。斯くして彼等は浮世の束縛を解脱するが故に、その中にのみ眞の自由あり、獨立あり、生ける宗教的經驗ありと云ふも、敢へて過言にあらざるべし。

七 ローマ教會(天主教會)

次にローマ教會に就いて述べんに、法王はギリシア教會に對して其獨立を宣言せし後何等か強大なる勢力と結托するにあらずんば、その隆盛を來す能はざるを思ひ、フランク王ピロン及びその子チャーレマンと結びてその業を援け、遂にチャーレマンに冠して皇帝と稱せしめ、また教會領を寄進せしめて實力を養ひ、大學を起して人才を養成し、以て重きを法王に置かしめき。然るに後チャーマン國王オットの勢力を得るや、法王はまたその事業を援けて彼に神聖ローマ皇帝の尊稱を授け、こゝに代々の宿志漸く功を奏して帝王の勢を凌ぐに至り、遂にチャーマン國玉と隙を生じぬ。その最も激甚なりしは、法王グレゴリー七世に對するヘンリー四世の反抗にして、時に西曆紀元一一七六年なりとす。されど法王の權勢はこれによりて毫も損傷せらるゝ所なく、反りて益増大し、王位をも左右するに至り、遂に西歐の羈者となりぬ。而してそが最も勢力を極めし時代は、西曆紀元一一八九一年より一二一六年に至るインノーセント三世の御代なりき。かれは實に古來稀れに見る精力と英才とを兼備せる大政治家として知られ、その威望は遍く西歐に亙り、諸王侯は悉くかれを諸王の王としてこれに奉仕し、斯くて專擅横暴至ら

ざる所なきに至れり。
 然らば斯くの如き威望と權勢とを抱擁せるローマ教會は、果して如何なる影響を西歐の諸民族に與へしか。其一は、ギリシア教會と同じく、信徒をしてキリスト教の文明に浴せしめ、以て其野性を去らしめしにありき。縱しや彼等は西暦紀元十四世紀以後に及びて、教會の教へざる道を歩み、教會と異なる目的に進みしと雖、キリスト教の文明は、彼等が斯くの如き進路をとるべき準備として、實に缺くべからざる役目を盡したるものと云ふべし。而してローマ教會は又精神的方面に於ける國家の權力を否定し、諸民族に宗教の自由獨立を教へぬ。これギリシア教會が國家と結合して終に其國民性を作りしと趣を異にし、西歐の諸民族が宗教を國家より獨立せるものとなし、信教の自由を叫ぶに至りし所以なり。
 次に吾人はローマ教會の特質を述べんとするに當り、之を三要素に分ちて論ぜんとす。第一はギリシア教會と共通なる傳説主義、正教主義及び儀式主義にして、所謂カソリック教なること、第二はラティン精神とローマ帝國との後繼者なるローマ教會、第三はセント・オーガスティンの宗教思想乃至感情なり。實にオーガスティン

の思想と感情とは靈的生活乃至宗教的思想の範圍に於て、ローマ教會の師表なりと云ふと敢へて過言にあらず。要するにカソリック教、ラティン精神及びオーガスティンの思想等が相結合してローマ教會を構成せりと云ふを得るなり。
 ローマ教會がギリシア教會と同じく、カソリック教的精神を有せしことは言を待たずと雖、吾人は次の事實に徴して、其然る所以を明かにせんとす。如何なるギリシア教會の信徒と雖若し彼にして一度法王と其使徒的最上權とを承認すれば、ローマ教會の信徒となるを得たり。實にローマ教會とギリシア教會との間に横はる根本の相異は、法王の主權を認むるや否やにありしのみ。故に其他の點に於てギリシア教會の特質は即ちローマ教會の特質にして、傳説主義、正教主義及び儀式主義がローマ教會に行はれしことは、毫もギリシア教會と異なる所なかりき。而して遁僧主義の如きも亦然りとなす。

されど兩教會の間に横はる根本の相異なる法王の主權を認むるや否やを問題として、ローマ教會を観察する時は、こゝに吾人は第二特質なるラティン精神即ちローマ魂の存在するを見るべし。而して謂ふ所のラティン精神とは、神人間に存す

る法律的契約關係と、教會の帝國主義的思想との二者なり。西曆紀元三世紀の頃より既にローマ教會に於ては、其種類の如何を問はず、救濟をば一定の條件を具へたる契約の形に於て現はし、而も其契約の遂行によりて救濟は初めて可能なりとの思想を生ずるに至り、斯くして神の慈悲、恩恵はこの條件の規定に於て現はれ、神はその條件の履行せらるゝや否やに注意しつゝありと説けり。故に經典たると傳説たるを問はず、啓示の内容は悉く法律的形式を具へ來りて、而もそは教會の僧侶のみの占有物となり、普通信者の知る能はざるものと考へらるゝに至りぬ。而して儀式の如きも極めて神祕的性質を有し、一方にては義務的行爲なると同時に、他方に神の恩恵と見られ、懺悔の如きに至りては全然民法上乃至訴訟上の規定と撰ぶ所なかりき。斯くしてローマ教會が其組織に於ても亦國家的形式を取るは、蓋し勢の然らしむる所と云ふべし。故に教會は帝國主義を採りて世界統一の大望を懷き、ローマ帝國の地方的區分法に則りてその版圖を大別し、大監督 (Archbishop) ありて之を治め下に監督 (Bishop) 牧師 (Presbyter) 及び執事 (Deacon) 等を置き、その大綱を握りて全教會を總理するに法王 (Pope) の位を以てせ

り。

實にローマ帝國は滅絶したるにあらず、そは只形式を異にしてローマ教會となりて現はれしに過ぎざりしなり。彼等は以爲らくローマ教會が國家に倣ふて法律と權力とにより世界を支配するは、即ちキリストが世界を支配するに等しと、斯くて如何に敬虔なる信徒と雖、先づ法王の教會に服従してかれの嘉納する所となり、専心教會に歸依するにあらずんば、キリスト教徒として認められざりしなり。故に凡ての信仰と美德とは、教會を離れて何等の意味をも有せざるに至れり。斯かる現象を呈せし所以のものは、實に、ローマ教會は神の國なり。ローマ教會は地上の王國の如く世界を統治すべし等の思想に由來すると見るべし。而して之によりて來たるべき必然の結果は、法王の君主獨裁主義にして、法王は神聖なり、過失をなす者にあらずとの思想を生じ、而もこの思想は直ちにかの傳説主義、正教主義、及び儀式主義に影響して、その内容をば一に法王の意志によりて左右するを得るに至り、遂にかのバイアス (Bias) 九世をして、我は即ち傳説なりと叫ばしむるに至れり。これ等の事實に徴するも、吾人は如何にローマ法王の權勢の大

なりしかを想見するに足らん。
斯くの如くローマ教會は、一方にラテン精神の結果として國家的となり、法王の獨裁的權威を認め、個人は團體の中に還没して、信徒に何等の存在的價値を付與せざりしと雖、尙他方に之と異なる宗教的思想乃至感情の並立するものなきにあらざりき、それは即ち第三の要素たるセント・オーガスタインのキリスト教なりとす。吾人は彼が宗教思想の如何なるものにして、且つそれがローマ教會に對して如何なる關係を有したるかを見んとするに先ち、彼が生涯の事蹟を略述せざるべからず。

セント・オーガスタイン (St. Augustine) は西曆紀元三五四年、アフリカの北部、ヌミディア (Numidia) のタガステ (Tagaste) に生る。母をモニカ (Monica) と云ひ、敬虔なる賢婦人なりきと傳へらる。幼にしてカトリシエジ大學に入り、學業群を抜きしと雖、多血多感なる此青年は漸く世の惡風に染み、中年に至る迄放逸不羈なる生活を送れり。されど三十三歳の時翻然として先非を悔ひ、平和と幸福とに滿つる生活を求め、終にミラン (Milan) の監督長老アンブロシウス (Ambrosio) 西曆紀元三四〇—三九七 の許に行きて洗禮

を受け、キリスト教徒となるに至れり。而して西曆紀元三九一年アフリカの牧師に任ぜられ、後四年を経て又ミディアの一都市なるヒッポレギウス (Hippo Regius) の監督に轉任せられ、此處に多くの民衆に敬虔せられしと雖、遂に西曆紀元四三〇年、天帝の招く所となりぬ。彼の遺著中最も世に知らるゝものはかの懺悔録 (Confession) なりき。

吾人は先にキリスト教の根底に横はる最大問題は神、クリスト及び人間に関する考察にして、神聖論とクリスト論とは既にニケーア會議以後、一定せる解決に達したることを述べたりしも、未だ第三の問題なる人性論に關しては、何等の解答をも下さざりき。然るにこの問題を採りてその解決を試みたる者は、實にキリスト教史上有数の思想家なるセント・オーガスタインなりとす。斯くして人性論は爾來ローマ教會の主要問題となり、ギリシア教會に於ける神性論及びクリスト論と同一關係に立つに至れり。

オーガスタインは以爲らく、人類は必ず救済を要する者なり。何となれば、彼等は罪惡の深淵に生活の苦痛を嘗めつゝあればなり。蓋し人類は罪惡の色に染められ

て之を拂拭する能はず、之が爲めに束縛せられて意志の自由を失ひ、必ずや罪惡を犯さざるべからざる運命を有す。故に人類は自ら己れを救ふ能はず。されど罪惡が眞の罪惡として罰せられんには、自由意志によりて生じたる者ならざるべからず。然らば之より自由意志は生ずべきか。曰く、そは原人にあり。人類の祖なるアダムが意志の自由を以て罪惡を犯せるにより、其子孫なる人類も亦罪惡を犯すべき性情を享くるに至れるなりと。之を原罪説と云ふ。然れども神は正義なると共に慈悲に富める者なるが故に、衷心より人類を救済せんと欲す。されど何人が救はるべきかは、全く神の定むる所にして、人意の如何ともする能はざるものなり。換言すれば何人の救はるべきかは、人間の自由に定むる能はざる所にして、豫め神意によりて決定せられたるものなりと云ふにあり。之を豫定説と云ふ。而して又オースティンは以爲らく、神は正義なるが故に、人類の罪を救はんとしてこれに對する賠償を要求せり。クリストは人類の爲めにこの賠償をなせる者なり。故にかれの媒介によるにあらずんば何人も救はるべきにあらず。教會はクリストの救済的事業を繼承せるものなるが故に、地上に於ては教會以外に何等

の救済的方法なしと、斯くしてオースティンはローマ教會を磐石の安きに置き、以て世界的救済の事業を大成せんとせり。されど彼が斯くの如く教會を救済の唯一通行券となせる思想は、かれの全精神の一側面に過ぎずして、尙他に最も實證的にして経験を重んずる個人的傾向の側面を含めり。彼は一方に於て、吾人は教會の規定する所を信ずることによりて救済せらるべしと説くと同時に、他方に於て、救済は各個人が直接に神と交渉せりとの経験を得ることによりてのみ可能なりと主張せり。換言すれば彼は、全心の愛と美德とを以て満たされ確乎不拔の境地に居ること、即ち義とせらるゝこととなりと考へ、靈なる神を己が生活の根底となし且つ目的となして飢え渴けるが如く神を慕ひ、神の外に何物をも求めざる態度、即ち救済の道なりと教へたり。斯くて彼は神の普在を説きて自然界に神の面影を認め、之を讚美して止まざりき。

斯くの如く二側面を有するセントオースティンの思想は、爾來教會内に教會を中心とする思想と、内的實證を重んずる思想との對流を生じ、遂に教會史上に種

々なる波瀾を惹起するに至れり。故に後に至りて教會の形式的權威に反對の聲を上げ、内心の宗教的經驗を以て眞宗教なりと主張せる人士は、直接又は間接に彼の影響を受けたりと云ふも敢へて過言にあらず。斯くしてオーガスタインの思想は、後に先づ素朴なる獨逸民族の神秘的思想と自由精神とを刺戟して、遂に西曆紀元十五世紀頃より所謂宗教改革の大運動を起さしめ、以て新教の勃興を見るに至れり。

八 宗教改革と新教の成立

我等は既に原始キリスト教より説き起してローマ教會に及び、以てキリスト教發展の梗概を述べ、且つ其特質の概要を指摘したるが故に、最後に新教 (Protestantism) は如何にして起り、如何なる思想内容を有するかの問題を解決せざるべからず。蓋し社會人生の中に起る改革乃至變化は、決して突如として起るものに

あらず、必ずやその背景となり、動因となりて伏在する原因結果の究極に於て一條の導火線に觸れ、以て乾坤一擲の大變動を惹起するものなり。而してこの原因結果の過程、必ずしも平坦なる道路にあらず。それを錯綜せる社會現象の中に求むる、實に荆棘の中に一輪草を摘むの感なくんばあらず。故に吾人はこゝに新教の起り來れる原因を見んとするにあたり、その大要のみを以て満足せざるべからず。

ローマ教會内に二大思潮の相對流するありて、而もその一は即ち新なる宗教思想の淵源たる約束を有せしものなることは、先に叙説せし所なるを以てこゝに之を反覆せざるべし。されど如何なる種子と雖、その地味と栽培との宜しきを得ずんば、之を完全に生長せしむる能はず。然らば當時の人心をして、新なる宗教思想に覺醒せしめし社會状態は如何なりしか。吾人は先づ之を十字軍の遠征より説き起さんとす。

西曆紀元七世紀以後、東方アラビアの野に起れるマホメット教徒は次第にその勢力を増加し、西部アジア及び北部アフリカを併呑して地中海を挟み、東西南の三

方より歐洲を包圍して、キリスト教國を粉碎せんとせり。斯くして彼等はイェルサレムの殿堂を破壊し、敬虔なる巡禮者を迫害せしが故に、歐洲民族は之を坐視するに忍びず、遂に大軍を擧げて之を討たんと企圖せり。之を十字軍と云ふ。而して彼等は西曆紀元一〇九六年より一二〇七年に至るまで、前後十回の遠征軍を起してマホメド教の征服を試みたりと雖、終に満足なる功果を得る能はざりき。斯くしてこの大戦亂の結果は社會人心に種々なる變化を與へたり。

而して第一に起れる變化は騎士、即ち武人が勢力を増大せしことにして、これが爲めに國家は教會の權勢を凌ぐに至りて諸王國の勃興を來し、法王の威力は日々に縮少しつゝありき。之に加ふるに教會は十字軍の遠征と奢移放逸との爲めに、財政に甚だしき困難を感じたりしが、之に反して人民は十字軍の結果、他の民族と通商貿易するを得て商工業の繁榮を來せしが爲めに、遂に經濟上の優者となりて、彼等の社會的勢力は日に増加するに至れり。而して又十字軍の不首尾は、人心をして教會即ちローマ法王の萬能を疑はしめ、他の民族との交通は彼等をして互にその思想感情を交換するを得しめ、以て次第に人知の發達を促せり。斯

くしてこれ等の變動はその必然の結果として、人心を所謂自覺の一境に導きつゝありき。

而して十字軍に次げる新思潮の源泉は、實に當時長足の進歩をなせる學術の研究にありと云はざるべからず。先に教會は諸處に大學を起して、人才を養成し、所謂スコラ哲學を組織してキリスト教の教理を保護しつゝありしと雖、後西曆紀元十二三世紀頃より各大學に自由討究の氣風を生じ、教會の教理を輕視して直接經驗を重んじ、事實の上に立ちて凡ゆる諸現象を解釋せんとし、これと同時に次第に團躰の下に還没せられたる個人の價値を認識するに至れり。且つ西曆紀元一四五三年、東ローマ帝國の遂に滅亡するや、學者は難を逃れて西方に走り、以て古代の文物を輸入せしが故に、イタリヤ其他の西歐諸國に古文學の復興を來し、原始キリスト教の文明乃至ギリシアの文明を研究して、所謂ヒューマニズムの一派を生ぜり。斯くして印刷術の發明は民間にまで新知識を普及せしめ、科學の進歩は教會の教理と相容れずして二重眞理の説となり、航海術の發達は世界を擴大して傳説の危機を招けり。斯くの如き事實は要するに、教會の權力を輕視し

て民間の勢力を増加し、彼等を自覺に導く結果を生ずるのみ。茲に於て先に教會の下に屈服せる北方の諸民族は、自由の叫と共にローマ教會の城砦に突貫せり。思ふに教會は初め彼等をキリスト教の文明によりて教化せんと企てしと雖、彼等は決してそれを正解し得る者にあらざりしなり。何となれば數千百年に互れる生活方針の相違は、決して同一範型の中に民族の思想感情を封入する能はざればなり。無智にして事理に暗かりし彼等は、かのキリスト教の文明に接して、只小兒が老人の物語に餘念なきが如く、之を傾聴しつゝありしのみ。されど教會は舊習慣と舊道徳とによりて枯渴せる老人に等しかりき。何ぞ新進氣鋭にして、新なる境遇と要求とに生れたる青年の如き北方の諸民族を教化するを得ん。彼等は今や明かなる自覺に達せしなり。その結果として生じたるものは、實にかの新教思想と之に伴ふ宗教改革との二者なりとす。

世人動もすればかのルーテルを以て宗教改革運動の創始者なりと云ふ。されど吾人は、既に西曆紀元一三〇〇年頃より國家乃至個人が教會に對してなせる言行の中に、宗教改革の端緒を認めざるべからず。而して其急先鋒となりて教會に

一番鎗を報ひし者は、フランス國王フィリップ第四世なりき。後西曆紀元一三三八年、セルマン國民は教會の意志に反して皇帝を選び、つぎに西曆紀元一三六六年、イギリスは國會の決議に従ふて法王への歳貢を拒絶するに至れり。之と同時にまた個人として教會に反對し、宗教改革の急務なるを説ける先覺者ありき。それは實にオックスフォード大學の神學教授ジョン・ウイクリフ(John Wickliffe) (西曆紀元一三三二—一三八四) プレリグ大學の教授ジョン・フッス(John Huss) (西曆紀元一四一七—一四一五) 及びフッスの弟子にしてボヘミアの軍人なりしチヌカ(Ziska) (西曆紀元一四二四—一四二四) 等なりとす。斯くして鑿たれたる教會破壊の地下坑は已に爆發藥の裝填を終り、人民は一時に覺醒の叫を擧げて、好機將に熟しつゝありき。而して此大事業を完成せんとして現はれし者は、即ちかの有名なる獨逸の宗教改革者ルーテルなりしなり。

マルティン・ルーテル(Martin Luther)は西曆紀元一四八三年、サキソニー國アイズレトメン(Eisleben)に生る。父をヨハン(Johann)と云ひ、礦山夫を業とせり。時は西曆紀元一五〇一年、エルフルト大學に入りて、法律學を研究しつゝありしも、一朝親友の世を去りし由を耳にし、忽然として人生の常なきに驚き、心靈上の慰安を得ん

としてセント・オーガスティン寺院に入り、専ら心を神學の考究に向け、特にオーガスティンの學風に心を傾けたり。時に西曆紀元一五〇五年七月十七日なりき。後三年を経てウイテンベルヒ大學の神學教授になり、越えて十一年ローマに旅行し、教會の紊亂修するなきを見るに及び、常にキリスト教の頹廢を痛嘆しつゝありき。然るに時の法王レオ(Leo)十一世、セント・ピーター寺院建立の資金を得んが爲め、赦罪狀を販賣するに會し、平素の憤慨措く能はず、起つて其不法を鳴らし、西曆紀元一五一七年七月三十一日遂に有名なる九十五ヶ條の反對文を草し、之を己が寺院の門に掲げたり。此宗教改革の叫は直ちに其反響を天下に傳へ、諸侯は教會の專擅を惡みて之に贊し、學者は教會の腐敗を一掃せんとして之に同じ、人民は社會の改善を欲して之を歓迎せり。當時最もルーテルの言動を幫助して宗教改革を唱導せる者を、かのメランヒトン(Melancthon) (四曆紀元一四九〇—一五六〇) 及びサキソニ侯フレデリック(Frederick) (四曆紀元一四四六—一五二五) 三世となす。茲に於て法王は大に怒り、ルーテルを異端者として破門せんとせしも、之に服せずして彼は破門狀を公衆の前に燒きぬ。後西曆紀元一五二一年、新皇帝チャールス五世ウァルムス(Worms)に國會を開

き、ルーテルを召して前言を取消さんことを強ひぬ。されど彼は斷然之を拒絶したるが故に皇帝は彼が法律上の權利を奪へり。然るにかのフレデリック侯は彼をワルトブルヒの城中に保護し、以て其心身の危害を免れしめしかば、此處に於て彼は多年の宿志なる聖書のドイツ譯を完成するを得たり。後彼は宗教改革と新教の宣傳との爲め、東奔西走して同志を集め、所謂ルーテル教會を組織せしと雖、遂に西曆紀元一五四六年、故園に於て天命を完うせり。彼の遺著として名あるものは「ドイツ國民の貴族に告ぐ」(An Address to the Nobility of the German Nation)、「キリスト教徒の自由に就て」(On the Liberty of the Christian man) 及び「教會のバビロンの虜囚」(The Babylonian Captivity of the Church) の三者なりき。

次ぎに我等はルーテルが神學の内容を見んに、彼が宗教思想の發展は實にその宗教的經驗の進歩に密接なる關係を有せり。即ちかれは律法と福音との差別を明かに認め、神とクリストに對する信仰によりて律法の強ふる束縛より免れて靈の自由を感じ、内心の平和を獲得せしが故に、吾人はクリストに對する信仰によりて自由となることを主張し、信仰は吾人の內的義にして眞善美の淵源なり

となせり。斯くして彼は救済を徹頭徹尾神の賜物なる絶對的自由の状態となし、眞信仰に入れる者は彼自身に於て生けるにあらず、信仰と愛とによりてクリストの中に生けるなりとの信念に達せり。而してクリストの信仰によりて自由となるは、決して外的行爲そのものに因りてにあらずして、内心に燃ゆる信念より來たるものなりと教へぬ。斯かる思想に生きたルイテルは法王の横暴を惡みて九十五ヶ條の反對文を公にし、教會の權威に反抗せり。その要に曰く、法王は罪を課すること能ざると共に又それを赦す能はず(九と二〇)。彼若し斯かる能力を有すとせば、牧師も亦其管理せる教會の信徒に對して法王と同一なる能力を有せざるべからず(二五)。眞の懺悔は罪を愛し求むるにあり(四〇)。教會の眞財寶は神の光榮と恩恵とに關する福音のみ(六二)と。斯くて彼はライプツェヒの論争に於て遂に教會には必ずしも法王の必要なきを説き、宗教會議に於ける決議の不可抗力を否定せり。而して彼は又僧侶をば只信徒の役人として、教會の事務を掌る者に過ぎずと主張し、罪の赦免は必ずしも僧侶の手を待つに及ばず、同胞の決議を以て足れりとなし、懺悔の如きも敢へて僧侶に對して行ふ必要なしと公言し、聖晚餐

乃至洗禮等の儀式に關しては、之を以て人を新人と生れしむる能力を有するものとなせども、若しそが信仰によりて伴はれずんば何等の功果なしと論ぜり。斯くの如き思想は遂に信者を悉く僧侶となし、各人直接に神と交接するを得べしと見、僧侶の職能が如何に神聖にして高尚なるも、神の眼より見ればそは野に耕せる農夫、家を整ふる婦人の業務と撰ぶ所なしと云ふに至れり。これ實に勞働と活動とを尙ぶ近代的傾向の結果なりと云ふべし。要するにルイテルの根本思想は信仰によりてのみ義とせらるるとの信念と、聖書に最後の權威を置き、信仰深き者の内的告白を重大視せることにして、その目的とする所は敬虔なる人格の宗教的獨立を保護し、以て一方に古來の迷信と生命なき儀式及び不自然なる僧制とより脱し、他方に僧侶の墮落と宗教的主權とより自由ならんとするにありき。而してその最も特色とする所はそが汎神論的傾向を探り、而も現實的にして活動的生活を楽しむことにありき。斯くの如き思想と、目的と、特色とは管にルイテルに限りしにあらず、凡ての新教的思想に共通せるものと見るべきなり。斯くの如くルイテルが一度カソリック教の専横を惡み、その腐敗を一掃せんとし

て宗教改革の叫を擧ぐるや、ドイツは素より言ふを待たず、西歐諸國の先覺者は互に相呼應して法王の權威を否定し、新思潮に掉して新教會を設立せんとせり。されど宗教改革は、元來團體の下に壓せられたる個人の覺醒に伴ふて起りしものなるが故に、各人その好む所に從ひ、爲めに新教の面目頗る多岐に互り、こゝに之を詳述する邊なし。故に吾人は極めて簡單にルーテル以後に起れる宗教思想の推移を述べ、最後に新教の運動と教會との主なるものを略説せんとす。

ルーテルと同時に、而も彼より獨立して起れる宗教改革をワルリッヒ、ツウングリ(Which Zwingli (四世紀元一四八)と云ふ。彼もとスウツルの一僧侶なりしも、夙くよりヒューマニズムの研究に耽りてスコラ哲學のなすなきを見るに及び、プラトールヒューマニズムの哲學に遡りて古典に精通し、遂に聰明にして冷靜なる理性と活潑にして鋭敏なる社會的情操とを調和せるギリシア的性格を有するに至れり。而して宗教改革に於けるは彼の目的は實に新約聖書の典型に從ひ、神の王國の理想によりて、世俗的なる新キリスト教會を創設せんとするにありき。ツウングリ(ツウングリ)の宗教思想は罪惡と救済とに關する教理にその中心を置けり。彼

に從へば罪は靈肉の衝突より來たる結果にして、靈性と感性とを有する人性には極めて自然の產物なりとす。罪惡は決して傳説の如く祖先の墮落によりて來たるものにあらず、悉く中より發するものなり。斯くの如き罪惡より人類を救はんが爲めに、神は種々なる方法を考慮せり。而して彼は民族の心根に應じて救済の形式を啓示したるが爲め、古來多數の宗教を生ぜしなり。故にキリスト教徒のみ神の啓示を有するにあらず、異教徒と雖天の祝福を受くべしとなせり。これ實に純なるヒューマニズムの思想と見るべし。而して救済は只信仰によりてのみ可能なり。信仰は神靈の働きとも見るべく、又神意によりて我を規定せんとする信賴的、沒我とも見るべし。吾人は救済せられんが爲めには、高き我の力によりて卑き我を制御せざるべからず。故にツウングリ(ツウングリ)は極めて嚴格なる禁欲的生活を主張し、清教徒的傾向を採るに至れり。而して又彼は教會をば撰ばれたる者、即ち眞の信徒の見えざる團體となし、見得る教會は見えざる教會の顯現に過ぎずと説き、國家を以て神の王國の實現なりと主張せり。斯くて彼は凡ての儀式を記號乃至象徴に過ぎずと論じ、ルーテルの説きしが如く、そは決して神秘的の者にあ

らざれども亦全然價值なきものにあらざることを教へたり。斯くの如くツウイングリーによりて起されたる宗教改革運動は、後にかの有名な佛人ジョン・カルビン (John Calvin) (西暦紀元一五〇九—一五六四) によりて繼承せられたり。彼が最大の事業は、實に倫理的制度なる教育と、法律的制度なる國家との區別を徹して、新教會をば管に宗教的團體なるのみならず、國家的團體として組織せしことにありき。其説に従へば萬物は神の自由意志によりて生滅變化し、而も神意は正義の唯一軌範なり。故に我等は決して神意の正邪を口にすべからず。何となれば、神の欲する所、即ち正義なればなり。而して人類の大部分は初めより永久の刑罰を課せらる。されど熱烈なる信仰によれる倫理的修養と社會的貢献とは、吾人をして撰ばれたる者、即ち救済せらるべき者とすを得。而してこの撰擇は、オーガスタインと同じく豫定せられたるものなりき。次にカルビンは教會に關して略ツウイングリーと同一思想を有せしも、眞教會の特質をば聖書に合ふ教理儀式及び戒律を有するものとなし、然らざるものは悉く之を異端なりとして迫害せしが故に、カソリック教と同じく排他的思想を懷くに至れり。

斯くしてカルビン教會は政教一致の制を布き、僧侶は司法及び行政の權を有して、嚴格なる戒律を強ひぬ。これ實に新教會がローマの強大なる勢力に反抗して存立せざるべからざる必然的手段と云ふべく、當時ゼチバ市は新教の城砦に等しく、且つカソリック教會より遁れたる者の避難所なりしが故に、彼等を保護すると同時に、之を鞏固なる團體の中に統一せざるべからざりしが故なり。吾人が尙詳かに宗教改革史を點檢せば、如何に活動的意志と奮闘的能力とを有せしカルビン教會が、感情と忍耐とを主とせるルーテル教會に勝りて、新教の發展の爲めに盡せるかを知るべし。されど吾人が尙深く宗教改革運動の精神と意義とを理解せんと欲せば、管にこれ等の新舊思想の混淆せる教會のみを以て足れりとせず、必ずや自由なる精神と敬虔なる感情とを以て一代の先覺者となり、文明の歸趨を暗示し、且つ新舊兩教會に反對せる思想家に説き及ばざるべからず。次にその二三を例せん。セバステアーン・フランク (Sebastian Frank) (西暦紀元一五四五—一五九〇) は當時の新教的神學に反對して、神人の直接交渉と信徒の人格的自由とを主張し、聖書の權威を打破して

之に代ふるに自然を以てし、自然は神意に充つるが故に生ける聖書と云ふべく、書かれたる者よりも之によりて多くを學び得べしと教へたり。而してカスベル・シウエンゲンマン(Kasper Schwenckfeld) (西暦紀元一四九〇—一五六一)も亦フランクと同じく、當時の神學に反對せる一人なりき。彼は書かれたる聖書よりも内心の聲に重きを置き、敬虔なる情意の中に生けるクリストに絶対の服従を感ぜり。故に彼の死後、其崇拜者はルーテル教會の爲めに逐放せられてアメリカに去り、今尙存続しつゝあり。斯くの如く一代の風雲を捲きて襲來せる宗教改革運動をば、カンリック教會は如何なる方法を盡して防止せんとせしか。彼等は一方に新教主義の神學中に存する矛盾を攻撃し、從來の教理を固執して益之を偏狭なる範圍に封鎖し、他方に教會の秩序及び戒律を嚴にし、僧侶を教育して其權威を保ち、以て在來の勢力を墜さざらんとして現はれしも、とはかのジュスイット派なり。

ジュスイット派(Jesuits)の開祖、イグナチウス・ロヨラ(Ignatius Loyola) (西暦紀元一四九一—一五五六)はスペインに生れて身を軍隊に投ぜしも、後フランスとの戦争に於て廢兵となりぬ。斯くて後エルサレムに旅行して精神上の騎士となり、クリストの馬前に參して

異教徒の征服を企圖せり。故に彼はパリ大學に學びて神學を修め、ライチツツ(Luis de Zavie) (Xavier)等を語らひて新團體を組織し、ジュスイットと稱して異教徒に傳導するに至れり。されど此團體の眞經營者とも云ふべき者は、實にかの能辯と靈智とを具備し、極めて覇氣に富めるライチツツなりき。彼はジュスイット派を軍隊的組織となし、總理(General)州長(Provinciales)及び相談役等の官を設けて、それをクリストの代理者となしぬ。而して彼は又教勢發展の策として青年の教育を重大視し、各所に大學を起して上流社會の子弟を教育せり。斯くの如くジュスイット派は種々なる賢明にして狡猾なる手段を案出して、或は家庭に出入し、或は上流人士を懐柔し、或は人間の性情を看破してその弱點に乘じ、専心教會の隆盛を計りしが故に、一時は侮り難き勢力を有せしと雖、大勢の赴く所之を如何ともする能はず。彼等はフランスに逐はれてドイツに容れられず、英國に迫害せられて昔日の雄圖空しく畫餅に歸し、終にその勢力を失墜するに至れり。

而してローマ教會は、ジュスイット派の成立すると同時に、トレントに二回の宗教會議 (西暦紀元一五四—一五六二)を開き、教會の教理を改釋すると共に、教會内の刷新を行ひ、言論

の自由を束縛せんが爲めに、宗教裁判及び圖書検閲官を設けて新教の勢力を殺がんとせり。こは初めスペインに設けられしも、後西暦紀元一五四〇年に至りてイタリアに移され、教権に反抗する者あれば捕へて之を審判し、その罪過の輕重によりて之を破門し、禁錮し、甚だしきは火刑に處せり。かのギルダノーブルノー(Girolamo Bruno) (西暦紀元一五五〇—一六〇〇)は聖晚餐の教理を否定せる故を以て火刑に處せられ、ガリレオ(Galileo) (西暦紀元一六四二—一六四二)はコペルニカス(Copernicus) (西暦紀元一四七三—一五四三)の地動説を辯護せしが爲めに刑場の露と消えぬ。

之に加ふるに、當時勃興せる政治的勢力の競争は諸王侯をして宗教を利用せしめ、斯くて新舊兩教會の衝突は政治的意味を生じて益、激甚の度を加へ、遂に十六世紀より十七世紀の全般に互りて、西歐諸國に宗教戦争の大慘劇を演出するに至れり。今其梗概を述べんに、ドイツに於ては、トレントの宗教會議の結果、チャールス五世舊教に左祖して之に新教徒と衝突するに至り、フランス王ヘンリー二世新教徒を助けて皇帝の軍を破りしが故に、遂にアウクスブルグに宗教會議を開きて新教の自由を認め、新教徒に與ふるに舊教徒と同一の權利を以てせり。之を

シニマルカルテンの戦争(西暦紀元一五四—一五五五)と云ふ。斯くて新教の勃興は遂にホーランドの獨立(西暦紀元一六〇九)を宣するに至りぬ。されど後ドイツ皇帝ルドルフの時代に及び、舊教は再び上流人士の信頼を博し、新教徒を迫害せしが故に、所謂三十年戦争(西暦紀元一六四八—一七一〇)を惹起し、新教徒の勢次第に衰頽せる時に當り、諸外國の干渉を生じ、事態頗る重大となりしも、終に歐洲列國はウエストファリアに會して媾和條約を締結し、新舊兩教に對して同一なる政治上の權利と、宗教上の自由とを與へて其局を結べり。次ぎにフランスに於ける状態を見んに、初め新舊兩思想の衝突は政黨の紛争と共に喧擾を極めしも、太后カザリン新教の自由を公布するに及び(西暦紀元一五六二)其勢漸く盛大となり、兩教の争鬪は益、危機に迫りつゝありき。されどカザリンの調停その宜しきを得たるが故に、兩教會は暫らく兩立するを得しと雖、終に破裂して新教の迫害を生じ、かのセント・バートロミューの大殺戮(西暦一五七二)となり、殆ど二十年の歲月を戦亂の中に經たり。斯くして後ヘンリー四世フランスに君臨するに及び、新教の自由を公許するに至り、こゝに初めて平和なる天地を見得たるなり。時に紀元一五九八年なりき。而して最後にイ

キリストの状態を述べんに、ヘンリー八世(四世紀元一五〇—一五四七)のとき、イギリスはローマ法主より獨立して大英國民教會を設け、後次第に新教思想を輸入して新教の盛大を來たし、エリザベス女王の治世(八世紀元一五五三—一六〇三)は實に新教の全盛の時なりき。然るに其後チャールズ一世即位するに及び、國會黨と王黨との衝突を生じ、新教と舊教との争闘となりしも、クロンウエルの出て、國會黨の勝利に歸し、王を弑して共和政を布くに至れり。斯くて舊教は永くその勢力を恢復する能はざりしも、西曆紀元一八二九年に及びてオーコンネル(四世紀元一八四七—一八七七)などの出づるありて、舊教はその宗教的自由と政治的權利とを獲得すると共に、これに次ぎてニューマン(四世紀元一八〇〇—一八九〇)のオクスフォード運動あり、斯くて舊教は次第に隆盛の運に向ひたり。

然らば斯くの如き新舊思想衝突の結果なる社會擾亂の下に伏在せる新思想發展の過程は如何、吾人は下にその梗概を見ざるべからず、前に述べしが如く、宗教改革運動は、カンブリッジ教會の枯渴せる論理的乃至宗教的精神に對する反動として起りたるものなりと雖、未だ宗教そのものに對する反省的批判に來らず、偏に

宗教的直接經驗を根底とせる没理性的努力に過ぎざりしが故に、神秘的にして狂信的なる傾向を免るゝ能はざりき。されど十七世紀の中葉より、之に對する反動として宗教の合理的批判を生じ、所謂啓蒙的運動を惹起するに至れり。その原因を尋ぬるに、自然科学の進歩に伴ふ歸納的研究法の結果、自然界の合理的説明を生じ、その影響は延いて哲學乃至宗教に及び、萬事を理知によりて判断せんとし、以て宇宙、人生の統一的原理に達せんとする欲求にありと見るべし。

先づ自然科学の方面より觀察せんに、かの有名なる天文學者ガリレオは、コペルニカスの説を繼承して天體の運行を説き、ケプラー(四世紀元一五七〇—一六三〇)及びニュートン(四世紀元一六四二—一七二七)に至りて、天體の運動に存する合理性をば自然現象全體に及ぼし、以て之を統一的に説明せんとせり。斯くして彼等は教會の世界創造説を否定し、アダムの墮落よりクリストの再來に至る宇宙の變遷に關する傳説を破壊し、中世紀の幻想的神話的世界觀に一大痛棒を與へたり。此傾向の成果として現はれしものを理神教と云ふ。吾人は後に至りて其梗概を述ぶる時あるべし。此理神教の新運動は哲學界を勵して、一方にデカルト(四世紀元一六五〇—一六五九)

の唯我獨存の根本原理を生じ、スピノーザ(Spinoza) (西暦紀元一六六三)の汎神論となり、ライブニッツ(Leibnitz) (西暦紀元一六四四)の原子論と化し、他方にベーコン(Bacon) (西暦紀元一六一六)の歸納法と四種偶像説、ホッブス(Hobbes) (西暦紀元一五八八)の唯物論等を経てロックス(Locke) (西暦紀元一六三三)の感應的經驗論となり、遂にかの有名なるヒューム(Hume) (西暦紀元一七三六)の極端なる經驗論を生ずるに至れり。彼はロックが經驗を尊重して、之をあらゆる知識の根底となせし論據より出立して、實體性及び因果性の論理的範疇としての價值を否定し、鋭利なる推論によりて因果的連續の不可能を證し、宗教は決して合理性を有するものにあらずとなし、凡ゆる古來の宗教を研究して、これ等は只人類の想像力と感情との産物に過ぎざることを示し、以て後に起れる宗教の歴史的研究の先驅をなせり。

されどこの反動として十八世の後半に至り、所謂第二期文藝復興を來して、宗教の價值を保護せんとする傾向を生ぜり。そは從來の啓蒙的思潮の中に存せし合理的法則の偏重より、人格の能力と價值とを救ひ、あらゆる悟性の桎梏より脱出して、自由に活動せんとする人格の必然的欲求より來れる者なり。故にかれ等は

理知と情意とを峻別して、宗教のことは前者の與り知る能はざる範圍にありと論じ、情意中心の近代的思潮の先驅をなしぬ。その先導者ほかのフランスの革命的思想家なるルソー(Rousseau) (西暦紀元一七二七)なりき。彼は實に狂熱的態度を以て悟性に對する情緒文明に對する自然社會に對する個人の自由と權利等の價值を辯護せり。而して彼が自然に歸れぬ絶叫はドイツに反響して、時に多感なる改革者を起たしめ、時に天才的詩人を覺醒し、時に敬虔なる宗教家を喚び起せり。先づ其改革的豫言者を擧ぐれば、第一にヘルデル(Herder) (西暦紀元一七四四)を推すべく、次ぎて此傾向は文藝の方面に於て、ゲーテ(Goethe) (西暦紀元一七四九)及びシルレル(Schiller) (西暦紀元一七五九)を生み、哲學の方面に於て、カント(Kant) (西暦紀元一七二四)及びフイヒテ(Fichte) (西暦紀元一七七四)等を出だしぬ。

斯くの如きドイツの詩人及び哲學者が採れる人格の尊重と情意中心の思想とは十九世紀に入りて一層感情的となり、沒悟性的となり、社會の秩序及び國家の法律を無視する新傾向を惹起するに至れり。之を吾人はロマンティシズムと云ふ。こは從來の新思潮と異なるのみならず、そが詩的幻想と感情的放逸とを生活指導

の標準となす限りに於て、古典主義とも其趣を異にせり。されど後、彼等はフイヒテの理想哲學を採用して個々の自我を神の全生活の中に還没せしむる神秘的汎神論をとるに至りぬ。之實にロマンティズムが何等かの客觀的内容を得て、自我の空虚なる自由を充し、そを一般的價值ある權威に結合せんとする要求を生ぜしが故なり。斯くして一方には宗教及び教會の變化を來し、他方には宗教的史實各國民の發展及び一般人類の文明史等に關する新研究を喚起せり。此思潮の先鋒となりし者はシュライエルマハル(Schleiermacher) (四世紀元一七六六) 及びノツァリス(Novalis) (四世紀元一七七一) にして、シケリング(Schelling) (四世紀元一七七七) 及びヘーゲル(Hegel) (四世紀元一七七一) 等之に次げり。而して之に伴ふて起れるキリスト教史の合理的研究者としては、所謂ドイツのテュービンゲン學派の代表者なるストラウス(Strass) (四世紀元一八七四) 及びバウエル(Bauer) (四世紀元一七九九) 等なりとす。斯くて現今キリスト教の神學者は、偏に如何にせばクリストの福音を吾人の日常經驗によりて理會し、最近の科學乃至哲學によりて解釋し得るかに腐心しつゝあり。

九 新教の主なる運動と教會

最後に吾人は新教思想發展の中に起れる運動と教會とを述べんとして願ふに、その數の夥多なる實に數千を以て數ふべく、其各に就いて説述するは、泰西の専門學者と雖、至難の事業として企圖せざる所なり。況んやこの小冊子に於ておや故に我等は就中重大なるもののみに關して、而も其起原及び教理の極めて單簡なる叙説に満足せざるべからず。而して前に述べしが如く、宗教改革は古代文明の復活と、自然科學の勃興とに伴ふ個人の覺醒にその源を發し、其結果たる自由を重んじ、直接經驗を尙び、現實に即するにありしが故に、これ等の特質は夫れ夫れ新教の各運動と教會とによりて體現せられたり。下にその大要を述べべし。初めルーテルが宗教改革の叫を擧ぐるや、こゝにそが極めて狂信的傾向に富めると見て、之に慍らず、基督教として一層實際的即ち世俗的宗教たらしめんとす

る一派を生ぜり。その主唱者をメンノ・シモンズ (Meno Simons) と云ふ。彼はネザ
ーランド人にして、最初カソリック教會の僧侶なりしも、後に聖書の研究に耽り、新
教思想を知るに及びて新教理を説き、北部ドイツに所謂浸禮派 (Baptists) を組織
し、平民的社會に適應すべき憲法を制定せり。斯くて彼は西曆紀元一五六一年ホ
ルシタインに於て死せしと雖、後この教派はドイツよりイギリスに渡り、アメリ
カに傳播して今尙こゝに榮えつゝあり。この教派の特質は、聖書中に現はれたる
天國をば、その純なるキリスト教的社會生活の中に實現せんとするにあり。而
して彼等は小兒の洗禮を迷信的行爲となし、政治的興味を否定して積極的に政
權に關與するべからずと説けり。これ實に原始キリスト教會とその軌を一にし、
又トルストイとその主義を同するものなり。

ユニテリアン派 (Unitarians) は、初めスウヰツルに避難せるイタリーの新教徒により
て組織せられ、かのレリオソチニ (Lelio Sozzini) をその首領となせり。されど西曆
紀元一五六二年、かれの死するに及び、この一派は各所に放浪して最後にポーラ
ンドに入り、こゝに初めて教會を組織することを得たり。その教理はレリオの物

フ、ウ、ス、ツ、ス、ソ、チ、ニ (Faustus Sozzini) の制定せし所にして、その特質は實にカソリッ
ク教會に對する合理的批判にあり。即ち彼等は教會の三位一體説を否定せり。
何となれば一靈格に三位を滅するは、明かに神の本質なる統一性と兩立せざれ
ばなり。彼等は又クリストの神人兩性説に反對せり。何となれば一人格中に神人
の二性は決して存在し得べからざればなり。而して特に彼等は救濟の原理に峻
酷なる批判を下し、クリストの死によりて初めて贖罪は完成せられたりとの思
想は、罪人をも赦すてふ神の觀念と矛盾し、且つ正義の倫理的內容に反すと云ひ、
人類は凡て救濟せらるべしと説けり。斯くて彼等は自己の信仰を述べて曰く、ク
リストはその本質に於て人なれども、そが超自然的出産によりて他の人類と異
る。彼は神意を傳へんが爲めに、神によりて送られたる人類の導師なり。而して彼
は神命を固執して死の苦痛をも嘗めしが故に、神はその報酬として彼を天國に
招けり。故に彼は今尙自然と歴史とを支配しつゝありと。而してこの教派の歴史
的意味は、實にかの啓蒙運動の先驅をなせることにありと云ふべし。

次にオランダの法律學者なるグロチウス (Grotius) (西曆紀元一五八〇—一六四五) はキリスト教徒

の倫理的乃至法律的自由を主張して、個人的狂信主義を唱へたりしが、其成果として自ら友會(Friends)と稱するクヱーカー宗(Quakers)を生ぜり。而して此教會の信條は、紀元一六七六年、ロバート・バークレイ(Robert Barclay) (四世紀元一六九四—一六九一)に依りて制定せられたり。其根本思想は實に個人の心靈に輝き出づる内的光明を以て、凡ゆる啓示の根源となすにありき。故に如何なる宗教的信仰乃至啓示と雖、此内的光明に其根底を置かざるものなく、キリスト教の如きは其最も進歩せるものなりと説けり。されどキリスト教と雖亦必ずしも最後の啓示又は眞理にあらず。何となれば一層高き眞理と、啓示とが、後に來たる豫言者の内的光明によりて示さるべければなり。斯くの如く聖書にして既に相對的價値を有するに過ぎずとせば、他は推して知るべきなり。儀式の如きは全然無意味のものとなり、洗禮は精神的のものなるべく、聖晚餐はキリストの靈的一致ならざるべからずと主張せり。故にクヱーカー宗は僧侶を廢して各信徒を平等視し、敬虔と誠實、節制と忍耐、寛容と博愛等を以て最大の美德となし、兵役を拒みて社交的虚禮を無視し、他人に對して一の尊稱を用ひざりき。然るに後クヱーカー宗徒は遂にイギリスに容れられず

して米國に遁れ、茲に強大なる教會を作るに至れり。今彼等の目的とする所を述べんに、彼等は中興の主ウィリアム・ペン(William Penn) (四世紀元一六四—一七一八)の意志に従ひ、一方に宗教的自由を實現すると共に他方に政治的自由を獲得せんとし、奴隸の開放を遂行すべきことを痛論せり。これに依りて吾人は自由、平等の如き近代思潮が、如何にクヱーカー宗によりて鼓舞せられたるかを知るべし。

清教徒(Puritans)が鮮明なる旗幟を掲げて宗教界に現はれしは、かのエリザベス女王の御代なりき。然れどもその淵源を尋ねれば、實にウィックリフ即ちロラード派(Lollards)の影響にまで遡らざるべからず。何となれば其間に多少の相違こそあれ、此二宗派は夙くより歴史的に密接なる關係を有し、且つ共に神人間に第三者の介在を否定すればなり。初めエリザベス王位に即くや、大英國民教會の隆盛を計らんが爲めに、大監督パルカー(Parker) (四世紀元一五七五—一五七五)に命じて其組織、信條及び典禮等を制定せしむ。されど一派の牧師ありて之に反對し、一層嚴格にして純清なる生活の形式を要求せり。故に世人之を清教徒と云ふ。清教徒は其根本に於て、略統一せる思想を有せしと雖、尙其間に多少の異説なきにあらざりき。斯くて

一はカートライト(Cartwright) (四世紀元一六〇三)によりて監督教會(Episcopal Church)となり、他はケンブリッジ大學の神學教授マーガレット(Margaret)によりて長老教會(Presbyterian Church)となれり。此兩教會の差異は單に其教會組織の如何にあるのみ、即ち前者は原始キリスト教會の監督長老制度を採り、後者は長老制度を以て理想となせしに過ぎざるなり。而して後西曆紀元一五八〇年に至り、ロバート・ブローン(Robert Browne) (四世紀元一六三三)によりて獨立黨と稱する第三の宗派を生じ、信仰は人々の心に屬するものなれば必ずしも國教を定むるの必要なしと論じて、所謂自治的組織を採用せり。故にこれを自治教會(Congregational Church)と云ふ。クローンツェルの屬せし所のもの即ちこれなり。而して是等信徒の多くは、十六世紀より十七世紀に互れる宗教的擾亂の結果、遁れて新大陸に移住したるが故に、清教徒はアメリカに於て最も盛大を極めつゝあり。

吾人は、先に自然科学の勃興に伴ふて、宗教をも合理的に解釋せんとする多くの學者ありて、一種の思想運動を起したることに言ひ及べり。而して斯かる傾向の思潮に棹させしものをデリスト(理神教徒)と云ふ。その著名なる者を擧ぐれば、アン

トニー・コリンズ(Anthony Collins) (四世紀元一六七) トマス・ウールストン(Thomas Woolston)

(四世紀元一六六) 及びマシュー・ティンダル(Matthews Tindal) (四世紀元一六五) 等なりとす。今

此理神教(Church)の特質を見よ。そは宗教思想中に決して神秘的乃至冥想的要素を交へず、斯かる宗派をば悉く擠排して之を迷信となし、神は實在として認識せらるれども、自然界に内在して之を支配するものにあらず。初め神が宇宙を創造するや、彼は其中に吾人の見るが如き發展と運動とをなすべき勢力を付與したるが爲め、萬物は各、斯くの如き進歩と運動とをなすべき能力を本具す。故に神は今や自然の運行に關與せざる者となれり。斯くしてデリストはキリスト教を必ずしも缺くべからざる者となさず、吾人が其中に發見する凡ての美德は本具的に存在して一の新奇なるものなしと説き、啓示の如きに至りては全然迷信の結果なりと論じ、世に人類の道德的改造の如きものなし、善惡は本具的勢力の發展如何にあるのみとなしぬ。而して理神教は後一方にフランス及びドイツの宗教思想に大なる影響を與へて、宗教の歴史的研究の先驅をなし、他方に遠く大西洋を渡りて新大陸に傳播せり。

悲雨慘風を極めしかの三十年戦争は、ドイツをして殆ど荒廢の原野と化せしめ、國力疲弊して人心に懷疑の雲暗く、僧侶は徒らに枝葉の争鬪に耽りて民衆の救済を思はず、此時に當り、宗教改革によりて來たるべき充分なる功果は未だ來らず、それを完成せんが爲には吾人は同盟せざるべからず、との宣言をなして現はれし一導者ありき。それをフリン・ヤコブ・スベナー(Philip Jacob Spener) (四曆紀元一七〇三)と云ふ、彼は高尚なる道德的觀念と、鋭敏なる實際的能力とを具備し、驚くべき雄辯を以て教會の精神的廢頹を叫び、ルーテルの時代に現はれしが如き宗教的生活に歸らんことを説けり、かくて彼は教會の革新を要求し、生命なき哲學乃至科學の知識よりも、偏に敬虔なる生活を尊重せり。故に世人之をピータイズム(敬虔主義)と云ふ。而して其本質とする所は、教理の如何にあらずして、社會的事業にありき。即ち彼は教會の革新を計らんが爲には、先づ僧侶を矯正し、信徒を教育せざるべからずとなし、各所に宗教的教育を目的とする會合を開き、互に其宗教的經驗を告白するを以て信徒の義務となせり。後にフランケ(Franke) (四曆紀元一七〇六)なる者あり、スベナーの事業を繼ぎ、ハルレに大學を起し(西曆紀元一六九四)て青年を

教育し、孤兒院を設けて社會の改良に努めたり。されどフランケ死して後、ピータイズムはその勢を失ひ、今は南方ドイツにその殘骸を見るのみ、而して現今彼等の目的とする所は、下層社會の改善にあり。

次にメソヂイスト派(Methodists)を見るに、こは其起源をジョン(John) (四曆紀元一七〇)及びチャールズ・ウェスレー(Charles Wesley) (四曆紀元一七〇三)の兄弟に發す。彼等は當時イギリスの新舊教徒が互に相争ひ、次第に宗教の衰ふるを見て之を救はんと欲し、宗教的生活の規則的習慣を養はんが爲め、オックスフォードに一俱樂部を設け、其事業として貧者病者を慰問し、出獄人の救済に努力せり。時に西曆紀元一七三九年なり、其教理は之を四段に分ちて述ぶるを得、第一に(一)正教主義は、云ひ得べくんば、單にそは宗教なりと云ひ得るのみ、(二)宗教は消極的の者にあらず、積極的に善をなし、敬虔の行爲、敬虔の事業をなすことによりて成立す、(三)宗教とは即ち神の姿を心魂に銘し、內的正義と、神的平和とを享樂するの謂なりと論じ、第二に、斯くの如き境地に至る迄は、聖典を信ずる、即ちイエスキリストを信ずるより他にあらずと教へ、第三に、この信仰によりて、惡をも淨化する主を信ずる者は、イエスの贖

罪の爲めに罪惡より救はるべしと説き、第四に、救はれたる吾人は天國の幸福を享くべく、吾人はキリストと共に天國に坐すべしとなせり。而して後に至り、メソヂスト派は多くの分派を生じ、又西暦紀元一七六六年、アメリカに渡りて盛大なる教會となれり。

十八世紀の初葉、イギリスにジェームズ・レリー (James Relly) なる者あり。彼は初めカルビン教會に屬したりしも、後其教理に反對し、若しキリストにして人類の罪を贖ひしならば、彼等は畢竟悉く救濟せられざるべからざる者なりとの結論に達せり。故に人類は悉く救濟せらるべしと叫びて、彼はロンドンの中央に一團體を組織せり。之を普及福音派 (Universalists) と云ふ。而してこはイギリスに於て繁榮を來さざりしも、後レリーの弟子なるジョン・ムレイ (John Murray) (西暦紀元一七四一—一八一五) によりて、アメリカに輸入せられたり。時に西暦紀元一七七年なり。後九年を経て、マサチューセットに初めて教會を見るに至り、次第に盛大に赴けり。ムレイに繼ぎてホゼア・バルロン (Hosea Ballou) なる者あり。ポストンに第二普及福音教會を設けてその管理者となり、教會の神學を組織せり。

新教の運動中にありて、最も特殊なる面目を有し、最も世人の注意を惹きつゝあるものに二あり。一をモルモン宗 (Mormons) と云ひ、他を救世軍 (Salvation Army) と云ふ。吾人は先づモルモン宗の梗概より述べべし。十九世紀の初葉に於て、ソロモン・スパルディング (Solomon Spaulding) なる者あり。彼は初めペンシルバニアにある長老教會の遊説牧師なりしも、神世の教理 (即ち邪惡は悉く滅亡してキリスト再び降臨し、一千年間神政を布くべしと云ふ説) を信じて、アメリカの土人をイスラエル民族の後裔となし、西暦紀元一八一二年、モルモンの書なる冊子を刊行してこの思想を公にせり。後にシドニー・リグデン (Sidney Rigden) なる者あり。スパルディングの著書を見るに及び、之を訂正補足してキリスト教會 (Disciples of Christ) の神學と混じりて己れの理想を體現する教會建設の具となさんとせり。然るに恰も當時マンチエスターの一青年にしてト占術に長じ、筮杖を携へて諸方を巡り、大に人心を收攬し得たるジョセフ・スミス (Joseph Smith) なる者ありき。西暦紀元一八二八年、來りてリグデンに會し、越えて三十年再びモルモンの書を更に訂正増補して、之をモルモン宗の經典となせり。今その内容を見るに、そはアメリカの土人が、そ

の本國なるユデアを去りてこの地に移住せる時より、ニューヨーク州オランダリオにあるクモラー山の戦争に於て、彼等の一部が絶滅せる西暦紀元三八四年に至るまでの、彼等が盛衰とその運命とを記載せるものなり。而してこの戦難を免れたる土人の中に、モルモン及びその子モルモニ(Mormoni)の二人ありき。モルモンはその子と協力して、神の啓示たる王及び豫言者の聖典を輯め、これをクモラー山の下に埋没せり。何となれば、彼は後世眞の豫言者出て、之を發掘し、以て世に紹介すべしとの啓示を得たればなり。モルモンの書とは即ちこの記録にして、ミスは自ら之を發見せる眞の豫言者なりと公言せり。その根本思想を見るに、彼等のみを眞神の民なりと主張し、就中ミスが神との交通によりて得たりと稱する一夫多妻主義の如きに至りては、實にキリスト教徒をして最も嫌惡せしめし所のものなり。故に彼等は他のキリスト教徒の迫害に逐はれて西暦紀元一八四七年、ミスの後繼者ブリグハム・ヤングに(Brigham Young) (西暦紀元一八七〇)に導かれ、ユータ州サルト・レークの谷に隠れて一大都市を建設したり。されどリグデン及びスミスの子ジョセフ・スミスは、ヤングの權勢に服せずしてその教理を否定

し、善良なるモルモン宗徒のみを率ゐてオハイオ州キルクランドに定住し、改革キリスト教會を組織して自ら眞のモルモン宗なりと宣言し、スバルディングの著はせる「モルモンの書」をその經典となせり。而してかれ等は、この經典中より、一夫多妻主義乃至慈善主義を嚴禁せる章句を引用して、ヤング等の思想に反對しつゝあり。

次に救世軍に就いて述べんに、其創設者は世人の知るが如く、かの有名なるウリアム・ブリス(William Booth) (西暦紀元一八二九)その人なり。彼は西暦紀元一八六五年七月五日、救世軍は時代の一大要求に應じて起れり、との宣言を以てロンドンの中央にその傳道の端を開けり。こは一種の社會主義にして、彼は物質文明の進歩するに連れ、貧富の間隔は益々其甚しきを加へ、殆ど救ふべからざるを見るに及びて、黙坐するに忍びず、キリスト教の眞髓を提げて社會の改良を計り、貧民の救済を行ひ、以て世の罪に惱み、行くべき道に迷へる民衆を慰め且つ導かんと思ひ立ちしなり。而してそが漸く盛大を來たすに及びて、彼は之を軍隊的組織となし、嚴格なる軍政の下に之を統一するに至れり。時に西暦紀元一八七八年なり、故に之を

救世軍と云ふ。而して救世軍の神學は、かのメソヂスト派の思想と同一にしてその最も重大視する所は罪惡に關する教理、意志の自由、悔恨の價値、クリストに對する信仰及び民衆救濟の使命等なり。今その發展の概觀を述べんに、そは西曆紀元一八八〇年、レールトン (Railton) に導かれてアメリカに入り、翌年ブリス嬢の指揮によりてフランス及びスウヰツルに入り、その翌年オーストラリアに現はれ、ニュージールランドに渡り、後インドに傳播し、斯くて全世界を通じて彼等の異様な姿を見ざる處なきに至れり。故に彼等は豪語して曰く、見よ世界何れの土地か我等の事業の及ばざる處かあると。而してその社會的事業の主なるものは飲食店を開きて貧民を救ひ、獄中に説教して罪人を善導し、鰥寡孤獨の爲めに計り、家なき者に家を與へ、職なき者に職を與へて、専心社會組織の缺陷を補足救濟することにある。

マホメット教

原始時代の人類が懐ける神秘思想より胚胎せし傳說的信仰の上に立ちて、世界の民衆に善生の方針を與へんが爲めに生れたる人文史上最後の宗教は、實にアラビア (Arabia) の荒野に叫べる豫言者モハメット (Mohammed) を教祖とせる一神教なりき。吾人は之をマホメット教と云ふ。泰西人の所謂イスラム (Islam) 又はモハメダニズム (Mohammedanism) 即ちこれなり。

モハメットが世にありし當時、アラビア人の宗教は他のセミチック人種のそれと同じく、靈魂崇拜にして種々なる儀式を以て祭祀せられたる神を有し、就中アラブ (Allah) を最高にして最古の神となし、アラット (Allah) ウヰザ (Uzza) 及びマナット (Manat) 等の諸神を之に隷屬するものと見たり。而して彼等はまた古代の民族の如く、フンテインを崇拜して井戸乃至木石等を神の聖地となし、毎年一回こゝに集りてその神の祭典を行ふを常とせり。カーバ (Kaaba) はメッカ (Mecca) に住せしコーレーシヤ民族の神、アラ一の聖地にして各民族の崇拜を集め、その祭典を行ふや各地より來たる順禮者を以て充され、且つ商業の中心地なりしが故にこの地の住民は夙に諸民族の思想習慣に接するの機會を有せり。さればアラビアの内地に住するユデ

ア人又はキリスト教徒の思想はメッカの敬虔なる人心を感化し、所謂ハニファイト(Hanifites)なる一神教的思想を有する者を生ぜり。彼等は必ずしも有意的に新宗教を開かんと努力せしにあらざれども、その歴史的關係に於ては實に後に來れるマホメット教の先驅をなせし者なりき。

モハメットは西曆紀元五七〇年八月廿九日メッカに生れ、コレシ民族に屬す。幼にして父母を養ひ祖父の許に養育せられしも、その死するに及び、叔父なるアブタリブ(Abu Talib)の食客となり、牧羊に従事して青年時代に達せり。廿五歳の時、彼は豪商の寡婦カーディジャー(Khadijah)の支配人として之に仕へ、後幾程もなくして彼女と結婚し西曆紀元六一五年かの女の死するに至る迄平和なる家庭生活を送りぬ。されどそは決して無意味なる生活にはあらざりき。彼は屢、商業の爲めにシリア或はパレスタインを訪ひ、ユデア人又はキリスト教徒に接する機會を得、一神教的信仰の種子を播かれ他日世界の宗教的天才として發芽すべき素地を作りつゝありしなり。之と同時に吾人は又當時メッカに於けるハニファイトの徒より、彼が多大の感化を享けしとを忘るべからず斯くして彼は何時しか孤獨を好

み冥想に耽るを樂しむに至り、同胞が眞神を忘却して邪道に彷徨するを憐み、遂に自らハニファイトとなり、イスラムの中に自己の善生を求めんとせり。イスラムとは正義によりて唯一眞神に奉仕するを意味す。而して一夜メッカに近きヒラ(Hira)山上に見し幻影の中に現はれたる天童ガブリエル(Gabriel)の啓示によりて傳道の指命を承け、後屢之に類する天啓に接して遂に自己をクリストと同様神によりて招かれたる豫言者なりと確信し、傳道を以てその天職となすに至れり。モハメットが豫言者の自覺に達して傳道的生活に入れるは實に四十歳の時なりき。彼は決して民衆の舊き信仰を全然破壊し、之に代ふるに新なる宗教を以てせんとしたるにはあらず。その主眼とする所は從來の迷信的傳説を打破して、精神的、一神教を開かんとするにありき。故に彼はその國人が最高の神として崇拜せるアラハを以て唯一眞神となし、之に奉仕する道を教へ、現世に於ける人類の義務及び責任を明かにせんと欲したるのみ。最初彼は傳道の端緒として近親の間を説き、その認容する所となるや、廣く世界に向ふて布教せんと欲し、先づメッカの市民に對しぬ。されどそは衆人の聽く所とならざりしが故に、彼は奮然起ちて彼

等を呪ひ、遠からずして神罰の來たるべきを豫言せり。茲に於て峻烈なる迫害は生じぬ。豫言者の生命は實に風前の燈火に比すべき者ありき。彼は古代の豫言者の如くそを耐へ忍ばんとせしも、未だ固陋なる迷信的宗教より醒め來らざるメッカに於ては事の容易に成就すべからざるを悟れり。時にメディーナ (Medina) より來れる順禮ありき。彼等はモハメットの人格と教理とを能く理解するを得彼を此逆境より救はんとし、共にメッカを去るべしと勸告せり。茲に於て豫言者も亦彼等が敬虔の念深きに感じ、意を決してメッカを棄てぬ。時に西曆紀元六二二年七月十六日なり。之をヘギラ (Hegira) と云ひ、マホメット教の紀元を劃す。

メディーナに來りてモハメットの事業は急轉直下の勢を以て成就しつゝありき。メッカに於て喪家の犬の如くなりし豫言者は、メディーナに來りて教會的國家の主腦となりぬ。彼の強大なる精力と高潔なる態度とは悉く市民の同情を博し、其説く所の教理は人心に深大なる感化を與へ、遂に推されてメディーナの主權者となれり。茲に於て彼はメディーナに政教一致の制を布き、國家を以て教會となし、マホメット教國の基礎を置けり。斯くして教會の盛衰は一に懸りてメディーナの興亡にあるに至りぬ。

故にマホメット教の隆盛を來さんとせば、必然の要求としてメディーナの強大を來さざるべからず。茲に於て祈禱は練兵となり、禮拜堂は練兵場と化し、施物は租税と變じ、以て新なる神政王國の繁榮を計れり。斯くしてメディーナは旭日の勢を以て武力を四隣に張り、次第にマホメット教は他の民族に傳播するに至りぬ。故に隣邦の君主酋長はメディーナの爲めに自己の領土を侵害せられんことを恐れ、改宗者を迫害してマホメット教の侵入を妨止せんとせり。信仰の自由はモハメットが信條となせし所、唯一眞神の崇拜者を迫害する者を見て何ぞ默座するに忍びん。豫言者は遂に彼等を惡魔の子なりと呼び、正義の劍を執りて起てり。西曆紀元六三〇年彼は大軍を率ゐてメッカを攻め、之を征服して曩日の迫害に酬ひぬ。是實にマホメット教徒が他日世界を席捲せんとする端緒にして、また新教會の內的結合を鞏固ならしむるに與つて力ある者なりき。後二年を経て彼は信徒一萬を具し、メッカを訪ふてカーバに最後の禮拜を行ひ、アラファト (Arafat) 山上に立ちて聖訓を垂れぬ。こはクリストが山上の説教と並稱せらるゝ者なり。其言に曰く、善男女よ、わが説く所を聽け、我は再び汝等と相見る能はざらん。聽けよ、汝等の生命と財産とは死

に至る迄互に相犯すべからざるものなり……汝等は現世の業によりて神の御前に審判せらるべきものなることを記憶せよ。汝等は夫或は妻に對して各義務と權利とを有する者なり、汝等の妻を虐待する勿れ……我誠に神の言葉によりて之を告ぐ、汝等は己れの食ひ且つ着る者を以て汝等の奴僕を養へ。若し彼等にして許すべからざる罪を犯さばそを解雇せよ、決して虐待すると勿れ。何となれば神の僕は終に主の御前に審判せらるべければなり……善意よりするにあらずんば一として美しきものなし。汝等は去りてわが言を世界の民に傳へよ。彼等は必ずや汝等の如く喜びて之を聽かんと。メディーナに歸りて後も彼はその老軀を起して國政を掌握し布教に盡力せしと雖、自然法の強大なる力をば如何ともする能はざりき。西曆紀元六三二年六月八日祭壇の前に座して最後の祈禱をなせし後、室に歸りて愛する妻の腕に抱かれつゝ、遂に眠るが如く逝きぬ。享年六十三なり。

他の宗教的天才と同じくモハメットはその思想及び教理をば筆と紙とによりて後世に遺さざりき。されどかれの死後幾程もなくしてその秘書官なりしザイド・

イブン・サドット (Zaid ibn Thabit) 第二代の教主アブ・バクル (Abu-Bakr) の命を奉じて祖師の傳記と教理とを編輯し、一卷の書を作れり。之をコーラン (Koran) と云ひ、マホメット教の聖典にしてアラビア語によりて書かれ、百四十章よりなる。教徒の信仰によれば卷中の言、悉く神の啓示にして、天童の豫言者に傳へし所なりと云ふ。モハメットはユデア教とキリスト教との感化によりて此宗教を開きしが故に二者の思想を明かにその中に見るとを得べし。即ち一面に於てそはユデア教の如く國家と教會とを同一視するも、他面に於てキリスト教の如く民族的色彩を脱して世界的宗教たらんとする傾向を有せり。

マホメット教の所説によれば人類は限られたる範圍に於て自由意志を有す。神は吾人に與ふるに善惡の二途を以てし、その間に於て自由なる撰擇を許せり。神を求めて之に従ふを善と云ひ、然らざるを惡と云ふ。神の恩寵と救助とは常に正義を求めて神の指導に従ふ謙遜なる者の上に降り、同胞に對して忠實に自己の義務を行ふは、未來の幸運を得べき準備なりとなせり。故にモハメットは正義を行ふて神に従ふを人の世に對する眞諦なりと説けり。これ實に神への服従と正義へ

の努力」とを意味するイスラムなる語を以てマホメット教徒が自己の宗教に名づけたる所以なり。

然らばマホメット教が人類の指導者として範典なりと考へし神の本質は如何神彼を外にして一の神なし。そは生ける永遠の實在にして天地間の萬物一として彼に屬せざるものなし。萬物は彼によりて作られかれの定めたる法則に従ふて運動し生滅す。人類も亦此の範圍を出てず。斯くの如き神は必然の結果として全知全能なるが故に、何物も抗すべからざる能力を有す。神は神聖にして平和を與へ、誠實を以て本旨となし、その僕たる人類の指導者となり、弱き者の保護者となる。故に「正義を以て本質となす神は實に正義そのものなり」と雖、彼は又罪惡を赦し、悔悟を嘉納するものなりき。

斯くの如く神は人類の保護者にして祝福を垂れ慈悲仁恵に充つるが故に、吾人はそれを徳として神の恩寵に報ひざるべからず。茲に於て神に仕ふる儀式を重大視するに至れり。就中信者の缺くべからざる儀式をカーバへの旅行と日々の祈禱とす。カーバは實に彼等が崇拜する唯一眞神アラ一の聖地なれば、茲に巡禮し

て神の徳に報ふるなり。祈禱は神に對して過去の平安を謝し、未來の幸運を願はんが爲めに日に數回之を行はざるべからずとなせり。而して神は世界の主にして遍在する者なるが故に、何處に於て祈禱するも不可なしと雖、そは先づ身軀を清淨にして後行はざるべからざりき。何となれば不淨なる肉體は純潔なる精神を宿す能はずとし、穢れたる心身を以てしては何人と雖、神に近づく能はずと考へたればなり。されど戰場乃至沙漠の如き處にありては何等の儀式をも行はずして祈ることを得たり。斯くの如くマホメット教は心身の純潔を貴ぶが故に、吾人を神より離れしむるが如き思想感情の起り來たるを惡む。茲に於て私情私欲を抑制し得る能力を養はんが爲めに斷食を行ひ、それを重要なる宗教的儀式と見たり。マホメット教は又酒を呼びて「惡魔の母」となし之を嚴禁し、高慢と虚榮とを罪惡視して寛恕と謙遜とを吾人が神に負へる義務なりと見たり。何となれば神は高慢と虚榮とを好まざるものなればなり。

人類は悉く天地の主なる神より出でし者なるが故に、彼等の間には一の人爲的差別を付すべき理由なし。故にマホメット教は世界の民衆を悉く平等にして、同胞

の關係を有するものと見る。茲に於て神人間の媒介者たる僧侶の存在を否定し人は直ちに神と交通して自己の善生を祈り、過去の幸運を謝し得る僧侶なりとなせり。加之その人種的差別をも認めず、その金色たると銀色たると將た銅色たるとに論なく、神に對しては等しく忠僕となるを得、且つかれの恩恵を享受すべしと考へたり。斯くの如き平等一如の思想は必然の結果として博愛の精神を伴ふ。同胞に對して親切と同情とを有する者は神の恩寵を受く、兩親に従順なれ、同胞に親切なれ、孤兒貧民に同情して隣人を愛せよ、汝の奴僕を虐待する勿れとは常にマホメドが民衆に教へし所なりしなり。而して彼は更に一步を進めて奴隸を開放するを以て神に仕ふる最高の義務となしぬ。斯くして奴隸は主家の一員と見られ、家族と同一生活をなし、殊に一度そが開放せらるゝや彼等は主人の子女と婚するを得るに至れり。此の思想は更に禽獸に及び之を好遇することを獎勵せり。

キリスト教徒は動もすればマホメド教を目して武斷的宗教となし、劍によりて布教せるものとなす。さればこは餘りに感情に囚へられし偏見たるの憾なき能

はず。信仰上の強迫はモホメドの嚴禁せし所、信仰は神によりてのみ來たる。如何にして之を他に強ゆるを得ん。……見よ、ユデア人はその神により、キリスト教徒はその信仰によりて各、安立の地を得つゝあるにあらずやとは、彼が常に口にせし所なりき。而して正義は彼の根本思想なるが故に、マホメド教が次第にその勢力を得て各民族の中に傳播するに及び、異教徒の爲めに迫害せられしが爲め彼は之を黙視する能はずして遂に劍を執るに至りしなり。信仰の自由を無視して横暴を極むる異教徒を神に代りて誅戮するは、正に己れが負へる一大使命なりとは、實に當時彼の胸裏に動ける意氣なりしなり。彼は好みて劍を執りしにあらず、その英邁なる氣象と幸運なる境遇とはキリスト教の所謂「左頬を打たば右頬を向けよ」的のものにあらずき。正義の爲めには劍を執るも敢て辭せざる所。これ實に後世の人士がマホメド教を以て「コーランと劍とによりて立てる宗教となす所以なり。されどその末流に及びては誠に斯くの如き態度を示せる場合なきにしもあらずき。

マホメド教は又彼岸の生活と死後の審判とを説く。人は偶然に生れたるものに

あらざるが故に水泡の如く消滅するものにあらず。死は決して靈魂の滅絶を意味せずして、靈魂が肉體と稱する物質的外皮を脱却したるに過ぎず。神より來たるものは永遠に存在す。人の一言一行の微と雖朝露の如く飛散する者にあらずして、遠き未來に其影響を及ぼすが故に、吾人は現世に於て社會人生の爲めに盡すべき責任を有す。現世に於て此責任を盡せしや否やにより、吾人は來世の審判に於てそれに相當せる賞罰を受く。されど神の永久的譴責はマホメット教の認めざる所、正義仁慈を旨とする神は終に罪人を赦して天國に入らしむ。故に如何なる懲罰と雖、そは神が人をして善ならしめ、神に還没せしめんが爲めの手段に過ぎず。斯くしてマホメット教徒の來世には何等暗黒の影を認めざるに至れり。即ち曰く、無機界に死せる我等は植物界に生れ、植物界に死せる我等は動物に發達し、動物に死せし我等は人間として生れたり。何ぞ現世の死によりて暗黒なる運命の來たるべきを恐れん。來たるべき世に我等は天童として生きん。天童に死せる我等は何人も思慮すべからざる者となるべし。我等は無限より出て、再び無限の中に還り、神に合すべきなり。故に我汝等に告げざりしか、我等は再び神に還らんと

んと

斯くの如く死後に光明を認むる未來觀は、得て現世に惱める人心をして厭世觀を懷かしめ、浮世の儚さを啣ちて明かに自殺の悲劇を演ぜしむるを常とす。されどマホメット教の思想によれば人は現世に於て盡すべき責任を有すとす。が故に、彼等は義務と自重との念に覺め來りて、如何なる難關に居るも己が現世に於ける義務と責任とを遂行せざるべからずとの勇氣を生じ、自殺を以て神に對する最大の罪惡となすに至れり。而して勞働は神聖視せられ、額に汗して自己の生計を營む者は手を空しくして徒食する者に優り、勤勉と節儉とを獎勵し不羈放逸を侮蔑し、神は前者に幸し後者に禍すべしとなせしが故に、腕を拱くなかれ財寶の紐を緩くする勿れと教へたり。

古來の一般民族の風習によれば、女子は男子より劣等にして罪深き者と考へらる。されどマホメット教は之を否定し、女子は神が創作の經濟的手段として造りしものなるが故に、必ずしも男子より劣等なるの理なし。兩性は平等にして男子の有する權利は悉く女子も有すべきものとなし、結婚の如きも決して兩性間に高

下の差異を生ずべきものにあらず。結婚は實に人類の繁榮と社會の秩序とを維持し、彼等を淫逸と不健全とより救はんが爲めの制定なりと考へたり。而して一夫多妻は社會發展の或る階段に於ては毫も怪まざる所なりしも、モハメットは此問題を解決せんとして、人若し平等にその妻を愛するを得ば多くの婦人と結婚するも可なり、若しそれを不可能とせば一夫一婦の制によらざるべからずと説き、離婚は神の喜ばざる所となせり。蓋し其意の存する所は實に一夫一婦にありしことは言を待たず。

最後に吾人はモハメット教が知識に對する態度を見んとす。モハメットは知識を求むるを以て道を修むるに缺くべからざる者となし、それを宗教的義務の一と見たり。曰く、知識を求めよ。何となればそを得るは敬虔の行爲をなしたるに同じく、それを語るは神を讚美するに等しく、それを尊重するは神を崇拜するに比すべく、それを教ふるは施與をなすと同一なればなり。知識は人をして禁ぜられたるものと然らざるものとを識別せしむ。……學者が落す一滴の墨汁は殉難者の血液よりも神聖なり。……知識を求めんが爲めに家を棄つるは神の道を歩むに等しく、知識

を得んが爲めに旅立つ者は神によりて天上の樂園に入るべき道を示さると。以てその一般を知るべきなり。

斯くの如き教理を説きて豫言者モハメットは人心に深甚なる感化を與へ、所謂サラセン帝國の基礎を築きて逝けり。されどモハメット教は未だ幼稚にして内的結合に弱さが爲め、必然の要求として之を統一すべき英明なる教主を戴かざるべからず。故に其年齢と地位とによりてアラビア人の尊敬を一身に集めたるアブバクルをメッカより選出して教主(Caliph)となしぬ。彼はモハメットの素志を継ぎ、四方に傳道して専心モハメット教の隆盛を計りしが爲め、幾程もなくしてアラビア半島の全部はその配下に來れり。西曆紀元六三四年アブバクル死するに及び、オマー(Amar)選ばれて教主の位に即けり。彼は西曆紀元六三六年ビザンティン帝國よりシクアを奪ひ、ゼルサレムを併呑し、越えて六四二年ペルシア王國と戦ふて之を併せたり。彼は常に正義の名によりて劍を執りしと雖、裡になほ權勢に乗じて正義を濫用せし嫌なきにあらず。斯くして源流未だ遠からざるにモハメット教は遂に濁波を騰ぐるに至れり。

オマー死してオスマン(Osman)なる者オマヤード家(Ommeiyades)より出て、その後を襲へり。時に西暦紀元六四四年なり。彼はエヂプトを征服して北アフリカを併呑し、その領土は遠く大西洋岸に及びしと雖、一朝刺客の爲に斃さるゝや、教祖の従弟アリ(Ali)その位に即けり。されどオスマンの縁者ムアウヤール(Muawiyah)これに叛し、西暦紀元五六一年教會の主權がかれの掌中に落つるに及び、從來の共和政は倒れて世襲的教主を生ずるに至りぬ。ムアウヤールは首府をメディナより Damascus(Damascus)に移し、その子エジッド(Jagid)位を嗣ぎてアリの子フッセン(Hussain)をケルベラに斃し、第五代の教主ワリッド(Walid)西班牙を征服して之を降せり。斯くしてオマヤード王朝は殆ど五十年間マホメット教の主腦となり、その勢四隣を震撼せしと雖、西暦紀元八世紀の中葉に及び内訌を生じて遂にマホメット教國は東西に分裂するに至れり。

これより先き豫言者の叔父アハス(Ahbas)の一族は、多年オマヤード家の専横を惡み、之を除かんとし、私かに時期の到來を待てり。然るに西暦紀元七五六年に至り、果然兵を起して教主を伐ちぬ。斯くて幾多の慘風悲雨を経遂にオマヤード家はアハス一族の爲めに敗られてスペインに走り、こゝに強大なるコルドバ(Cordova)帝國の勃興を見るに至れり。而してアハス家も亦之に相對して東方に割據し、バグダッド(Bagdad)を首府として一大帝國を建設せり。その教理に於て業に知識を重大視せるマホメット教は、その盛大なるに従ひ次第に諸國の文明を吸収し、アリ教主の如きは自ら國民の師となり、その孫シャイファール(Shafar)の如きは實にマホメット教の中に純理哲學を組織するに至れり。故に爾後輩出せる思想家の多くは悉くかれの感化を受け、斯くして西暦紀元十六世紀の後半に及びては、ローマに於ける折衷學派の思想を有する者相集りて、學術の討究に餘念なかりしと傳へらる。

斯くの如くマホメット教國は内に文明の成熟を來し、外に國勢の強大を致し、三面より歐洲大陸を包圍してキリスト教徒と相對し、好機あらば之を迫害してその勢力を殺がんとせり。茲に於て兩教徒の衝突を來し、西暦紀元十一世以後、略三世紀間、西部アジアの天地は戰雲爲めに暗かりき。斯くして東方のマホメット教國は全歐洲を擧げて來れる十字軍の爲めに大なる損傷を蒙り、これに伴ふて燦爛た

る文明も漸く荒廢の色を示すに至れり。之に加ふるに蒙古人の侵入は遂にこの帝國を破壊して、その領土を悉く骨堂と化し終りぬ。爾來東方のマホメット教國は一度も眞生命を恢復する機會を得ず、その進取的勢力も今は只トルコが翳せる半月形の光にその名残を止むるのみ。翻りて西方コルドバ帝國の盛衰を見るに、そは西曆紀元十一世紀頃に至り幾多の小邦に分裂し、後北アフリカより起れるアルモラビド(Almoravid)王朝によりて統一せられ、マホメット教の文明は猶存續せりと雖、西曆紀元一二二七年その滅亡と共に漸次歐洲人の配下に降りて僅にグラナダ(Granada)の一角にその餘喘を保ちしのみ。然るに西曆紀元一四七四年、フーディナンド及びイザベラ、スペーリの王位に即くに及び、幾程もなくしてその餘命を絶ちぬ。時に西曆紀元一四九八年なり。

さしも隆盛を極めたるマホメット教國は斯くの如くにして滅亡せり。されど一度人心に植ゑられし信仰と思想とは容易に抜くべくもあらず。マホメット教徒の足跡は實に五大洲に遍在するに至れり、我等はこゝに國家的保護を失へるマホメット教の現状を述べて筆を擱かんとす。

マホメット教の教理はその發展の経路に於て二大派に分れたり。一をアシャーリズム(Asharism)と云ひ、他をミュータザライズム(Mutazalism)と云ふ。前者は最後の審判に於て肉體の復活を説き、コーランを永劫の實在と見て創造物にあらずと主張し、神は來世に於て人の目に現はるべしと信じ、時代の必要に應じて教理を改釋し得るの自由を許す。而して意志に關しては自由説と決定説共に之を否定し、神は自己の好む所をなさん、何となればそは天地の主なればなり」と云ふ。然るにミュータザライズムは肉體の復活と神の現顯とを否定し、コーランは神の創造物にして神のみ永遠なりとなし、人は彼によりて作られ、現世の功罪によりて來世の禍福を定めらると説き、神の全能と慈悲とを極力讚美す。故に彼等によれば神以外に永劫の實在なく、萬有は悉く生滅變化するものなりき。

而してアシャーリズムの哲學思想を體現するものをスンニー(Sunni)教會と云ひ、ミュータザライズムの思想を有するものをシャー(Shiah)教會と云ふ。前者はアバース宗の第二代の教主マンヌル(Mansur)にその基を開かれ、マホメット教徒の三分の二はその勢力範圍に屬す。インドに於ける七千萬の教徒中五十萬人はこれに屬し、

支那蒙古、韃靼、アフリカ、アラビア、エジプト、アフリカ、ボスニア、ヘルゼゴニア、ロシア、セーロン及びマレー半島の如き地方も亦然り。而してシアー教會は其の源をアリ教主に發し、祖師の子孫が傳承するものなるが故にマホメット教の教理を正解する正教派と見らる。然らばこの二教會の根本的差異は如何、そは主として教主の資格に關し、スンニイ教會は選舉主義を執り、シアー教會は祖師の子孫が世襲すべきものとなす。

ペルシアの宗教

ペルシア人 (Persians) はアールヤ民族 (Aryans) に屬し、殊にインド人 (Hindus) と近親の關係を有す。蓋し近世言語學上の進歩はギリシア、ローマ、ケルト (Kelts)、テュートン (Teutons) 及びスラヴ (Slavs) 等の歐洲諸民族、並にインド及びペルシア等の國民に行はれ來れる言語の、その形一見頗る相異りて殆ど相關係する所なきが如

きも、而も仔細に觀察吟味すれば、其語法乃至單語の上に看過すべからざる一致の存するありて、これ等は互に同一系統に屬する言語なることの疑ふべからざるものあるを發見し、次第に古文書等に就き其起源に遡りて研究したる結果、これ等各國語は互にその源を同一語に發し、而も其母語は今日に傳らずと雖、恐らくはかのインドのサンスクリット語 (Sanskrit) に頗る類似せるものとなりしに相違なきを確むるに至れり。而してその言語の同一語源を有するものなることは、直ちに又これ等諸國民が現今こそ其言語の互に相異なるが如く、或は歐洲の各地に、或はインドに或はペルシアに各自獨特の文化を開き、特殊の風習を有し、相去ること甚だ遠きものありと雖、その初めは同一地方に住し、同一言語 (即ちこれ等諸國民の言語の源たる母語) を語り、同一文化を有したる一民族なるべしとの結論を生ず。故にこれ等の七民族を總稱してアールヤ民族 (又は印度歐羅巴人種) と稱し、その各國語を總稱して印度歐羅巴語 (Indo-European Languages) と云ふ。

斯くの如くアールヤ諸民族はもと同一地方に住せし一民族の分れて移住播殖せしものなりとせば、その原住地は果して何處なりしか。此問題に就いては學者

間に種々なる異説を生じ、或はそれをアジアなりと云ひ、或は更に西の方歐洲の東部なりと説き、又それをパミール (Panere) 高原なりとなす者、ダニューブ (Danube) 河畔なりとするもの、バルテック (Baltic) 海の南岸なりと唱ふる者、スカンディナヴィア (Scandinavia) 半島なりと主張する者、各その信ずる所に従ふて歸適する處を知らざるなり、而してその極終にかの同一祖先記を否定して、異人種の間にも雜居若しくは交通頻繁の結果、言語に類似を來す歴史上の事實あるに徴し、言語の一致必ずしも血縁の連續を意味せずと主張するものを生ずるに至れり。されど今日までの研究の結果によりて、アールヤ諸民族が原同一祖先より出て、然る後四方に分離移住せしものなることに就いては、殆ど疑ひを容るゝの餘地なきに至り、其原住地に關しても略、アジアの中央、黒海乃至裏海近傍の原野なるべしとの説に一致せり。想ふにアールヤ民族はもとこの地方に住して遊牧を事とせしが、後にそれが如何なる理由に基けるかは知る能はざれども、遂に分散して一部は西方歐洲の地に入り、他の一部は南下してベルシア及びインド地方に移住せし者なるべし。而してベルシア及びインド地方に入りし一派は、そが南下の當初に於ては一

團となりてイラン (Iran) 高原の附近まで來りしならんも、夫れより再び二派に分れて一はインドに入り、他はイラン地方に止まりて、所謂ベルシア國を建てしが如し、さればインド及びベルシアの二民族をば特にインド・イラン民族 (Indo-Iranians) と稱して、歐洲のアールヤ民族と區別するを常とす。乃ちインド人とベルシア人とはアールヤ民族中殊に密接なる關係を有し、其言語文明乃至宗教に於てもこれを歐洲のアールヤ民族のそれに比するに、自ら特殊の色彩を有し、判然たる一派をなせり。さればインドの宗教に就いては後に至りて詳かにする時あらんも、吾人は茲に多少兩者の間に存する異同を指摘しつゝ、ベルシアの宗教を叙述せんとす。

ベルシアの宗教に關しては古來歐洲人の間に知られたる所尠からざりき。インドの宗教に就いては、其波羅門教にあれ、將た佛教にあれ、最近東西兩洋の交通盛ならざりし間は、直接歐洲人に對する關係少かりしが故に、彼等の注意を惹かずりと雖、ベルシアの宗教に至りては然らず。かのイスラエル人をバビロニアの虜より救ひ、彼等をして再びエルサレムに神殿を造營せしめしものは實にベル

シア人なりしと、及び其宗教思想の頗る高尚にして道徳的なりしが爲め、ギリシア人の注目する所となりて後世に傳へられしこと、乃至一時ローマに隆盛を極めてキリスト教と相對抗せしミトラ(Mithra)崇拜なるものが、ペルシア教の一變態なりしこと等の事實よりして、そは夙く既に其一端を開祖ゾロアスター(Zoroaster)の名と共に歐洲人に知られたりき。されどその知らるゝや固より甚だ斷片的にして未だ充分に其歴史乃至特質を明かにする能はざりしが、後にインドのペルシア教徒間にゼンド・アヴェスタ(Zend-Avesta)と稱する聖典の存することの歐洲人によりて發見せらるゝや、其研究によりて頗る多くの史料を得たり。蓋し現今ペルシア人の多くはそが祖先の宗教たりしペルシア教を奉ぜず、マホメット教を信じてそが子女の教育の如きもコーランによりて行はれつゝあり。こは西曆紀元七世紀頃、かのアラビア人がペルシアに侵入して異教徒を迫害し、爲めにペルシア人は其故國を逃れてアラビヤ人の支配を脱するか、然らずんば改宗せざる可らざりし結果なりと云ふべし。而してインドのペルシア教徒は故國を去りたるペルシア人の子孫にして、其教勢頗る振ひ、ボンベイ(Bombay)を其中心

地となす。これ實にペルシア教の聖典たるゼンド・アヴェスタが本土ペルシアに發見せられずしてインドの信徒間に發見せられし所以なり。ゼンド・アヴェスタは正しくは韃靼、アヴェスタ及びゼンド」と稱すべく、アヴェスタはインドのヴェダ(Veda)と等しく「知識の謂にして、ゼンドは「註解の義なり。乃ちゼンド・アヴェスタとは「本文根本知識及び其註解」と云ふに等し。而してアヴェスタは、ペルシアの古語にしてインドのサンスクリットに類似せるゼンド語(Zend)にて書かれ、ゼンドは夫れ以後に、起りたる言語パーラヴ(Pahlavi)を以て記さる。今アヴェスタの内容を見るに、そは聖書若くは佛典等と等しく全部を通じて同一の時代に、同じ場所に於て、一個人の手になりしものにあらず。その用語も等しくゼンド語なり。と雖、その間に新舊の差別あり。その最も古きは西曆紀元前十四世紀頃の作と思はるゝものあり。その最も新しきは西曆紀元前五世紀以後になりしと認むべきものあり。これ等の事實によりて見るに、そは明かに異なる時代に、種々なる場所に於て、多くの人の手になりしものと云ふべく、而もそが集輯せられたるは西曆紀元三世紀頃、世にありしアルダシール(Ardashir)王の御代なりと傳へらる。次ぎに

吾人はアヴェスタを三部に分ちて見るを得べし。第一はヤスナ (Yasna) と稱する部分にして崇拜の儀禮を記し、有名なるガタ即ち讃歌も亦この中にあり。こは實にアヴェスタ中最も古き部分に屬す。第二はヴィスペラド (Visperad) と云ひ供儀の願文を集めたる者なり。第三はヴェンディダド (Vendidad) と稱する律法部にして種々なる宗教上乃至社會上の規定法律を收め、中に又宗教的傳説をも含めり。こはアヴェスタ中最も新しき部分なりとす。而して古代には尙多くのアヴェスタありて二十一卷の多さを數へたりと雖、終アレキサンダー大王のペルシア侵入と、アラビア人のペルシア教徒迫害の爲め遂に其全部を失ひ、今に残存せるものは僅にこのアヴェスタ一巻に過ぎずと云はる。而してペルシア教には尙これ以外にコールダアヴェスタ (Klorda Avesta) 即ち小アヴェスタなる者ありて年中の行事を録し、以て僧侶及び一般信徒の便に供せり。

さて吾人は今このアヴェスタに現はれたるペルシアの宗教思想を見るに中に、種々なる要素を藏し、其紛糾錯雜して存在することの甚だしき、一方に一神教の主張あれば他方に多神教の説かるゝあり、一方に神はわが胸中に宿るてふ頗る個

人的乃至直觀的思想の存するあれば、他方にマギ (Magi) と稱する僧侶の階級を認むる祭司教たる觀を呈するあり。或は神殿を建てず、偶像を作らず、精神的罪惡を説く高尚なる宗教思想と平行し、屍體を原野に曝露して禽獸の喰ふに委する奇怪なる信仰の存するあり。或はメディア (Media) 地方の宗教思想と覺しき所、或はシ、ア人 (Soythians) の風習と認むべき所、或はバビロニア人の影響となすべき所等、頗る雜然として條理分明ならざるなり。されど想ふに、斯くの如きはペルシア教本來の面目にあらずして、その初めはかのガタ、其他アヴェスタ中最も古き作なりと稱せらるる部分に現はれたる思想の如く、比較的簡朴にして高尚なる信仰を存せしならんも、後次第に隣人の影響によりて斯かる變化を生ぜしものならん。

ペルシア教の開祖は既に讀者の熟知するが如くかの有名なるゾロアスターにて、ペルシア語を以て之を呼べばザラツストラ (Zarathustra) 又はザルツシト (Zarathushtra) と稱せらる。ゾロアスターはギリシア語なり。彼は他の多くの宗教的天才と等しく種々なる傳説によりて詩化せられしが爲め、古來の學者中には往々其

歴史的實在を否定する者あるも、諸方面よりの研究によりて現今に於てはその實存を疑ふ者なく、剩へそが在世の時代をば極めて漠然ながらも、西曆紀元前十四世紀頃なりとの説に一致するに至れり。而して彼はメディアの一僧侶の子なりと云はるれども、その眞偽審かならず。

之より吾人はゾロアスターによりてペルシアの宗教を知らんとするに當り、先づ之をインドの宗教と比較商量して後、次第に彼の天職と教理とを説き、以てペルシア教の梗概に及ばんとす。既に述べしが如く、インド人の宗教思想とペルシア人の宗教思想とは其間に極めて多くの類似點を有す。例へば日の神ミトラの如き之をインドの宗教に於て見るを得ると同時に、ペルシアの宗教に於ても發見するを得べく、或はインド人にヴァルナ (Varuna) の名を以て知られたる天の神はペルシアの主なる神となりしが如き、或は火神、風神、雨神及び惡魔等の諸神靈に至るまで、悉く其間に共通する點の存するが如きこれなり。而して斯くの如き類似は、實に神の性格にのみ限りしにあらず。此兩民族は又供儀乃至讚歌の制度に於ても、その趣を一にし、祭祀をば僧侶の事にあらずして、普通信者の司るべき

ものとなせしこと、及び禮拜をば必ずしも寺院に於てなさざるべからざるものにあらず、何處に於て行ふも可なるものなりとなしたるが如き、皆その撰を一にせり。而して彼等は神に對する供儀として常に馬を用ひ、日常の供物としてインドに於てはソマ (Soma)、ペルシアに於てはホマ (Homa) と稱するアルコール性の液體を用ひたり。然らば彼等はかゝる供儀に如何なる意義と價值とを認めたるか。茲に於ても亦彼等は互にその見解を一にし、神はその信者が與ふる響應を享けて、然る後これによりて彼の力量と勇氣とを増大し以て彼等の爲めに盡力すべしと信ぜしなり。

以上述べしが如き類似點は、インドの宗教とペルシアの宗教とが共に同一思想より出立し、發展せしことを證するものなるは論を待たずと雖、尙他に一の看過すべからざる事實あり。そは實に此二個の宗教思潮が同一源泉より分流せしものなることを教ふるのみならず、インドの宗教とペルシアの宗教との間に横はる最大の相異點を指摘し、且つ如何なる境遇の下にペルシア教は其獨特の發達を遂げしかを暗示する者なりとす。太古インドには神を呼ぶに二種の名稱あり

て、一をデヴ(Deva)と云ひ光輝あるものを意味し、他をアスラ(Asura)と云ひ生けるものを意味せり。而して其初めこそ、此兩者は共にこの民族によりて崇拜せられたる神を示したれども、後次第にデヴのみ神に適用せられ、アスラはデヴの下に降りて悪魔の別名となるに至れり。次ぎに之をペルシアの宗教思想に見るに、最初神を呼ぶにデヴ及びアフラ(Ahura)の二語を以てし、後其一が他を凌駕して悪魔の稱號たらしめしまでは、インドの宗教思想と毫も異なる所なかりしが、その結果より見れば全然正反對の現象を呈せり。乃ちインドのアスラに相當するアフラはペルシアに於て最高の神を示す語となりしと同時に、デヴは國民の嫌惡して止まざる悪魔の稱となりしなり。然らば何故にペルシア人は斯くの如くインドの宗教思想と全然相反する思想を懐くに至りしか。こは吾人が次ぎにゾロアスターの天職と共に説明せんとする所なり。

吾人は茲にゾロアスターの天職を語らんとして先づペルシアの國狀を知るの順序なるべきを思ふ。然らば彼在世當時のペルシアは如何なりしか。ガタ即ち讚歌により之を見るに、當時のペルシアは互に相容れざる二民族の争闘場なりし

が如し。乃ち一方に殖産を業とし、家畜を最も神聖視する順良の民あると同時に、他方にその近傍に住して田野を荒らし、家畜を掠殺する猛惡の民ありて互に相争ひしなり。而してこれ等二民族はその文化の程度に於て相異なるが如く、其宗教に於ても亦同じからず。前者はかのアフラを崇拜し、後者は所謂デヴを信奉せり。故に學者往々後者を以てインド人にはあらずやと説くと雖、未だ遽に信ずべからざるなり。ゾロアスターが世に出でしは實に斯くの如き時勢に於てなりき。吾人は更にこの間の消息を明かにし、以て彼が天職の如何を語らんが爲め、次ぎにガタ中の一物語を記さん。

ガタの一節は吾人に語るに下の如き物語を以てせり。或る時農民等相集りてアフラ及びアシア(Asha)に、彼等が常に被る隣人よりの災害を訴へしとありき。時にアフラはアシア(こはアフラの屬性なる正義にして他の屬性と等しく獨立の神として現はるゝとあり)に問ふて曰く、彼等を保護指導すべき者は誰ぞと。アシアは平然として答ふらく、誰か其適當なる保護者を見出だすを得ん。罪惡の源は創造の初めより事物の根底に横はれり。幸福を得るの道は只アフラへの信頼にあるの

み」と、茲に於てアフラは終に答へたり。汝等が希求する如き主は決して見出ださるゝ筈なし。されど我ゾロアスターをして汝等の主たらしめん。農民等は更に問ふて曰く「神よ、そを生物に傳へんが爲め、誰に善なる心即ち聖靈を賦與せしか」と。アフラは再び「そも亦ゾロアスターに」と告げぬ。斯くて農民等はゾロアスターが孱弱なる人間として、決して其目的を成就し能はざるを語り、彼等に適當なる主の見出だされざりしを、悲しみ合へり。されどゾロアスターは己が天職を自覺して、民衆の救護を心に誓ひ、その成就の爲めに主の聖靈と威力とが來りて孤立せる彼を幫助せんことを祈れり。

以上の物語によりて吾人は明かに豫言者としてのゾロアスターが、當時の社會に有せし地位と使命との如何なるものなりしかを想見するを得べし。彼は他の豫言者と等しく羸弱なる人の子を以て救世の大任を自覺し、幾多冷酷なる民衆の誹謗を恐れず、猛然として神の爲めに戦ひしなり。彼は決して自己が神と共に行ひ、神と共に活動しつゝあるを疑はず。よしや時に疑心暗鬼の來りて彼が心情を亂すとあるも極力之を排し、己れの善なることをば神の名によりて保證しつ

ゝ、從容として神明の加護を期待したるなり。彼は己れの心身を捧げてアフラの爲めに盡し、その全力をば神意の實現に傾け、萬有をして悉く神の道を得しむるまでは能ふ限りを説き、且つ教へんとせり。彼は自己の衷に働く神の力を意識し、かれの云爲行動は悉く神意に因るものなりと思惟せしが故に、かれの一言一行はよく悪魔邪神を驅逐して、人心に神の理想を實現すべき能力を有するものと確信せり。要するに彼は遊牧の蠻民によりて、因慮の苦を嘗めつゝある順良の農民を救ひ、彼等に神の國を降さんが爲めに來れり。これゾロアスターが畢生の天職に外ならず。

斯くの如くゾロアスターの天職は世の罪惡を一掃して、無辜なる農民を救濟せんとするにありしが故に、先づ彼は如何にして世界は創造せられ、罪惡の種子を播かれたるかを明かにし、然る後これに對する救濟策を案出せざるべからざりき。斯くて敬虔なる彼は神に祈りて、其解釋を求めたり。されどそは決して新嶄なる思想のあらざりき。彼は他の天才と等しく既に國民の胸中に芽ぐみつゝありし思想を抽出し、そを組織ある教理たらしめて救世の具となし、國民をして各、自

己の責任を熟慮せしめ、然る後その歸適する所を知らしめんとせしなり。故に彼は先づ世界の起源に關する見解を以てその教理の入門となせり。かれの説に従へば世界は物心二元の一致協力して創造せるものなり。されどこの二元が各、獨立して行動する時に、一は善となり他は惡となる。故に人類も亦その數に洩れず、善惡二種の運命によりて支配せらるゝに至れり。乃ち一は地獄の如き運命を作り他は天國の如き樂土を與ふ。斯くて世界の創造が完成せらるゝや、かの二元は互に分離獨立して各、その本性に従ひ、惡なる物は罪惡の源泉となり、善なる靈は正義の根底となり、終に善惡の二元は相對立するに至れり。而して又こゝにアラとデヴとの二靈あり。後者はその眷屬と共に惡なる元理に服従して地獄の靈となり、アラと其一族とは善なる元理を奉じて天國の靈となれり。斯くて世界は遂に慘憺たる善惡二靈の争闘場と化し去りぬ。斯くの如きは實にゾロアスターの世界觀と罪惡觀との梗概にして、アラは元來輝ける天なると共に、善と慈悲とを與ふるものと考へられしが、後ガタに現はれたる彼は既に斯くの如き特質を失ひ、頗る抽象的となり、歴史的的色彩を脱して超越的の神となれり。故に彼は

今や直接に世界と交渉するものにあらず、その屬性たる從者をして世界を改善しつゝあるものと考へられ、之に反してデヴは至る所虛偽と罪惡とを傳播して、人生を涙の谷たらしめつゝありと考へられたり。然らば斯くの如き世界に住し、斯くの如き神を戴きて、吾人は如何に行爲の方針を定むべきか。こは敢へて困難なる問題にあらず、善良なる者を助くべしの一語能く處世の標準を示したりと云ふ可し。實に我等は善なる者を助くることによりてアラと共に住し、彼の屬性なる聖靈と共に働きて歩、一步惡魔の勢力を滅殺し、次第に世界を改善して終には罪惡の根を絶ち、以て天の王國を實現すべきなり。これ即ちゾロアスターが教理の結論を示すものと云ふべし。

抑、如何なる革進運動と雖、天は社會及び人類が有せし從來の思想乃至習慣を全然破壊し放擲して、別に新なる思想乃至習慣を建設し得べきものにあらず。必ずやその革新の當時に於ては、新舊二者の互に調和渾融せられずして併存するを常とす。ゾロアスターの宗教思想に於ても亦然りとなす。乃ち彼の教理は古きペルシアの宗教思想に一大革新を加へたるものなるが故に、古來の傳説は新なる

思想の中に混入せられて幾多の矛盾を生めり。例へば彼は一方に天國と地獄とは、內的なる善と惡との状態を示すものなりとの大真理を宣言しながら、他方に天國をば未來の幸福なる生活となし、地獄をば未來の不幸なる生活となすが如き傳說的説明を認めたり。又彼は傳道によりて世界を改造し得べしと信ぜしも、之と同時に善惡二者の間に横はる争鬭の起原を頗る深遠にして、容易に抜くべからざるものと見たり。その他或は彼が神への供物は淨き心の誠のみと説きしに拘らず、諸般の供儀を禁ぜず反りてその必要を認めしが如き、或は正善の人は直接に神の眞性と交渉するものなりとの思想を發言すると同時に、神を形式の中に求めて火の崇拜に耽りしが如き、皆その一端を示すものと見るべきなり。これ實にゾロアスターが強ひて古來の信仰と争ふの愚を認め、平和なる方法によりて此新宗教を宣傳せんと努めしによるならん。

ゾロアスターの宗教思想は斯くの如く幾多の矛盾を含有せしと雖、なほこれと共に宗教史上看過すべからざる多くの特色を有せざるにあらず。次ぎに吾人は其二三に就いて述べん。彼はユデアの豫言者エリヤの如く、その國民に對して

二種の崇拜の中の一を選べと宣言せり。されど兩者は互にそが選ぶの意義に於て甚だしく異なる所ありき。乃ちエリヤの場合には單に國民がバールをば崇拜の對象とするを誤れりと云ふに過ぎずして、其間に何等善惡の別を認めざりき。されどゾロアスターの場合には然らず。其選擇は道德的根底の上に立ちてなさるべく、人類は神の特質を審判せんが爲めに呼ばれたる者にして、彼等は邪惡なりと判決せし神を認むる必要なしと教へらる。故に人類は斯くて猛惡なる神靈に對する恐怖より免れ、天上の戦争に馳せ參じて正義の爲めに奮闘することを得るに至れり。されどこれと共にヘルシアの宗教は又二元的なるを免る能はざりき。何となれば善なる神は世界を創造せる唯一の實在にあらず、又世界を支配する唯一の君侯にもあらず、彼と併立して惡なる神の存在すればなり。故に彼は絶對的實在にあらずして、初めより部分的權力を有せしに過ぎず。斯くの如く善なる神と惡なる神とを對立せしむるヘルシアの思想は常に統一を求めて止まざるインドの思想と頗る其の趣を異にせり。而して之と共に擧げざるべからざる尙一の特色は、そが極めて狹量にして排外的なりしとにあり。蓋しヘルシアの宗

教思想によれば、前にも述べしが如く、吾人は全力を盡して正義の爲めに戦はざるべからざりしが故に、その結果、己れと異なる神を崇拜する者を悪魔と同一視し、極力之を迫害せんとするは自然の勢なりと云ふべし。斯くてペルシア人はユデア人の如く異教徒の迫害を是認し、眞の神に對する偽れる神の思想を有するに至れり。

既に以上の叙述によりてゾロアスターの宗教思想は其大要を盡せるが故に吾人は其後のペルシア教が如何なる發展を遂げしかを見ざるべからず。ガタに次ぎて出てし他の讃歌によればゾロアスターの歿後かれの宗教は神の制度として認められ、その形式の如きは勿論次第に固定的となり、國民が奉仕する神はアラ・マツダ (Ahura-Mazda) 即ち全能の主と呼べるに至れり。故に之をマツディズム (Mazdeism) と云ふ。而してこの神は依然として現在及び未來の幸福を得んが爲め及び農業の繁榮を來さんが爲めに祈禱崇拜せられたり。されどこれと共になほ一の注意すべき傾向を生ぜり。そは即ち此神と何等かの縁故あるものを神聖視して崇拜したることこれなり。例へば火は神と同一視せられたるが爲め、星は

神の體を現はすがため崇拜せられ、その他、或は地、水、或は善良なる動物及び有益なる植物に至るまで、凡そ人類に幸福を與ふるものにして一も崇拜せられざるものなきに至れり。

されど斯くの如きはペルシア教の一側面に過ぎずして、之と共にかのアフラの至上最高の神格に至りては毫も毀損せらるゝ所なくこれ等雜多なる諸神を統一して、之に一定の秩序を與へんとする傾向を生ぜり。斯くてゾロアスターの抽象的神格は改造せられて、當時東洋の諸國に行はれし社會組織の典型に徒ふて統一せられたる幾多の人格的諸神を生じたり。例へばアフラ・マツダ及びアングラ・マイニニー (Angra-Mainyu) 即ちアիրリマン (Ahriman) の出現の如き即ちこれなり。斯くて世界人生のあらゆる事象は悉くこれ等の人格的ニ神が争闘の影と見られ、アフラは光輝、眞理、正善及び知能等を代表し、アիրリマンはその反對なる暗黒、虚偽、邪惡及び愚鈍を代表するものとなされたり。而して前者の建設する所は後者の破壊する所、植物に毒素を、火に煤煙を、人に罪惡を、人生に死を混ざるものは彼なりと考へられき。

斯くの如くヘルシアの諸神は今や社會的組織中に統一せられて、アフラは善なる神の君主となり、アーリマンは悪なる神の首魁となりしが故に、彼等は各、その下に幾多の従神を引率すべきなり。先づ之をアフラより見んに、主なる従神を擧ぐればその數六あり、共にアフラの具有せる特質を神化せるものとす。下に之を列擧せん。

一、ヴォフ・マノー (Vohu-Mano) 即ちバーマン (Bahman) 此は「善良なる心」を意味して、

六従神の長なり。

二、アシア・ヅビスタ (Asha-Vahista) 即ちアル・ズバン・シット (Ardibehesht) 此は至聖を意味して、火の神なり。

三、クシヤトラ・ヴェールヤ (Kshathra-Vairya) 即ちシナーン・ズン (Shahrevar) 此は完全なる主權を意味して、金屬の神なり。

四、スペンタ・マルマイター (Spenta-Armatit) 即ちスニン・マルマート (Spendarmat) 此は敬虔を意味して、地の神なり。

五、ハウル・ヴァタト (Haurvatat) 即ちコールダト (Khordad) 此は健康を意味す。

六、アメレタト (Ameretat) 即ちアメルダト (Amerdat) 此は不死を意味す。

而して最後の二神は夫妻の關係を有し、協力して木と水とを保護すべき責任を有す。次にアーリマンを見るに、これ又六種の従神を有して善なる神の各、と相對抗しつゝあり。即ち惡心、疾病、廢頹等を意味する神これなり。その他ガヒ (Gahi) と稱する不貞操を代表する女神、ヤツ (Yatu) と稱する妖術の神、バイリカ (Pairika) と稱する女性の誘惑者等、枚擧に遑あらず。要するにヘルシアの神は一切善惡二種に分類するを得るものなり。

次に吾人は未だ前に述べしアヴェスタの終篇ヴェンディダットの中に現はれたる宗教思想に説き及ばざりき。故に茲にその内容を見んに、そは實にヘルシアの宗教史上最後の聖典にして、新なる思想を含み清淨潔齊の法則と規定とを表はして、而も頗るユデア的思想を傳へたるものなり。而してその説く所の潔齊とは衛生上乃至道徳上の清淨を示すにあらずして、全然宗教上の意味を有するのみ。乃ちヘルシア人の信仰によれば、不淨なるものは悉く惡神の掌る所にして、惡魔に關するものは一切不潔なるものなりしが故に、不淨を去りて清淨を旨とするは、惡

魔の降服を意味し、悪魔を放逐することに外ならざりしなり。而して之と共に又
 ヴェンディダッドの所説に従へば、地水火の三元素は最も神聖なるものなるが故に、
 之を汚すは重罪を犯すに等しく、肉體は不淨なるものなるが故に、口に火を吹く
 べからずと教へ、屍體をば火又は地に接觸せしむるを禁じて、空中の高塔上に曝
 露し、以て禽鳥の啄むに任すべしと説けり。之を要するにヴェンディダッドは清淨潔齊
 を民家に教ふる經典なりしなり。

今斯くの如きヴェンディダッドの思想が、如何にしてマヅデイズムの信仰に挿入せれ
 たるかを考ふるに、そがダリウス(Darius)王及びアルタクザークセス(Artaxerxes)
 王の時代に於ては、未だ著るしき勢力を有するに至らざりしと、及び是がゾロア
 スタ一の宗教思想と必然的關係を有せざりしことは明かなり、さればそがベル
 シアの宗教中に重要な地位を占めしは、後世のマヅデイズムにありしと疑ひ
 なし。乃ちマヅデイズムは元來祭司僧侶を有せざる宗教なりしが、後にメディアに
 傳播するに及びて、斯くの如き傾向を生ずるに至りしなり。勿論古代に於けるイ
 ラン人の宗教と雖、素より僧制の萌芽を藏せざりしにあらず、ゾロアスタ一の如

きも亦その初めは僧侶なりきと云はる。されど斯くの如き理由を以て、國民の全
 生活をば全く祭司的儀式によりて枯死せしむるは、蓋しゾロアスタ一が傳道の
 本意にあらざりしなるべし。而してベルシア教が斯くの如く生命なき形式の中
 に封鎖せられしと同時代に、又ゾロアスタ一と其教理とに關する新見解を生ず
 るに至れり。乃ちそは啓示を以て神とゾロアスタ一の會見の結果となし、豫言
 者の質問に對して神が與へたる法則即ち彼が教理なりと見たり。故に吾人は他
 の多くの宗教と同じく、ベルシア教をば原始時代、天才時代及び僧侶時代の三期
 に分ちて考ふるを得。

然らばベルシア教は全世界の文明に如何なる影響を與へたるか、下に其二三を
 述べん。この宗教が世界に對してなせる最大の貢献は、實にそがユデア人を亡國
 の苦痛より救ひ、その一神教をして全人類の宗教たらしむべく、種々なる影響と
 刺戟とを與へたることにあり。而して又マヅデイズムは世界的色彩を有する宗
 教にして、よしやそが終に世界的宗教として傳播せられざりしと雖、若しそが
 の祭司主義によりて化石せられずんば、必ずや世界的宗教の一と發展して人心

を感化したるならん。されど翻て想ふに、アフラは傳道的熱情と殉教的信念とを刺戟すべく、餘りに抽象的にして哲學的の神なりき。而して尙又、そは世界を支配せんが爲めには、絶對的の神となり、全知全能の實在とならざるべからざりき。斯くてペルシア教は終に世界的宗教の準備たるに止まりしなり。

今や吾人はペルシア教に筆を擱かんとするに當り、當時三大宗教の一として特殊の禮拜、祭司及び經典を有せしマニ (Manichæism) 教に就いて其梗概を語らん。マニ教の開祖はペルシアの一土人にして、彼は其教理をば故國の思想よりも寧ろカルデア (Chaldeæ) の思想より得來れり。而して其根本原理は世界を以て光明と暗黒との大争闘場となす二元論なりき。故にその禮拜は極めて精神的にして、その道徳は物質界を解脱せんが爲めに、最も純粹にして峻烈なる禁欲主義を鼓吹せり。

波羅門教及び印度教

一 古神話と波羅門教の源流

印度アールヤ民族は、太古の時代に西方亞細亞の高原地方より、ペルシア人と共に、漸々東南に遊牧し來りしが、遂に印度に侵入し、土民を征服して部落の形をなすに至れり。これ現今の印度河流域の地なりき。

その頃は未だ遊牧の民習を脱せず、牧畜を業とせしが、漸く土地に着して農耕に従事するに至れり。斯くて本來の淳風を失はざりき。抑、印度の地たる熱帯に位し、樹木繁茂し、河流縱横に流れて、夏雲の奇峰をなして、驟雨の沛然として襲來するあり、暴風淫雨移動すれば、家畜を奪ひ收穫を失はしむるに至る。斯かる氣象の轉變極りなき状態は、アールヤ人をして、畏怖の念を生ぜしめ、天然現象に對して不思議の眼を以て觀察するに及ぶや、未だ文化の程度に於て何等の準備なきかれ等は、斯くの如き天然現象をたゞ何等の威力なくして、起り來たるも

のとは考ふるを得ずして謂へらく、神これを然らしむるなりと。即ち暴風は風伯の起すところにして、驟雨は雨師の司るところなりと教へたり斯くの如くにして、一々の自然現象は意味深きものとなり、數多の神格は生じ來れり、その神祇の數は甚だ多くして、枚舉に遑あらずと雖、これを三種に分類するを得べし。即ち、

- (一) 天上の神祇
- (二) 中空の神祇
- (三) 地上の神祇

これなり。

これ等の神祇の中には、曙光を神格化せるウシヤス神、明星を神格化せる阿濕波(Ashvini)、太陽を神格化せる蘇利耶(Surya)同じく、ザウタル、蒼穹を神格化せるウシス等ありて天上の神祇に屬し、次に驟雨暴風の神なる因陀羅(Indra)、因陀羅配下の風伯雨師等は中空の地祇に屬し、燃ゆる火なる阿耆尼(Agni)、酒の神なる蘇摩(Soma)等ありて地上の神祇に屬せりき。

これ等の諸神は何れも個々の神祇にして、その間には何等の系統もなく、何等の

關係もなかりき、而も人智漸く進み、思考の力漸く醒むるに及びては、これ等の神祇に系統を作り統一を作らむとする傾向起りて、終に威力の大なる神祇は上位に位し、威力の大ならざる神祇は眷屬の地位に下るに至れり。従つて多數の神祇を崇拜することは太古の如しと雖、就中、最も威力ある神祇に向ひて崇拜供儀を集中するに至るは、又自然の理といはざるべからず。斯くの如くにして、因陀羅の如き阿耆尼の如きは、威力廣大なる偉神格と爲れり。而して斯かる偉大なる神祇に對するや、かれ等は専心にこれに祈禱し、その祈禱中は全然他神を閑却して顧みざるに至りしかば、茲に漸く多數の神祇は斯かる偉大なる神祇の下に隸屬し統一せらるゝ傾向益著るしくなれり。換言すれば統一なき雜然たる多神教は、漸次一神教の形に移り行く傾向を示し、終に二三の偉大なる神格を形成せり。而も他の一神教は、唯一神の外の諸神祇を否定するを以て通例となせ共、印度の民は數神の俱存を認め、唯々その中の或る一神を祈禱する時に限りて、餘他の諸神の存在を認めざるに過ぎず。故にこれを一神教と區別して單一神教と稱す。而して二三の偉大なる神格は、その祈禱祈禱の目的に依りて交替的に唯一神の位置を

取るを以て、一に交替神教と稱せらる。然れども人心の要求は唯一神の排他的崇拜に進まずんば止まず、單一神教や交替神教や、これ唯一神教に進む橋梁のみ、斯くの如き心理的経路に依りて、純然たる唯一神は印度の神祇を統一しぬ。所謂梵天 (Brahma) これなり。理体として観ずるときは中性名辭を用ひて梵 (Brahma) と呼び、人格神として見るときは男性名辭を用ひて梵天と稱すべし。而も理体として梵は少數哲學者の思索の對象たるに止まり、一般の生民に對して其の崇拜の中軸となりしものは、云ふまでもなく人格的唯神なる梵天なりき。梵天の神格確立するに及びて一新宗教は起れり。波羅門教即ちこれなり。故に學者は梵天成立以前の印度神祇を呼びて「吠陀の神祇」と名づけ、梵天成立以前の天然崇拜的宗教を稱して、「吠陀教」と云ふことあり。

二 波羅門教の經典

斯くの如く梵天の確立に依りて波羅門教起りたりとすれば、そは何時頃の時代なるしか。固より思想上の變化は物質上の變化の如く明かにこれを知ること能はずと雖、學者は今より凡そ三千年の古代に起りしならむと想像せり。故に波羅門教は世界最古の宗教と稱するも、敢へて不可なかるべし。

波羅門教の經典はその數一ならず、而も其性質上よりこれを二種に分つことを得べし。即ち一は根本經典とも稱すべきものにして、他はこれ等根本經典の註釋及び祭祀供犠の儀軌を記せるもの、假に祀典とも稱せらるべき一群の經典なり。而して根本經典として四種の聖典あり。謂はゆる「四吠陀」これなり。吠陀 (Veda) とは神智の義にして、「神の啓示」といふ程の義なり。換言すれば古へ神が智者聖者に、直接に誥命したる天啓を誌せるものなり。従つて人間以上の神聖なる啓示録なり。故に波羅門教徒がこれ等の聖典を尊ぶことは非常にして、其一言一句悉く無量の秘義功德なりと信ず。而して一切の知識にして、この神聖なる啓示録に合する時は眞なれども、合せざるときは悉く偽にして異端邪計なりと排斥するに憚らず。

四種の吠陀とは、

- (一) リグ吠陀
- (二) サーマ吠陀
- (三) ヤジュール吠陀
- (四) アタルヴ吠陀

の四啓示録及び其附録書なり。

リグ吠陀はもと、印度アールヤ民族が信教河(インダス河)の畔に遊牧せし時代より漸次内地に向ひて殖民を試み、恒河(ガンジス河)の溪谷に下り來りし時代に出來たる讚歌集なり、換言すれば天然崇拜時代に、偉大なる天然現象に向ひて驚嘆し、驚怖し、その威力を讚頌したる讚頌集なり、初め家長はその家の爐邊に夫れ夫れ供物を捧げて神を祈りしも、文化の程度少しく進むに至りては、祭祀の事は特別の智識を要するに至り、祭司の家を生ぜり、而して祭司は夫れ夫れ家傳の讚歌を誦して首長に仕へぬ、後これ等家傳の讚歌を集録したるもの即ちリグ吠陀なり、これに十卷、一千十七章あり。

サーマ吠陀はリグ吠陀の第八卷及び第九卷の兩卷に基づき、祭祀に當りて實際に歌唱する爲めに作られたるものなり。

ヤジュール吠陀は、祭祀に有りて使用するところの咒語及び祭詞を集録したるものにて散文より成り、わが國の祓詞の如きもの、集録なり、これに、白ヤジュールと黒ヤジュールとの二集録あり。

アタルヴ吠陀は、リグ吠陀よりも頗る後世に出來しものにして、祭祀祈禱に用ふる咒文の集録なり、以上、リグ、サーマ、ヤジュールの三種を「三吠陀」と云ひて尊敬し、これにアタルヴを加へて、「四吠陀」と稱す。

以上の吠陀の外になほ重要な經典あり、即ち、ブラマナ及びブストラの二種之れなり。

ブラマナとは、上述の四吠陀の讚頌、咒文、祭詞等の儀式儀禮に關する説明解釋を述べたるものにして、吠陀の深義の解説書なり、これ亦祭司の家に傳はりしを集録したるものにして、リグ吠陀に關するもの、ヤジュール吠陀に關するもの等數種あり。

スートラは律法又は教條とも稱すべきものにして、教儀信條を簡潔に叙述したるものなり。學者の研究に依れば、ブラマナの成立後、凡そ八百年後に出來しものなりといふ。初め波羅門族(即ち僧侶)は祈禱祭祀を専門となし居りしも、尙これ等波羅門の關係せし外に家庭郷閭の習慣ありて行はれたりき。例へば、誕生式、婚禮式の如きこれなり。然るに波羅門族が漸次に勢力を得るに及びては、これ等の民間儀禮をもその支配の下に收め、宗教の一部として取扱ふに至れり。従つて其條項儀禮を一定して人民の依據となせり。斯かる定式を記せるもの即ちスートラ(修多羅)なり。このスートラにも種々の家傳あり。地方々に依りて異種異式のものありしが、中に就いて摩奴(Manu)といふ家に傳へたる法式に依りて出來たるスートラが漸次に完備して、他家の多くのスートラを壓するに至りしかば、遂に波羅門教の憲法となり、後世摩奴は人間の祖と仰がれそのスートラは摩奴の法典と呼ばれ、波羅門教の實際は悉くこの法典に準據することとなり、波羅門教は摩奴法典の律法的宗教と化するに至れり。

三 社會制度

摩奴法典の大成してより波羅門教はその隆盛を極め、摩奴法典に依りて社會制度を確立し、宗教と政治とともに波羅門の司るところとなり、謂はゆる神政を布くに至れり。従つて古代に於ては主としてたゞ精神的の方面にのみ限られたる波羅門教は、茲に於てあらゆる行動行爲を拘束し支配するに至り、小は一家庭の瑣事より、大は國家の立法行政司法の大權に至るまで、一に摩奴法典を證權となすに至れり。斯くて波羅門教は純然たる律法的宗教となり、數千年の古より現今に至るまで、偉大なる拘束力を有するに至れり。

摩奴法典は初め一家の家傳なりしことは上述の如し。然らば摩奴の家族子孫こそ、この法典の權威に服従すべきも、摩奴家以外の人々は何故に甘んじてその拘束を受くるを肯んぜしか。これ甚だ奇なるが如きも、畢竟するに摩奴は實に摩奴

一家の祖なるのみならず、實に人間の祖にして、該法典は其あらゆる子孫に遺したる家憲家訓なりといふ信仰に基づくものなり。摩奴の法典は、詳にいへば、摩奴家の家傳に他家の諸法典及び諸地方の法典を參酌して作りしものなるが、其性質が既に家憲家訓とも云ふべきものなれば、今日の法典とは著るしく其性質を異にせり。換言すれば、該法典には、今日の謂はゆる法律もあれば、宗教上の訓戒を初めとして行爲の應報、輪廻轉生の事に至るまで詳に説述せるものなり。即ち現世の刑罰並に來世の刑罰をも規定せり。故に摩奴法典は波羅門教の百科全書にして、法規大全、法令全書の如きものなり。偕て、摩奴法典に現はれたる社會制度の一斑を叙述せむに、これに四種の階級を認容せり。四種の階級とは、

- (一) 波羅門(ブラフマン)
- (二) 刹帝利(クシャトリア)
- (三) 毘舍(ワイシヤ)
- (四) 首陀(スードラ)

これなり。

而して其種姓の因りて分れし起原は全く一種の傳説に基づく。即ち化生説に依れり。その説に曰く、世界の創造神たる梵天の口より生じたるは、最貴の族にして宗教を司る祭司僧侶にして波羅門族これなり。故に社會の最上級に位し、他族はこれに順はざるべからず。次に梵天の腕より生じたるものは、政治及び軍事を掌るものにして波羅門の次に位す。王侯武人これなり。次は梵天の膝より生じたるものにして、貿易賣買を掌り第三位に居る。毘舍即ち商賈これなり。第四位は農耕稼穡を職とする首陀にして、梵天の脚より生じたれば四階中の最下級に位せざるべからず。而して梵天は人間の幸福の爲めに四級を設けたるものにして、四級は互に婚嫁を通ずべからざるは勿論、食卓を共にすること能はず。若し異族婚嫁するときは、それ等の當事者は四族以外の賤民に配せらる。茲に於てか、職業は種族階級に依りて世襲せられ、社會の進歩發展は阻碍せられ、印度の文明は停滯して今日の悲運を馴致するに至れり。

次に、誕生式、命名式、婚嫁式等の日常の行儀儀禮は一々こゝに紹介すること能はず。唯宗教を掌る波羅門族が如何なる生活をなすかは注目の値あり。かれ等はそ

の生涯を三期に區分す。即ち

- (一) 梵志期
 - (二) 家長期
 - (三) 隱棲期
- これなり。

梵志期とは少年時代を云ふ。凡そ波羅門の子弟にして八歳に達すれば、入門式を擧げ學業の師の家に行きて徒弟となり、波羅門の記號たる神聖なる綱を帶用す。夫れより營業を研習す。凡そ學業に五種あり。これを五明といふ。五明とは、

- (一) 聲明 文字文典の學
- (二) 工巧明 技術陰陽曆數の學
- (三) 醫方明 梵咒醫術藥劑の學
- (四) 因明 論理學
- (五) 內明 宗教の學

の五學をいふ。修業年限は一定せざれども七八年より長きは數十年に及ぶ。學業

成れば梵志時代終りて、師家を辭して家に歸り、妻帯結婚して家長期に入る。茲に祖先の祭祀、宗教上の事務、子女の養育に従ひ、専ら家長としての任務に従ふ。斯くて齡既に長け子女も亦成長して後憂なきに至れば、家長を子女に譲りて、家を出て、樹下石上の生活に移る。これを隱棲期といふ。即ち澹然として思ひを宇宙の真相に馳せ、少欲知是、森林の間に悠遊して晩年を送る。

四 教義

(イ) 世界の成立と破滅

婆羅門教の天地創造説に依れば世界は梵天より起れりと云ふ。今その傳説の梗概を叙述せむに、世界の未だあらざる太初には自存のみ渾沌たる暗黒中にありき。然るにかれ自己の本質より萬物を創造してみむとの欲望を起し、先づ其思想にて水を作り水の中に卵を入れぬ。而して自存は自ら梵天となりて、その卵の中に生れき。斯くて、梵天は自己の考へにて卵を二つに割りしが、上には天、下には地、

中には空を生ぜりき。夫れより梵天は自己の本質を割りて半ばは男、半ばは女を造りき。斯くの如くにして、その女性より一切の生物を生ぜり。而して、地、水、火、風、空の五つの物素と喜、憂、闇の三つの性質を以て、世界を整理しぬ。従つて人間の祖先たる摩奴も出来て、あらゆる宇宙全く成れり。以上は天地創造説の大要なり。

天地は斯くの如くにして生じ、斯くの如くにして發生せしが、而も素と梵天の欲望より發生せしものなれば、この開發生成は遂に墮落たるを免れず。茲に於て婆羅門教の歴史的厭世觀は起れり。曰く、世界は梵天の欲望より生じたるものなれば、苦痛多き世界なり。無常なる世界なり。従つて欣求すべき世界にあらず。厭離すべき世界なり。實に世界は四個の四時期を経て益、墮落し、溷濁し行くなり。四時期とは何ぞや。曰く、

- (一) クリタ期
- (二) トレタ期
- (三) ドグーバラ期
- (四) カリ期

これなり。クリタ期には罪惡なく純善のみありて、人々は何れも皆敬神の念深く、四姓の制度秩然として行はれ、宗教上の儀禮は完全に行はれ、飽食平和實に理想の時代なりき。然るにクリタ期より降るに隨ひて、世は謂はゆる澆季に近づけり。即ちドレタ期には善は四分の三に減じ、ドグーバラ期に至れば、更に濁亂して善惡相半して善は二分の一となり、種々の惡業増進して墮落は愈、その歩を進めたり。茲に於てか最惡の時期は來らざるべからず。カリ期即ちこれなり。カリ期に於ては、諸穢汚惡充滿して善は僅に四分の一に減じ、濁波滔々として墮落の極に達す。

斯くの如き四時期を合して一大時期と爲し、斯かる一大時期を経ること一千數に及べば、梵天は睡眠をなし、宇宙を自己に還歸せしむ。然るに斯くの如く梵天なる本源に復歸還滅したる宇宙は、こゝに消滅したるにあらずして、再び開發せらるべき運命を有す。即ち梵天は睡眠より醒めて更に世界を開發す。斯くて、一千大期を経れば、世界は又々梵天に還入し、夫れより又々開發發展して轉々究極するところなし。

これを要するに波羅門教の世界創造説は古へを善とし美とし夫れより今を悪とし穢とする一種の尙古思想の産物にして、謂はゆる歴史的厭世觀なるものに相當す。波羅門教の悲痛なる厭世觀こゝに立脚して生ず。

(口) 輪廻轉生と解脱

一切の業 (Karma) 即ち行爲は、過去、現在、未來の三世に互りて、必ず相當の報酬を受けざるべからず。謂はゆる業果行爲の結果といふ意なるものこれなり。而して世界の萬物は一として、善徳、愛徳、闇徳の三種の性質を具備せざるものあらじ。徳とは梵語求那の譯にして、徳用即ちハタラクの義なり。而して善行には善徳相伴ひ、惡業には愛徳相纏はり、惡行には闇徳従ふ故、この原因に依りて或る者は婆羅門の家に生れ、或る者は刹帝利の家に生れ、或は畜舎、或は首陀、或は劣等の動物に生を享くるなり。斯くの如く、生物(有情)は各、その業に因りてその果を受け、かれよりこれに、これよりかれに、轉々して究極するところなし。これを輪廻轉生といふ。摩奴法典には一々の所業に對して輪廻する境涯を、極めて具體的に記載しあるなり。

世には苦痛多く諸惡充滿し、人は業に依りて漸々輪廻して止むときなし。斯くの如き悲痛なる世界觀を抱くものに取りては、變化無常にして、差別ある現世界を脱却するを以て理想とするは自然の理なり。然れとも梵天の睡眠は一時的現象にして、假令斯かる厭ふべき世界は一たび梵天の中に還滅することありとするも、それは永劫の消滅にあらず。梵天一たび醒めむか、差別悲痛の世界は復た歴然として生じ來たるなり。果して然らば如何にかして眞正の解脱の内に入ることを得べきか。曰く信仰あるのみ。

信仰とは深く梵天に歸依しこれに合一せむことを努めざるべからず。換言すれば波羅門教の聖典たる吠陀を學び、善根を積み惡を離れて毫も行はず、四姓の區別及び義務を恪守嚴行し、又供儀儀禮を盛にし、これ等の功力に依りて漸次梵天に接近し、遂に「梵と我とは一なり」といふ智見を開かざるべからず。この智見にして一たび開けんか、梵天の劫波も輪廻の苦痛も、全然超越して全く梵天に合一し、最早差別相の束縛を受けざるに至る。これ即ち波羅門教の最上理想にして至高善なり。之れを解脱といふ。

五 印度教

波羅門教は印度の國教にして、上代より現今に至るまで數千載の間幾十億の民心を支配したりき。而も佛教の一度中印度恒河流域の地に勃興するや、人心は一に佛教に歸し、波羅門教は多大の打撃を受けざるを得ざりき。而して佛教が新銳の氣を以つて五印度の地に瀾漫するや、波羅門教は氣息奄々として一縷の命脈を保てるのみなりき。然るに佛教の隆盛も西曆八九世紀頃より漸次悲運に傾き、國民思想の勃興に隨ひて波羅門教は復活の氣運に向ひぬ。この復古の氣運に乗じて多く英俊婆羅門教の中に起りて、盛に國粹保存、宗教復古の主義を唱道しければ、民心は翕然として之れに赴き、剩へ疲弊せる佛教に向ひて一大痛撃を加へたれば、佛教は終に印度に於て殆ど滅亡するの悲境に陥り、波羅門教は隆々として新なる裝を以て民衆に臨むに至れりき。而してこの新面目を發揮し來りし波

羅門教は、その教典に於て、その教義に於て、舊波羅門教に大同小異なりと雖、その神格に於て、儀禮に於て、著るしく面目を改めたり。故に學者は舊婆羅門教に對してこれを新波羅門教と稱し、或は印度教(Hinduism)と稱す。故に今波羅門教の條下に附記して、其一斑を極めて簡略に叙述せんとす。

佛教興隆後、婆羅門教は一時勢力を失ひ沈滞しつゝありしが、佛教の運命漸く傾き來たるや、更に復古の氣運を示せり。而して此復古したる新波羅門教即ち印度教が、其根幹たる波羅門教と著るしく異なる點は、實に雜多の民間信仰を攝融して其神祇を豊富にし、其神格を明確にしたる點にありて存す。而して其改革の先鋒たり大成者たるは、實に西曆第八世紀に出でたる商羯羅阿闍梨シヤンカラアチヤリヤこれなり。彼の吠檀多哲學は實に新波羅門教の哲學的方面に於ける精華にして、又實に印度哲學思想の最高潮に達せるものなり。

印度教に於てもその社會制度の方面に於ては、大要舊波羅門教と異るところなしと云ふも不可なし。唯々益々複雑になり居るのみ。即ち社會制度としての四個階級の如きは、別に異るところなきも、最も著るしき制度として、附着し來りしは、寡

婦の殉死律の如きは其主要なる一例なるべし。又往昔は波羅門の階級に屬する人口も甚だ少かりしかば、何れも祖先傳來の宗教祭祀の事に従事せしも、漸く同族者の蕃殖するに至りては、同族者悉く宗教祭祀の事に従ふ能はざるに至れり。茲に於てか、勢ひ他の職業に従事せざるべからざる必要を生じ來たる。而も波羅門の自尊なる、何等かの理由を附して宗教祭祀以外の職業を神聖化するにあらざれば、自家の尊嚴を保持する能はざるは必然の理なり。茲に於てか、彼等は職業を淨穢の二部に分類せり。而して、清き職業に向つて、波羅門の之に従事することを拒まざれども、穢れたる職業に就くことは、之を嚴禁せり。是等のことを規定せる法典凡そ十六種あり。

次に信仰の方面に就きての著るしき變化は前にも謂ひしが如く、民間信仰に於て崇拜の對象たりし諸神格を攝化融合せしことが、從來の神格に對する觀念を明確にしたることこれなり。就中梵天、ヴィシュヌ、シヴァ三神の崇拜は印度教の特色として數へざるべからず。此三神は元來梵天の有せし三種の異りたる特質を抽象して、夫れ等に神格を賦與したるものにして、即ち梵天が世界を創造し、世界を維

持し、世界を破壊する三方面の性質を取り來りて其一々に新なる神格を興へたるものなり。詳にいへば梵天は世界創造の方面を代表して創造神として仰がれ、ヴィシュヌは世界維持の方面を代表して維持神と尊ばれ、シヴァは世界破壊の方面を代表して破壊神として畏怖せらるゝに至りしなり。而して相互に全く從屬的關係なき各、一個獨立の神格として承認せらる。就中、ヴィシュヌは維持の神なればその容貌も溫和慈愛の相を有すと考へられ、シヴァは破壊の神なれば、其容貌も獐惡猛烈の姿を有すと思はれ、偶像の如き又此想像に依りて彫刻せらるゝに至れり。古代の波羅門教に於ては、原始的佛教に於て又然るが如く、偶像崇拜の風習はなかりしものゝ如し。然るに、新波羅門教に至りては、殿堂の宏麗、偶像の羅列はその儀禮莊嚴上の重要事となれり。随つて、巡禮の風起り、祭禮盛に行はるゝと共に宗教上の信仰は益、民間信仰と融和して、迷信百出するに至れり。

更に翻つて致ふるに、印度教の神祇を豊富にしたるは、民間信仰の對象たる諸神を攝合吸収したるは著るしき事實なりと雖、而も一面には化現の思想に依ること亦多大なりとす。化現の思想とは神は隨意に隨意の形式を以つて、人界に化現

して救済をなすことを得、又なしつゝありとの信仰これなり。此思想の一たび發生するや、梵天、ヴィシヌ、シヴァの三神は種々の形を以て人界に化現し來たると信せられ、殊に溫和慈愛の源たるヴィシヌは、或は獅子に化現し、牧人に化現して春陽百華の間に戯れ、紅綠燎亂の牧場に歌ふと致へられ、宗教詩人は優婉の筆を以て幾多の戀歌を草するに至れり。

印度教の分派は非常に多くして、一々其發生の由來及び信仰の相異點並に風習儀禮の詳細を叙述せむことは、本書の能くし得るところにあらず、故に今その主なるもの、二三に就きて、奇異なる風習の一片を語るべし。印度教の中に、シヴァ崇拜の一派あり、かれ等は前額に白色を以て三横線を描きて信仰の記號となし、三十二珠より成れる珠数を携ふ。又、ヴィシヌ崇拜の一派は額上に紅黃白の三縦線を劃して信徒の徽章とし、一百八珠より成る珠数を携ふ。その他、額上に烙印するもの、腕上に烙印するもの、醜惡なる風習は各派に種々の形式を以て表はれたり。就中、腐敗汚惡なる風習を生殖器崇拜となす。要するに、印度教も其發生の源流に於てこそ、深遠なる哲學もありたれ、清新なる

儀禮も行はれたれ、而も現今の煩瑣極りなき無意味なる儀禮と、煩雜苛酷なる社會制度とは印度の民心を腐敗せしめ、知識は停滯し信仰は固結し、全民族を擧げて迷信の深淵に喩喁しつゝあり。その間、二三の俊傑ありて改革の擧を圖りしと雖、滔々たる大勢はこれを如何ともする能はざるべし。彼等が英國の配下に屬するも亦此迷信の結果なるを思へば、迷信の弊豈懼れざるべけむや。

佛 教

一 教祖釋迦牟尼

西曆紀元に先だつこと凡そ五百年、中印度の迦毘羅衛(Kapilavastu)國に王あり、首圖駄那(Suddhodana)即ち淨梵王といふ。迦毘羅衛はロヒニ(Rohini)河に臨み、對岸に拘利城(Koli)あり、共に釋迦種族に屬す。淨梵王の夫人なる摩耶(Mahya)は拘利城主善覺王(Suprabuddha)の女なり。摩耶夫人は即ち釋迦牟尼の母にして、夫人の妹波闍波提(Prajapati)も亦淨梵王の夫人となり、摩耶の薨後釋迦牟尼を養育せり。

釋迦牟尼の降誕、出家、成道、及び入滅に就きては、異説紛々として容易に之を決すべからず、されば今は、衆聖點記の所説に據り、西曆紀元前五六五年降誕、同紀元前四八六年入滅と假定せんとす。釋迦牟尼は四月八日、藍毘尼園 (Lumbini) に降誕せり。幼名をば薩婆悉達 (Savathasiddha) と稱す。一切成就の義なり。世に悉達太子と云ふ。生後七日にして母妃薨せしかば、姨母の養育に依りて人となれり。悉達太子は文學を跋陀羅尼に受け、武藝を闍提提婆に習ひて、文武共に完全なる教育を受けたり。當時印度は群雄割據の時代にして、北に室羅伐悉底 (即ち舍衛國) あり、東に拘尸那揭羅 (即ち拘尸城) あり、東南に王舍城あり、南に波刺那斯城あり、迦毘羅衛はこれ等諸強國の間に介在する一小國にして、勢力の均衡に依りて國運と維持したりき。故に悉達太子の降誕は國民をして、迦毘羅衛の前途に多大の希望を抱かしめたりき。

然るに太子は漸く眼を人生の真相に向け、深き瞑想に沈み王者の驕樂も宮廷の豪華も其志を樂しまする能はざりき。斯くて父王は太子の爲めに、耶輸陀羅姫を迎へて妃とし、大に宮苑を築きて太子の心を慰めんとしぬ。太子は一子羅睺羅を得しも厭世の念益深く、終に求道の志に驅られ、一夜密に城内を出て白馬乾陁に跨りて曠野に入りぬ。時に二十九歳なりき。

太子曠野に入りて、處々に智者を訪へり。即ち跋迦婆 (Bhargava) 阿邏賀薩 (Arakakali) 憍陀羅羅摩子 (Dharmaputra) 等を歴訪して、解脱の法を問へり。然るに、かれ等或は苦行に依りて生天の法を説き、或は當時の哲學の一派たる數論の教旨に依りて解脱すべきを説きしも、太子は心に滿ざりしかば去つて苦行を試み、六年の久しきに及ぶも少しも得るところなし。これより先き、迦毘羅衛の君臣は太子の故城に復郷せんことを請ひしも、太子は頑として應ぜざりしかば、阿若憍陳如跋提婆敷摩訶男阿説示の五人を使用して太子に隨從せしめたりき。所謂「五比丘」なるものこれなり。

太子は茲に於て苦行の途に解脱の法にあらざるを知り、尼連禪河に沐し村女の乳糜を受けて氣力を回復し、伽耶に至り、毘鉢羅樹下に端坐瞑想して終に無上の眞理を自覺せり。時に三十五歳の十二月八日、東天明星の輝く時なりきといふ。太子既に無上の大道を大悟せり。茲に於てか迦毘羅城の一太子は、天と人との師

なる佛陀となれり。夫れより婆羅捺國の鹿野苑に往きて、先きに己れを捨て去りし五比丘を度せり。初轉法輪即ちこれなり。斯くて成道三個月の後、五十六人の徒弟を得て王舍城に向ひしが、偶雨期に遭ひしかば止住して法を説けり。これを雨安居と云ふ。雨安居終りて苦行林に優爲迦葉、那提迦葉、竭夷迦葉の三人を度せり。この三迦葉は兎弟にして、當時事火婆羅門の泰斗なりき。尋て王舍城に入り、頻毗婆羅王の爲めに説法し、舍利弗及び目犍羅夜那(即ち目連)の二弟子を得。摩河迦葉を得たり。その後故城に還りて、父王姨母を訪ひて道を説けり。この時難陀、羅睺、羅提婆、達多、阿難、阿菟樓陀、優婆離等の一族俊秀にして、出家入門するもの多かりき。

釋迦は斯くの如く、多數の弟子を得るとともに、かれ等を四方に派遣して道を説かしめ、自らも摩竭陀、毘舍離、憍薩羅等恒河流域の地に説法し、席暖るに暇なかりき。王舍城の竹林精舍(Venuvana-vihara)、舍衛城の祇洹精舍(Jetavana-vihara)、毘舍離の大林精舍(Mahavana-vihara)の如きは最も有名なる道場にして、外護者としては摩竭陀の頻毗婆羅及び阿闍世の二王、憍薩羅王の波斯匿王最も顯はる。

釋迦は成道以來東西に道を説くこと實に四十五年、その間提婆達多等の阿闍世王に説きて、一時その傳道を妨げしことありしと雖、概ね平和の裡に慈悲博愛の法音を説き、中印度の地に普く法雨を灑ぎぬ。當時横暴なる婆羅門の壓制に苦みし印度の民は、競ふて釋迦の教に歸し、思想界の革命を起しき。斯くて釋迦は最後に摩竭陀より毘闍離に向ひて、純陀が供養を受け、道に病を獲て拘尸邦揭羅(Kusinagara)に往き、こゝに老婆羅門須跋陀羅を度し、二月十五日の夜半、婆羅雙樹の間に涅槃に入りぬ。時に歳八十。

滅後第四月即ち雨安居の第二月、摩訶迦葉以下の五百人の弟子達は、王舍城外の畢鉢羅窟(Pippala-vihara)に於て、阿闍世王の保護の下に遺教の結果を行へり。即ち阿難は釋迦の訓言を誦出し、優婆離は釋迦の定め置きし戒律を誦出して大衆これに承認を與へ、經及び律を決定せり。阿含及び律はこの時に成れるものなり。これを「第一結集」と云ふ。

二 原始佛教

釋迦は如何なる説教をなし、又如何なる教理を宣布せしか。佛教に小乗あり、大乘あり、顯教あり、密教あり。これ等は凡て釋迦の所説なるか。或は小乗は釋迦の所説なれども大乘は釋迦の所説にあらざるか。顯教は釋迦の所説なれども密教は釋迦の所説にあらざるか。凡そこれ等の問題は、經典その物の成立、編纂の歴史等明かならざる今日に於ては、如何なる説明を與ふるとも臆説の範圍を出づること能はざるべし。吾人の考ふるところに依れば、阿含、律等の經典は幾分後世の混入添加あるにもせよ、釋迦説法の面影を比較的、事實的に傳へ居るものなるべし、而して大乘の經典はその誇張添加の多き點より見て、確に後世の編纂に成れるものなることは疑ひを容れずと雖、而もその教理の萌芽は既に阿含等の小乗經典に何等かの形を以て、含蓄せられ居りしものならんと信ぜらる。そは兎に角、今は

一般の學者の認めて最も原始的とせる、四諦、十二因縁の大要を紹介し、次に所謂「三法印」即ち諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の教理を簡單に叙述すべし。

四諦とは、四つの真理なる意にして、苦諦(Dukkha)、集諦(Samudaya)、滅諦(Nirodha)及び道諦(Marga)即ちこれなり。四諦は迷界の因果及び悟界の因果を開説せるものにして、苦諦は迷界の果にして集諦は迷界の因なり。滅諦は悟界の果にして道諦は悟界の因なり。先づ苦諦より云はんに、吾人孰この人生を觀るに、苦は多くして樂は少し。假令樂しと見ゆるものあるも苦の伴はざる樂なく、歡樂極まりて哀情多きは、世態の常にして、快樂もこれを極むれば却つて苦痛を生ず。斯くの如く人生は苦にして樂あることなし。これ真理にして動かすべからず。これを苦諦といふ。然らば斯かる苦しき結果を生ぜし原因は何ぞや。曰く、吾人の盲動に由るのみ。詳に云へば真理を見るの明なき迷(惑)といふより行爲(業)といふをなし、其結果として苦なる人生を得たり。この惑と業とは斯くの如き結果を招集するが故にこれを集といふ。而して斯く結果を招集することは真理なるが故に集諦といふ。斯くの如く吾人は過去の惑と業とに依りて現在の苦を招致せるが如く、現在の惑と

業とはまた未來に於て苦の世界を招集すべく、斯くて轉輾極まりなく、遂に解脱を得ること能はず。即ち輪廻(Samsara)して極まるとなきなり。果して然らば斯かる苦界を解脱する方法なきか。曰くあり。道諦を修して滅諦に至らざるべからず。滅諦に至るには苦界を招致せる原因たる惑と業とを滅せざるべからず。これをなすには眞理を見るの知見と徳行とを具へざるべからず。即ち道諦を修せざるべからず。道諦を詳説せるものに八聖道あり。八聖道(正道)とは、

正見 正しき見解を有すること、即ち四諦を眞なりと考ふべきこと。

正意 正しき眞理(即ち四諦)を思惟すること。

正語 言語を慎み、虚妄を言はざること。

正業 正しき行爲をなすべきこと。

正命 邪命の反對、正當なる生活をなすべきこと。

正精進 勉強努力して怠らざること。

正念 意思(心)を正しく持すること。

正定 默想禪定をなすべきこと。

の八種の善行これなり。善く八聖道を守り行ふ時は、惑と業とを滅して滅諦に到達するを得、これ佛教の至高善にして涅槃(Nirvana)と稱せらる。以上は四諦説の梗概なるが、十二因縁は四諦の中苦集の二諦を詳説したるに過ぎず。而も十二因縁は釋迦が菩提樹下に於て、順逆に觀察熟考して成道を得たりと云ふを以て見るに、原始佛教に於ける重大なる關係を有すといふべし。十二因縁とは左の如し。

- 無明 眞理を見るの明智なきこと、即ち惑。
- 行 無明に依りてなす行爲、即ち業。
- 識 受胎の時、識の母胎に宿ること。
- 名色 胎内にある初期、即ち識と肉體と出來しこと。
- 六處 體形(眼、耳、鼻、舌、身、意)の六處の出來しこと。
- 觸 生後二三歳迄、唯觸覺を有するのみ。
- 受 四五歳より十二歳迄、愛憎等の感情の發生すること。
- 愛 十六七歳より壯年時代、愛欲の心を生じ、取得せんとする心を起すと

取 有 生 老 死

善惡の行業のこと。(善惡の行爲は必ず其結
果を有する故有といふ)

即ち無明と行とが原因となりて識以下の人生を招集す故に前者は集諦に當り
後者は苦諦に當る。これに就いて二世一重、三世兩重等の説明法あれども、要する
に十二因縁説は苦集の二諦を詳述せしものに過ぎず。

次に三法印に就いて言はんに、諸行無常とは萬物は悉く變化を免れずと云ふ意
なり。既に變化あれば常住にあらず。故に吾人は執着の心を離れざるべからず。諸
法無我とは世界及び人生には主宰者あるにあらず。人間には靈魂または主體と
も稱すべきものあることなし。然らば行爲をなすもの及び行爲の責任を受くる
ものなきかといふに、假我ありてこれをなしこれを受く。即ち吾人には實我は存
在せざるも、情、塵、識の三者ありて一定の境界に於て染着を生ずるが故に、假我を
生ず。(染説といふ) 假我とは今日の心理學が靈魂の實在を説かずして、意識の統

一連續の上に我の存在を認むると同じ理なり。斯くの如く吾人は實我を有せず。
假我を有するに過ぎざれば、決して我見を起すべからず。執着を離れ我見を破し
煩惱を斷ずれば、茲に涅槃に至るを得。涅槃は即ち寂淨無爲の界にして、生滅變化
の因果律を超越せるものなり。これ即ち究極の樂地なりとす。

三 小乗教の傳播と分派

佛滅後、その遺教は嚴重に保持せられ、其遺律は嚴重に恪守せられ、斯くの如くに
して、阿輸迦(Asoka)王の時代に及べり。王は西曆紀元前三世紀頃に出でし英主に
して、孔雀(Nandya)王統の第三王に當り、華氏城(Pataliputra)に都し、印度の大半を征
服せり。羯佻伽を征する後、佛教に歸し、教團を保護すると共に、教法の宣布に勉め、
誥文を石柱又は磨崖に刻して、仁政を行ひ、結集をなし、左記の如く傳道師を諸國
に派遣せり。茲に於て佛教初めて城外に傳はりき。

末闍提

罽賓(Kashmir)國及び犍陀羅(Gandhara)國

摩訶提婆

摩醯沙末陀羅(Mahisa)國

勒葉多

婆那婆私(Vanavasi)國

曇無德

阿波蘭多迦(Aparantaka)國

摩訶曇無德

摩訶勒訶(Maharajha)國

摩訶勒葉多

史那世界(Yonaloka)國

末示摩

雪山邊(Himavanta)國

須那迦及び憍多羅

金地(Subannabhumi)國

摩晒陀

師子(Lanka)國

罽賓及び犍陀羅は波斯の東に當り西北印度地方にして雪山邊はヒマラヤ山附近師子國は今の錫蘭島のことなり而して史那世界國とは史那人の住國の義にして希臘人の國をいふ即ち歷山王の印度侵入以後希臘人の居住せる條支(タリヤ)埃及マセドンエビローロス、キレシヤの地方なりその他は印度半島の諸國なり斯くの如く阿輸迦王は佛教の宣傳に盡力せしかば西人耶蘇教に於けるコンス

(一) 大衆部

これより左の八部を分出す本末合せて九派あり

(二) 一説部

(三) 説出世部

(四) 鷄胤部

(五) 多聞部

(六) 説假部

(七) 制多山部

(八) 西山住部

(九) 北山住部

タンチヌス大帝の功績と並稱するに至れり。阿輸迦王の後西曆紀元第一世紀頃に當り犍陀羅國に迦膩色迦王あり兩王の間凡そ四百年のうちに小乗教は多大の發展をなし初め上座大衆の二部に分れしが次で二十部に分裂せりといふ。今世友(Vasmitra)の作と傳へらるる異部宗輪論(Samayasbhedoparvanacakra sūtra)に依れば二十部の名稱は左の如し。

- (一) 上座部 これより先づ五部を分出す、本末合せて十一派あり。
- (二) 説一切有部
- (三) 犢子部 之より(七)法上部、(八)賢胄部、(九)正量部、(十)密林山部の四部を出だす。
- (四) 化他部 これより(十)法藏部を分出す。
- (五) 飲光部
- (六) 經量部

迦膩色迦王は大月氏族の英主にして四方を經營し西は希臘人を服從して東南は中印度に及び威權一時に盛なりき。王は波栗濕縛(Piśva)即ち脇尊者を上首とし、婆須蜜(Vasumitra)即ち世友尊者、達磨多羅(Dharmatila)即ち法救尊者、瞿沙(Ghoṣa)即ち妙音尊者、佛陀提婆(Buddhadēva)即ち覺天尊者等の五百僧を集めて三藏の註釋を製せしめき。これを第四結集といふ。現存する阿毘達磨大毘婆娑論(Abhidharma-mahāvibhāṣa-sāstra)二百卷は、此時の製作に係る論藏の註釋なりといふ。婆娑論は實に説一切有部に屬する迦陀衍尼子の作、阿毘達磨發智論(Abhidharma-jñānaprasthāna-sāstra)二十卷の註釋にして、説一切有部の教權茲に確立せり。

「婆娑論」の後世親出てて「婆娑論」の説に依り、他部の説の長所の取るべきは參考して「俱舍論」を著せり。俱舍論は實に小乗教の理論的方面を集大成したる名著にして、支那に於ける俱舍宗は専ら此論に依りて成立するものなり。(毘盧宗 參照)

四 大乘教の二派

古來佛教史家の通説に依れば、大乘教の組織の整然として成立せしは、馬鳴の起信論[出てたるを以て最初とす。然れども近世の研究に依れば、迦膩色迦王のときに「婆娑論」編纂に與り、佛所行讚、「大莊嚴論」等を綴りし馬鳴は、起信論の作者たる馬鳴とは同名異人なるものゝ如く、起信論の作者たる馬鳴は、遂に後世の出なるが如し。故に今は印度に於ける大乘教の組織に於て、與りて力ありきと稱せらるゝ。龍樹提婆無着世親の諸論師に就き、その事蹟著述、教説の梗概を叙して、印度に於ける大乘佛教の一斑を髣髴せしめんとす。而して龍樹及び提婆は、支那佛教に

於ける三論宗に重大なる関係を有し、無着及び世親は同じく支那佛教に於ける俱舍(毘婆沙)法相の二宗に重大なる関係を有す。唐代に入竺せる義淨が、當時印度に於ける大乘教の状況を記して、印度の大乘は瑜伽、中觀の二宗に過ぎず(南海寄歸傳參照)といひしを以て見るも、この二宗の位置を致ふるに足る。蓋し瑜伽とは無着、世親の教系を指し、中觀とは龍樹、提婆の教系を指し、なり。

「中論」及び「十二門論」は三論宗に用ひられ、大智度論は四論宗に用ひられ、十住毘婆娑論は、念佛宗に重用せらる。就中「中論」最も重要にして龍樹の原作は支那に傳はらざりしと雖、これに諸家の註釋を施し、ものは、上記の「中論」の外に無着註の「順中論」二卷、分別明註の「般若燈論釋」十五卷、安慧註の「大乘中觀釋論」の三書、支那に傳釋せられたり。

龍樹の門に提婆(Tibhapti)あり、龍樹の説を祖述して「百論」二卷を著はせり。謂はゆる三論は、「中論」「十二門論」に、「百論」を加へたるものなり。提婆の傳も亦詳ならず。龍樹、提婆の教説は支那に於ける三論宗これを代表せるものと見るべく、謂はゆる「空宗」なるものこれなり。(三論宗の條下參照)

龍樹、提婆の時代を、西曆第二世紀の終乃至第三世紀の初とすれば、夫れより凡そ二百年を経て、無着、世親の兄弟ありて大に大乘の教義を宣揚せり。無着(Asanga)も世親(Vasubandhu)もその傳また詳ならず。世親は初め小乘に歸し、俱舍論を作りて衆賢等と諍ひしが、後兄無着の勸告に依りて大乘に歸しきといふ。無着の著書として有名なるものは、

攝大乘論

三卷 〔陳、眞諦譯〕

顯揚聖教論

二十卷 〔唐、玄奘譯〕

等なり。世親の著書としては、俱舍論の外甚だ多く、其支那に傳譯せられたるものも凡そ三十部に及べり。今中に就いて殊に重要なるものを擧ぐれば左の如し。

攝大乘論釋

〔同名のもの二譯あり、眞諦譯十五卷、玄奘譯十卷〕

百論

二卷

〔提婆作に註釋を加へしもの、羅什譯〕

中邊分別論

二卷

〔眞諦譯、玄奘譯、辨〕

唯識二十論

一卷

〔唐、玄奘譯〕

三十唯識論頌

一卷

〔同上譯〕

十地經論

十二卷 [菩提流支釋]

佛性論

四卷 [真諦譯]

無着、世親の教義は所謂有宗にして、唯識宗の説これなり。(法相宗)

龍樹は那伽闍刺樹那 (Nāgārjuna) の義翻にして、密教にては龍猛と譯す。謂はゆる八宗の祖師の稱ある高僧にしてその名甚だ高しと雖、その傳記に至りては茫漚としてこれを知るべからず。龍樹菩薩傳に依れば、初め咒術を學び後佛教に歸せりといふ外、記するところなし。龍樹が華嚴經を龍宮より取り來りしといふ傳説、及び南天の鐵塔を開きて密部の經典を得たりといふ傳説は甚だ有名なりと雖、もとより史實として致ふべからず。斯くの如く、その傳記散佚して其年代の如きも知るべからざれど、南天竺の引上王の歸依を得て、大に大乘教を宣揚したりしことは疑ひなき事實なり。その著書として支那に傳はれるもの甚だ多し。今中に就いて殊に重要なものを擧ぐれば、左の如し。

中論 龍樹作、青目註

四卷 [姚秦鳩摩羅什譯]

十二門論

一卷 [同] 上譯

大智度論

(般若經の註釋)

一百卷 [同]

上譯

十住毘婆娑論 (華嚴經の註釋)

十七卷 [同]

上譯

儒 教

一 孔 夫 子

儒教は支那の宗教としてその起原最も古く、その民心に濕潤せる度も最も深く、且つ廣きものなり。嚴密に云へば儒教の祖は孔子と稱すべからず。何となれば儒教は唐虞三代の思想が孔子の集成と孔門諸儒の整理とに依りて、一宗教の形式を完備するに至りたればなり。換言すれば儒教は孔子の新發明にあらずして、支那古代思想が孔子に依りて集大成せられ、後世儒教なる宗教の基礎が茲に置かれたるなり。固より何れの宗教にせよ、古來の國民思想を無視し全然一個人の獨創に成れるものはあらずと雖、孔子の古代思想に於ける關係は、夫れ等の教祖の先代の思想に於ける關係よりも厚く、且つ密なるものありて存すと謂はざるを

得ず。故に孔子も「述而不作」と云ひき。これ孔子がその思想の根柢を、先代の思想の中に見出だせしことを告白せしものにあらずや。然りと雖、これあるが爲めに孔子の價値は毫も減ぜらるべきにあらず。彼は依然として百代の聖師にして萬世の儀表たるなり。

孔子名は丘、字は仲尼、その孔子といふは尊稱なり。その祖先は殷の後にして、宋に居りし時初めて姓を孔氏と云ひき。數世の後宋の滅亡するや魯に移住するに至り、斯くて叔梁紇に及び、魯に仕へて大夫となりしが、晩年顔氏の季女徵在を娶り、尼山に隣りて孔子を生みきと云ふ。實に周の靈王二十一年、昌平郷の地なりき。孔子人となり禮儀に厚く、幼時群童と嬉遊するにも常に俎豆を陳めて儀容を設けしと傳へらる。孔子長じて、季氏の宰となりしが、料量平にして人望ありき。尋て司職の吏となり、牛羊の宰となりし時には蓄類蕃殖したりき。斯くて壯齡にして周に往き禮を老子に問ひきといふ。この頃より門人漸く進みしが、會、魯國に兵亂起りしかば難を齊に避けき。時に齊は景公の代なりしが、景公孔子を迎へて政を問ひ、尼谿の田に封ぜんとす。而も晏嬰なるもの、拒阻に依りて志を達すること

能はず。又季孟の地に封ぜんとせしも決せざりしかば、孔子は故國魯に歸りき。魯の定公位に即くに及びて孔子用ひらるゝを得たり。孔子は中都の宰より司空に進み、尋て大司寇に登り、定公を輔佐して紀綱を張り、齊の景公と夾谷の地に會せしが、偶、景公は魯の定公を脅かさんとなししかば、孔子大に叱して事なきを得たり。茲に於いて景公大に孔子の勇を懼れ、嘗つて魯より割取せし土地を還すに至り。而も魯の國內を見るに、當時魯の三家鼎立して互に權を争ひ、王室日に式微せしかば、孔子は大にこれを憂ひて王權擁護の策を講じ、三城攻陥の計を立てしが、一城は之れを攻圍せしも遂に之を降すことを得ざりき。孔子魯相となり、臣側の亂臣少正卯を誅し、三箇月にして治績大に舉りしが、齊人これを懼れ、季桓子を誘ひしかば、魯政又大に亂るゝに至れり。茲に於てか孔子は魯を去りて四方に遊べり。

孔子衛より將に陳に赴かんとす。時に匡人は嘗つて季氏の臣、陽虎の暴虐を受けたりしを以て復讐の念を抱けりき。然るに禍にも孔子の貌、陽虎に似たりしかば、匡人怒りて孔子の徒を圍めり。孔子泰然として、天の未だ斯文を喪はざる、匡人わ

れを奈何せん」と絶叫せり。而も孔子の陽虎にあらざることの判明せしかば、匡人圍を解さぬ。孔子は衛に反り曹に往き、宋に適き、弟子等と共に大樹の下に禮祭を修習せしが、桓魋なるものあり。大樹を伐り倒せり。孔子毅然として曰く、天の徳をわれに生ずる、桓魋われを奈何せん」と。夫れより、鄭、陳、衛、葉、蔡等の諸國に流浪し、昭王の招きに應じて楚國に行かんとせられしが、陳、蔡兩國の大夫等、孔子の楚に用ひられんことを恐れ、兵を出だして、孔子を野に圍みき。事甚だ匆卒に出でしかば、孔子も歎じて、詩にいふ、兕にあらざ、虎にあらざ、彼の曠野に率ゆ。わが道非なるか。われ何すれぞ茲に於てする」と言へり。子貢これを聞きて曰く、夫子の道至大なり。天下能く容るゝ無し」と。顔回慰めて、容れられざる何を病まん。然る後に君子を見る」と言へり。楚の昭王、孔子の急を聞き、兵を興して之を迎へしかば、孔子楚に入るを得たり。昭王大に喜び、封ずるに、書社之地七百里を以てせんとせしに、令尹子の爲めに拒まれて志を達すること能はず。茲に於て孔子は空しく衛に反れり。尋て季康子の爲めに魯に迎へられ、哀公政を問ひしも、終に之を用ふること能はず。孔子はわが道の行はれざるを悟り、これより志を専ら學事に用ひ、古詩を刪定して

三百〇五篇となし、諷誦絃歌悠遊自適せり。今の詩經これなり。晚年易を喜び常に卷を解かず、熟讀玩味、章編三絶せしと云ふ。繫辭傳はその作るところなりと傳へらる。更に魯の史記に據りて、春秋を作り、大義名分を明かにし、隱公より哀公に至る十二公を叙して筆を獲麟に絶ちぬ。亂臣賊子之を見て大に恐懼しきといふ。斯くて周の敬王四十一年、歳七十三にして卒す。弟子三千人、身六藝に通ずるもの七十七人なりしと云ふ。孔子の傳はその數少からずと雖、史記の孔子世家、簡にして要を盡せりといふべし。

二 經 典

儒教にて最も尊重する典籍四部あり。謂はゆる、論語、大學、中庸、孟子の四書。これなり。四書に並いて尊重せらるゝものに五經あり。詩經、書經、易經、春秋、禮記。これなり。今一々に就きて、簡單にその成立及び内容を叙述すべし。

(十) 四書

四書は實に儒教の根本經典なり。就中「大學」「中庸」の二書は元來獨立せるものにあらずして、素と「禮記」の中にありしものなりしを、宋代に至りて河南の程子これを「禮記」の中より抽出して獨立の二書となし、朱子に至りて「大學」「中庸」「論語」「孟子」の四部を四書と定め、爾來儒門の金科玉條、千載不易の金典となれり。

大學 孔子の遺著として傳へられ、初學者の入門書なり。四書を讀むには、「大學」を先にすること古來の習慣なりき。

中庸 孔子の孫なる子思の著はすとて傳へらる。子思は孔子の子、鯉字は伯魚といひし人の子にして、名は汲、子思はその字なり。孔子の門人なる曾子に就いて學を受けたりといふ。子思の傳は詳ならざれども、孔子と等しく又諸方に流寓し、六十二歳の時宋に適き、樂朔の爲に圍まれ、その間に「中庸」を作り、晩年魯に還り、穆公の師となりしとぞ。「中庸」は組織的に儒教の要領を叙述したる一小篇なるが、その作者及び成立に就きては、異說甚だ多けれども今一々これを叙せず。

論語 論語は孔子の言行録にして四書中最も重視せらる。その編纂成立の次第

に就きてはまた異說紛々として容易に決すべからざる程なり。或は曾子、有子の門人の編するところといはれ、或は子游、子夏の徒の編輯に係るといひ、或は門人相集りて編纂せしともいふ。其「論語」といふ理由は、那昂の疏に依れば、論は綸なり、綸なり、理なり、次なり、撰なり。この書を以て、以て世務を經綸すべし。故に綸といふ。圓轉窮りなし、故に綸といふ。萬理を蘊含す、故に理といふ。篇章序あり、故に次といふ。群賢集定す、故に撰といふ。と解し、劉綏は、昔仲尼微言、門人追記す。故にその經目を仰ぎ、稱して論語といふ。蓋し群論名を立つること茲に始まる矣と釋せり。論語には三種の異本あり。

(一) 魯論

(二) 齊論

(三) 古論

これなり。魯論は魯の論語にして二十篇より成り、齊論は齊の論語にして二十二篇より成り、古論は孔家の壁より發見せられたりといふ。論語にして二十一篇より成る。而して吾人が今日普通稱して「論語」といふは、十卷二十篇の「魯論」の形式を

有するものなるが、而も純然たる魯論にあらずして、その内容は種々に異れるところあり、折衷的のものなりといふ。

孟子 總て七篇より成る。その成立に就きてはまた異説あり。或は孟子の自作なりといひ、或はその弟子萬章、公孫丑等の先師の言行を録せるものともいふ。孟子名は軻、字は子車、又子輿ともいひ、生卒の年月明かならず。或はいふ、周の安王十七年に生れ、同赧王三十三年に卒す。年八十四と要するに、孔子歿後百餘年頃に鄒の地に出て、業を子思の門人に受けきといふ。當時邪說横行、諸侯皆利を事とせしかば、孟子は諸侯を遊説して盛に仁義を唱へて利を排し、王道を主張して覇業を賤し、楊墨の異端を排撃して、孔子の遺教を宣揚するを以て己れが任となしたり。晩年に至りわが道終に行はれざるを悟りて、門人を教へて餘生を送りぬ。

(四) 五 經

四書に次ぎて説明すべきは五經なり。五經の中には文學の書あり、哲理の書あり、禮儀の書あり、歴史あり。以て儒教の常識修養書を網羅せるに近し。

詩經 傳ふるところに依れば、もと三千餘篇の詩ありしを、孔子その徳教上の意

見より、取捨選擇して三百〇五篇となしきといふ。本書に採録するところの詩篇は當時流行せし詩歌にして、上は廟堂の雅頌より下は民間の俚謠に至るまで、思邪なき代表作にして、風、賦、比、興、雅、頌の六體に分ちて配列せり。

書經 書經は一に尙書と稱し、支那最古の史書なり。其の中には支那最古の倫理

思想及び政治思想を含み、支那思想の原始的體系を最もよく保存せるものなり。

これに二種の異本あり。

(一) 古文尙書

(二) 今文尙書

古文尙書は漢の景帝の時、孔安國が孔子の故宅より得たるものなりといふ。今文尙書はすべて二十九篇より成り、中に就いて二十八篇は漢の伏生の傳ふるところにして、他の一篇は後河南より得たるものなりといふ。

易經 易經の成立に就きては、異説紛々として決すべからず。普通の傳説に依れば、伏羲始めて八卦を畫し、文王これを六十四卦となし、夏殷周三代の時に至り三種の易を生ぜり。所謂三易これなり。三易とは、

- (一) 連山
- (二) 歸藏
- (三) 周易

にして、連山は夏の易、歸藏は殷の易、周易は周の易なり。然るに連山、歸藏の二易は散佚して傳はらず。今日傳來せるものは周易のみなり。周易の成立に就きても異説紛々たる状態なれども、一般の説に依れば、彖辭は文王の作にして、爻辭は周公の作に係り、十翼は孔子の筆に成れりといふ。十翼が孔子の眞作なるか否かに就きては異説又紛然たり。

春秋 史書なり。その成立内容共に前に述ぶるが如し。

禮記 古代の禮式を誌せるものにして、總て四十九篇より成る。孔子が門弟の爲めに講ぜられしを録したるものなりといふ。此書秦の焚書に依りて亡びしが、漢代に至りて再び現出したり。これに二種あり。

- (一) 大戴禮
- (二) 小戴禮

これなり。前者は戴徳の傳へしものにして、後者は戴聖の傳へしものなり。小戴禮は今の所謂「禮記」なるが、眞偽は未詳なり。或は後儒の僞作といひ、或は古本の殘闕なりともいふ。

以上の五經の外、樂經なるものありて、前五經と合して六經と稱せられしと傳へらる。

儒教の經典としては、四書五經に盡きたりといふべきも、尙神聖なる典籍として尊重せらるゝ數書あり。

- 孝經
- 孔子家語
- 孔叢子

の如きこれなり。孝經には古文と今文との二種あり。後世宋學勃興以後には、近思錄、朱子、程子の語録、王陽明の傳習錄等も亦儒教の典籍中甚だ重要視せられ、神聖視せらるゝに至れり。

三 教 義

儒教は三代の思想を受けて孔子にその基礎を得、子思に醇熟し孟子に大成せりと謂ふべきか従つて、その間教説の變化發展あるを以て、孔子の教説と子思の教説と孟子の教説とは幾分の差異あるを免れず。この故に儒教の根本教義を明知するには、少なくとも孔子、子思、孟子の三子に就き、その教説の大要と發展とを知るの要あり。然れども根本は孔子の教説に存するを以て、今は孔子の教説の梗概を叙述するに止めんとす。

孔子教説の根本觀念は仁なり。仁とはその文字の示すが如く二人の義と解するを得。即ち人は個々獨立のものにあらずして、相互に關係を有して存在せるものなり。これを現今の言葉にていへば、社會は有機體なり、個人は個人として單獨に存在することを許さず、必ずや社會と連關して存在するを得るものなり。従つて

個人相互間の關係を規定すること必要なり。仁とは信じ愛するの義にして、道德の本源茲にあり。故に仁を君臣の間に行はんか、即ち忠となり、これを父子の間に行はんか、即ち孝となり、夫婦の間に行はんか、即ち別となり、これを兄弟の間に行はんか、即ち悌となり、朋友の間に行はんか、即ち信となる。斯くの如く仁の内容たる甚だ廣大なるものなれば、仁を定義することも甚だ難し。従つて孔子がその弟子の仁を問ひしに答へし言語も方便的にして、その弟子の器量に應じてその教を異にせりき。これ畢竟仁の廣大にして、如何なる言辭を以て説明するも容易にその内容を盡すこと能はざればなり。孔子嘗つてその徒曾參に向ひて、參乎わが道一以てこれ貫くといひき。然るに曾子はこの一貫の道を解釋して、夫子の道は忠恕とのみといへりき。抑、忠恕とは何ぞや。曾子曰く、自れの欲せざるとして、これを人に施すこと勿れと。果して然らば忠恕といふも要するに信愛の外に出でざるを知るべきなり。茲に於てか、孔子の謂はゆる一貫の道といふは忠恕にして、忠恕とは信愛の義、即ち仁なりと云ふべし。忠恕とは仁を幾分具體的に説きしまでに、その内容に異りたるところあるにはあらず。而して仁は人の一時も

これを離るゝことを得ざるものなれば、即ち道と稱せらる。道とは離るゝを得ざる常道の義にして、離るべきは未だ道と稱するに足らざるなり。造次も茲に於てし、顛沛も茲に於てすべき天下の大道なり。然らば仁を行ひ道を行ふは甚だ難事なりやといふに強ち然るにもあらず。何人と雖力を須ゐてこれを行はんとするときは、これを行ふことを得べきものなり。これを以て孔子はいへり。仁遠からんや。われこれを欲すれば、仁茲に至ると。然れども仁を全然體得することは、實に難中の難事たり。仁を體したる人は、即ち聖人にして、聖人とは儒教に於ける理想人なり。心の欲するところに随ひて矩を越えざる底の人は、儒教の謂はゆる聖賢の域に入れる人と謂はざるべからず。禹、湯、文、武、周公の如きこれなり。従つて凡人の理想となるには、餘りに聖にして且つ餘りに高きを以て、孔子は更に第二段の理想人を説けり。第二段の理想人とは何ぞ、即ち君子是れなり。君子とは第一段の理想人なる聖人と相距ると遠しと雖、學問あり、趣味を解し、品性備はり、德行秀てたる人の謂にして、現今の言葉を以ていへば、所謂人格の完全に發達したる人といふなり。

孔子既に何人と雖、仁を欲すれば仁を得ざるなしといへり。従つて孔子の性に関する意見は、性善説なるとを髣髴の間に認むるを得べし。故に、性相近く、習へば相遠しと云へり。これ何人と雖、その性に於て仁に向ひ、徳を行ふを得べき可能性の存在を認容せる辭と見るとを得べし。然れども孔子は凡そ人に三種の階段あることをも認容せり。三種の階段とは何ぞや。曰く、上根の人と中根の人と下愚の人とこれなり。これ等の孔子の語は、後世發展して孟子の性善説となり、荀子の性悪説となり、韓愈、退之の性上中下三等の説を喚起する楔子となれり。然らば仁を得て君子となるには如何に修養すべきか。この修養法こそ儒教倫理の實踐方法なれ。孔子は道徳を行ふには、先づ知識の必要なることを説けり。何となれば、無智蒙昧なる者は實際は悪なることをも、悪と知らずして行ふことあるのみならず、何人と雖何が善にして何が悪なるかを識別するに足るの知見なくんば、遂に善を行はんとするも能はざるべければなり。故に先づ知識を磨きて善悪を識別するに足る知見を開發せざるべからず。果して然らば、學既に備はれば以て君子たり得べきか。曰く何ぞ然らん。同時に外面の行動に就いても修養を要

す。禮即ちこれなり。凡そ禮は小にしては自己の品格を保ち、大にしては國家社會の秩序を維持整頓する所以の道にして、これを行ふには内心より外面に發露することを努むべきなり。唯外面を修飾するは禮にあらざるなり。即ち克己慎獨の工夫を要す。知既に備はり、禮既に具はるときは、即ち君子と稱し得べきか。曰く、何ぞ然らん。知や禮やこれ質のみ、質のみありて文なきときは人格の光あることなし。人は宜しく人格の質を具ふると共に其光をも有せざるべからず。然らば光即ち文とは何ぞ。曰く、趣味の教育これなり。孔子は趣味修養の材として詩と樂とを用ひたり。もとより禮も此一部分なること論なし。孔子は實に詩歌、音樂の兩者を須めて美的思想の養成を奨励し、趣味の養成を奨励したりき。斯くの如く質に偏せず、文に偏せず、文と質と並び備はりて初めて茲に君子を得るなり。孔子は實に中を尙びて偏を忌めりき。斯くて實行上の法則として中庸を説きぬ。中庸の思想は支那の根本思想の一にして、尙書既にこれを説けり。孔子の謂はゆる中庸とは過不及なきの謂なり。換言すれば適度の義なり。人は實行上、中庸を守りて過不及なくせざるべからず。

孔子は道德と政治との根柢を同一源と觀たり。これも亦支那古代思想の通有性にして、敢へて孔子のみ然るにあらず。道德原理と政治原理とが現に同一なりとすれば、國家統治の根本は個人の修徳にあること問はずして知るべし。故に國家の安寧を保ち、國運の隆盛を來さんと欲せば、先づ個人をして徳を踐ましめざるべからず。一身修まりて一家立ち、一家修まりて一國安寧なり。故に天子は先づその身を正さざるべからず。政は正なり。政治を行ふには必ずや名分を正さざるべからず。名分正うして國家治まる。果して然らば名分を正すとは何等の意味を有するか。曰く、唯人々をして其の分を盡さしむれば即ち足る。詳にいへば君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり、夫は夫たり、婦は婦たり、各其分を盡せば天下は期せずして治平を得べし。故に大學に曰く、古の明德を天下に明かにせんと欲する者は先づ其の國を治む。その國を治めんと欲するものは先づ其家を齊ふ。其の家を齊へんと欲する者は先づ其の身を修む。その身を修めんと欲する者は先づその心を正しくす。その心を正しくせんと欲するものは先づその意を誠にす。斯くの如く政治原理は倫理原理と同一なれば、人ありて若し如法に行ふと

きは天下は安全に治まり、その家もその身も安全に修まるを得べし。この故に政治原理は他なし。天子より以て庶人に至るまで、一に皆これ身を修むるを以て本となすなり。

尙、孔子は仁を行ふに就きて遠きを後にして近きを先にすべきを教へたり。これ儒教の仁が墨子等の兼愛説と異るところにして、孟子の極力皇張するところなり。又孔子は天命の恐るべきを説き、易の繫辭傳に於ては宇宙觀を述べたり。而も純理に互るを以て今はこれを略す。

四 宋明の儒學

春秋時代に鬱然として起りし儒教は秦火の災に依りて、一時その典を失ひしと雖、漢代の獎學に依りて古書再び世に出て、註疏の學起れり。この期に於ける註釋家として名あるものに馬融、鄭玄、王肅の徒あり。俱に大儒と稱せらる。而もその專

らにするところは訓詁の學にして、新義を立てしにあらず。六朝の學亦訓詁註釋の學にして、唐の一統に至りて尙この風あり。太宗の時顏師古に命じて五經の繆闕を校正し、孔穎達に命じて註釋を作らしめたり。これ所謂「五經正義」と稱するものにして、以後科擧の要目となり、儒教は政治的方面と離るべからざる關係を生ずるに至れり。

唐代は支那の歴史に於て空前絶後の隆盛を致し、その文明の如きも印度の戒日王朝と對比し、東は高麗、日本の文化の淵源となり、其文學の盛なる、詩人としては杜甫、李白、以下の大家輩出し、文章家としては韓愈、柳子厚の徒あり、皆一代の翹楚たり。而も哲學的方面に至りては特に見るべきものなし。揚雄、韓愈、王通等の數人僅に後世に知らるゝあるのみ。願ふに唐代に於ては道教の尊崇せらるゝあり、佛教の興隆するあり、殊に佛教にありては、玄奘の入竺して法相宗を傳ふるあり。天台華嚴の勃興するあり。禪の唱道せらるゝあり。百花繚亂、春風馥郁、殆ど應接に際あざらしむ。此時に當りて、儒家は漢魏六朝の後を受けて未だ訓詁の餘習を脱せず、僅に老、佛二家に對してその位置を確保せんとするに汲々たり。韓愈の如き

は老佛の排撃を以て自れが任となし、遂に謫居せらるゝに至れり。而も柳子厚、白樂天の如きは却つて佛を信じ、その他唐代の詩人多くは佛に歸しぬ。唐より五代を経て宋の統一に至り、太祖亦大に學藝を重んじ、儒學を獎勵し、先聖の像を圖し、散佚せる典籍を集め、極力儒學の復興に盡くし、かば、漢魏以來の儒學は漸く其古に復し、興隆の氣運に向へり。加之唐代より引續き佛敎の流行するあり。天台華嚴の厚博雄大なる哲學は蘭菊の美を恣にして、宋代に再び其芳を競ひ、禪宗の隆盛はその極に達して、一世の學者悉く其の門に朝宗するに至れり。茲に於てか、佛敎の形而上學的思想と觀心的工夫とは、沈滯せる儒學を刺戟してこゝに清新雄大なる氣風を興ふるに至れり。茲に於てか、興國の氣象に伴ひて起り來りし儒敎の復古的思想は、更に他の新方面に向ひて其組織を一新し、包容を擴大し、新哲學の基礎を形成するに至れり。要するに政治的及び倫理的原理として、唐虞三代の思想を大成したる孔子の儒敎は、茲に於て更に形而上學的基礎を得、一面政治的倫理的たると共に、一面著るしく思索的に變じ來れり。儒敎が哲學として特有の位置を有するに至りしは、宋學勃興以後のたと稱するも、敢へて過言にあらず。而

して、明清の儒敎の如きは、宋學の餘波にあらざれば、訓詁註釋の攷證學派あるのみ。

宋學の淵原をなすものは、周子の「大極圖說」これなり。周敦頤字は茂叔、初の名は敦實、後敦頤と改む。(又は淳實淳頤に作る)道州營道の人、濂溪と號す。洪州分寧縣主簿を経て南安軍司理參軍となり、後南昌縣の知となり、晩年廬山に隱棲して終る。享年五十七。著はすところ、「太極圖」「太極圖說」「通書」等あり。周子の學は太極說を立て、宇宙論を説き、五行說を哲學的に解するところに特長あり。その說に依れば、宇宙の本體は絶對無差別の存在にして名づくべからず。狀すべからず。強ひて名づけて大極と名づく。此大極は又無極なるが故に「太極而無極」と説く。これより動靜二力の作用に依りて陰陽の兩儀を生ず。陰陽交錯して五行を生ず。水、火、木、金、土の五氣即ちこれなり。五行に依りて宇宙成り、四時行はる。陰陽動いて萬物成るや、五行の氣に精なるあり、粗なるあり。精なるものに依りて人類生ず。この理に依りて人は萬物の靈、生靈の首なり。故に人の性は善なり。仁義禮智信皆具はれり。而も外界に接するに由りて善惡の差別を發生し來たる。故に未だ發せざるは誠なり。故に此誠

を失はざらんことを努むべし。これを致すに二法あり。能く思慮を致すことはその一なり。寡欲なることはその二なりと。以上を周子學說の大綱となす。

宋學の先驅をなすものに周子あり。邵子あり。張子あり。又張子に亞ぎて二程子あり。朱子起り。陸子出づるに及びて宋學全く成り。燦然として百代の偉觀を現出せり。これ等の諸家に就いてその學說の大綱を叙述することは、到底短紙の能ふところにあらず。故に今は代表的人物として、二程子及び朱陸の二家に就きて、その略傳と學說の大要とを叙述すべし。

(イ) 二程子

二程子とは程顥程頤の兄弟をいふ。程顥は明道先生と稱せられ、程頤は伊川先生と稱せられ、古來此二程子の學を以て相同じとなし、その間の差異を閑却するもの多し。而して伊川を以て全然明道の繼承者、祖述者となすもの比々皆然り。然れども、二程その大要に於てはもとより相似たり。その説明に於ては決して全く相同じからざるものあり。

程顥字は伯淳、中山の人、後河南に徙る。明道元年を以て生る。父程珣は官太中大夫

に昇りし人にして顥が十五歳の時、弟頤とともに、父の命に依りて周濂溪の門に學ぶ。これより慨然として科擧の業を厭ひ、道を求むるの志甚だ切なり。進士に擧げられ、晉城の令となる。城民に説くに忠信孝悌の道を以てし、諸郷に學校を設け、暇ある時には、親シヤら學校に至りて兒童の爲めに句讀を正せり。その他、保伍を設けて民をして相助けしめ、疾病相哀ましむる等治績甚だ擧れり。神宗位に即くに及び、呂公著の推薦に依りて太子中允監察御史裏行となり、屢、神宗と應對す。顥説くに人主は未萌の欲を防ぐべきを以てす。當時は王安石の執政時代にして、その施設するところの新法に就いて議論擾々たり。顥入りて安石と對す。安石爲めに屈せりといふ。既にして簽書鎮寧軍判官となり、太常丞に遷り、後汝州の酒稅監となり、元豐八年六月十五日卒す。年五十四。文彦博その墓表に題して「明道先生」といふ。又、程頤を小程子といふより顥を一に大程子と稱す。著はすところ成書なし。その語を録せるものに「二程全書」あり。伊川の語を共に編せるものなり。

程子の學は深遠にして、組織整然たりとは稱す可からざるも、その識見に至りては一代に超越せり。その學はこれを孔孟に受け、易の哲理を酌み來りて形而上學

を立し、孟子性善の説に立脚して性論を説きて、心理學的方面を構成せり。程頤の學の大綱は三門に分つとを得べし。一には形而上學、二には性論即ち心理説、三には修養論即ち教育説これなり。その中核とするところは宇宙の元氣と、其の法則たる仁と、人の性とを同一物となすことこれなり。その元氣を説くや曰く、生々これを易といふ。これ天の道たる所以なり。天はたゞこれ性を以て道となす。この生理を繼ぐものは只これなり。善は便ち一元的意志なり。元は善の長、萬物皆春意あり。便ちこれ之に繼ぐものは善なり。これを成すものは性なり。成は卻つて他の萬物を待つて自ら成る。其性は得べしと。又曰く、生はこれを性とといひ、性は即ち氣、氣は即ち性の謂なりと。謂ふところの生即ち元氣は宇宙の元氣にして、この元氣は善なる者なり。而して萬物の本性は仁なり。故に曰く、仁者體也と。元氣と仁とは同一なるが故に仁は善なり。而して人の性は氣なるが故に、人性は善ならざるべからず。故に曰く、生はこれを性と謂ふ。性は即ち氣なり。氣は即ち性なり。生の謂なりと。果して然らば性は即ち宇宙の元氣なれば、元氣の善なるが如く性もまた善なるべきは自明の理なり。既に性善説を立す。然らば人性惡をなすは何に因るぞ。惡

の起原はこれを如何にして説明することを得るか。程頤は種々の譬喩を説き、氣稟を説き、人欲の擁蔽を説くと雖、到底矛盾を免れず。宇宙の元氣即ち仁を以て善となし、性を以て仁と同一視し、これを以て善となす一元的説明の下に、惡の起原を説かんことは到底不可能なり。程頤の人欲といふが如きは、これ別種の原理を借り來りてこの難を疏通せんと試みたるなり。故に子の性善説は徹底したる説となすを得ざるなり。子は既に仁と性とを同一視す。従つて道は性と等しからざるを得ず。故に曰く、道は即ち性なりと。斯くの如く、性に率へば道に至るとを得べきも、人心なるものありて性の本然を擁蔽せり。故に吾人は性の本然たる道心をして、その本然に還らしめざるべからず。本然を發揮せしめざるべからず。これをなす法如何、これ子が修養論として述ぶるところなり。子は、定性書に於て定性を説けり。定性とは性の理想的状態の謂ひにして、宇宙の大法則を認識し性を陶冶したる究竟地なり。性を致すには即ち人欲を去らざるべからず。人欲を去らんとするには敬を以て心を治めざるべからず。仁はこれを内に求むべし。而して此仁を認識せんとするには敬に依らざるべからず。畢竟性も仁も同一のみ。仁は性に

具はれるもの、これ内觀的思索に依りて致すを得る所以なり。一たび仁を得たる時は、敬以てこれを失はざらんことを努め、斯くの如くにして内外を忘じ、道德の極致に進むべきなり。而して爲學を以てこゝに至る補助法と認め、敬と共に仁の體認に學の缺くべからざるを説けり。

程頤字は正叔、河南の人、程顥の弟なり。伊水の上に居りしを以て、又伊川先生と稱せらる。十八歳の時、闕下に上書し、仁宗に勸むるに俗論を黜け、王道を以て心とせんことを奏進す。その大學に遊ぶや、胡瑗の知を得たり。仍つて擧げられて學職に居る。後司馬光、呂公著の爲めに推されて西京國子監教授に任ぜられしも、辭して就かず。並以て崇政殿説書に擢んでられ、事を持する甚だ嚴格なり。時に蘇軾(東坡)一代の文豪として、文名臺閣に重く、追隨するもの又多し。司馬光の薨ずるや、朝廷子をして喪事を掌らしむ。その日、明堂に祀あり。慶事なり。事畢り、往きて光を哭せんとす。子可かずして曰く、子その日に於て哭すれば、則ち歌はずと。或人の曰く、歌へば則ち哭せずといはざるなりと。蘇軾これ聞き之を嘲りて曰く、これ塵糟陂裏の叔孫通なりと。こゝに於てか學徒相分れて子と軾とに従ひ詆誹以てことと

なす。洛黨、川黨の二黨即ちこれなり。洛黨は子を首領とし、川黨は軾これが牛耳を執る。洛黨に朱光庭、賈易等あり。川黨に呂陶等ありて互に羽翼となる。事によりて有司の諱むところとなり。涪州に謫せらる。徽宗即位の後、召還せられしも、崇寧二年、邪説を骨張して衆を惑はすの罪に坐して斥けられ、同五年、宣義郎となり。大觀元年卒す。年七十五。著はすところ、易傳(四卷)、宋志(九卷)、詩文數十篇あり。その語は兄顥の語と共に、「二程全書」に編入せらる。

子は顥より少きこと僅に一歳、且つ其師を同じうし、また其統を同じうす。學説亦兄顥を繼承するところ多しと雖、而も顥の説いて詳ならざりしところを説いて明確にし、その足らざるを補ひしところも亦少からず。今簡単に顥の説と異なる部分を叙述すべし。

顥の説に依れば、宇宙の元氣と、仁と、人の性と同一にして皆善なりとなす。果して人の性は善ならば、惡の起原は如何にこれを説明するを得るか。これ顥が説に於ける第一の難點たりしなり。而してかれは性の外に氣稟なるものを持ち來りてこの難に對せんとせしも、その説や明確ならず。一元か二元か得て分つ能はざり

しなり。願は此難を會通せんが爲めに二元的立脚地を承認し、性の外に氣なる一原理を探り來れり。人の性は善なれども氣に清濁の別あり。清氣を稟けしものは善人となり、濁氣を稟けしものは悪人となる。性は即ち理にして、惡の事たる性に關せざるなり。善惡は才に關す。故に曰く、性は天に出づ。才は氣に出づ。氣清ければ即ち才清く、氣濁れば即ち才濁る。才は則ち不善あれども性は則ち不善なしと。斯くの如く説きて性を惡より分離したり。理氣二元の説茲に起る。子は更に性と情とを別ち、情とは性の動なりといひ、未發、既發の論を立て、性は即ち理にして喜怒哀樂の未だ發せざるところとなし、従つて善ならざるはなしと説き、情は性の動にして喜怒哀樂の既に發するところとし、發して中に當らざるに於て、初めて惡ありとなせり。而も子に依れば情はもと善なる性の動なる故、不善と名づくるを得ずといひ、性即心の説を立てたり。故に曰く、孟子曰く、その心を盡すものはその性を知る。心は即ち性なりと。心則性、性則理なれば心は則ち絶對なり。故に曰く、一人の心は即ち天地の心、一物の理は即ち萬物の理、一日の運は即ち一歳の運と。果して然らば心の状態は如何。子は有名なる冲漠無朕の説を立てたり。曰く、冲漠無

朕、萬象森然として已に具はる。未だ應ぜず、これ先とせず。已に應ず、これ後とせず。百尺の木、根本より枝葉に至るまで、皆これ一貫するが如しと。謂ふところの冲漠無朕は、即ち物我一如の當躰にして、この心の状態を失はざるは即ち聖人なり。故に曰く、聖人の心は明鏡止水の如しと。子は斯くの如く性即理、理即心、心は即ち冲漠無朕と立て、氣を以て形而下なりとなし、氣の清濁に依りて個性を生ずと説けり。こゝに於てか、子の修養法は氣を治むるにあるを知る。氣には濁れるものあれども、清ますことを得る可能性あり。養氣の法は寡慾なるにあり。寡慾なれば氣は靈明なるを得、而して更に敬と義とを説けり。敬は己れを持するの道、義は是非を知るの道なり。従つて修養の方便として窮理の説起る。窮理の説に三あり。曰く、讀書して義理を講明するは一なり。古今の人物を論じて其是非を分つは二なり。事物に應接して其當を得るは三なり。而も子は聞見の智を重んぜずして、徳性の智(内省的智)を重んじたり。後、朱陸の兩派は各、其一面を過重するによりて起れり。子は又徳性の智を眞に得たる人はこれを知ると共に行ふものなり。行はざるは未だ眞に知らざるなりとなす。知行合一の傾向茲に現はれ、後年王陽明の先驅を

なせり。

(口) 朱子

朱子名は熹、字は元晦、又仲晦と稱す。朱子は尊稱なり。徽州婺源の人。父の名は松、字は喬年、韋齋と稱す。嘗つて李延年と共に羅豫章に學ぶ。進士となり官に就きしが、秦檜と合はずして去り、尤溪城に居る。熹生れて穎悟、十四歳の頃より籍溪の胡原仲、白水の劉致中、屏山の劉彥中に從學し、十八にして進士に擧げられ、同安主簿となり、二十四歳にして初めて李延平に見ゆ。孝宗位に即き、詔して直言を求むるや、三たび上書して時事を論ず。隆興五年南康軍に知となり、白鹿洞書院を興す。後屢上書して時事を論ず。時に金の難あり、廟議常に媾和に傾く。子謂へらく、金人は不俱戴天の讐、戰はざるべからず。此故を以て有司の忌諱するところとなる。寧宗位に即き、韓侂胄事を行ふて驕る。子趙如愚の薦に依りて、上書して侂胄を彈劾す。これより朝臣子を目するに偽學となし、迫害至らざるなし。沈繼相の監察御史となるや、子の十罪を數へて斬に擬するに至る。門弟又分散し、甚だしきは衣冠を更へ、山林に隱るるものあり。然れども、子悠然として諸生と日に經を講じて止まず。

慶元六年三月病んで卒す。享年七十一。著はすとこ甚だ多し。「朱子語類」、「朱子語錄」、「朱子文集」等は後人の編纂に係るものにして、子の教説を知る津梁なり。朱子の根本思想は理氣二元論なり。而して理を以て太極と同一視し、太極即ち理なりと断ぜり。これ程伊川に立脚して周濂溪に溯り、二家の綜合を試みたるものなり。太極と理とはたゞその觀方みかたに依りて異なるのみ。理は形而上の道、氣は形而下の器。相合して宇宙萬有を鑄陶す。而してこの理たるや萬物に互りて一なり。萬物各相異り、理相殊るが如きも、そは外觀的にして萬物は一太極に統一せられざるなり。故に宇宙には一太極あるのみ。果して然らば個性は如何にして生ずるか。曰く、氣に清濁あるが爲めなり。氣の精英を得るものは人となり、氣の渣滓を得るものは物となる。その他、人の賢愚、物の精粗、一に氣の清濁に依りて生ず。然れども理を以て本體とし、氣を以て現象とするは當らず。理氣ともに本體的にしてたゞ理は氣に比して一層根本的性質を有するのみ。太極は絶對的實在にして萬物これより生ず。太極より先づ動靜の二作用出で、動は陽を生じ、靜は陽を生ず。次いで水、火、木、金、土の五行を生ず。以上の二氣五行によりて萬物發生す。而して宇宙に變化

あり萬物に消長あるは、陰陽二氣の相互的關係に因る。寒暑の往來、四季の變遷、風雨の天象、皆陰陽二氣の屈伸消長に因りて生ず。以上は朱子の本體論並に宇宙論の梗概なり。

朱子は性論に於て更に二種の性を立てたり。本然の性氣質の性即ちこれなり。理即ち太極にして太極即ち性なりとするもの、これを本然の性と謂ふ。本然の性は圓滿完全なるもの、仁、義、禮、智、信等のあらゆる美德、一としてこの性に具はらざるものなし。然らば人に善人あり、悪人あるは抑、何によりて然るか。これ本然の性の外に氣質の性あればあり。氣質の性は氣の清濁によりて、或は清み或は濁る。清めるものは聖賢となり、濁れるものは暗愚となる。朱子は更にこれを説明して曰く、「木氣を得たること重きものは、惻隱の心常に多くして差惡、辭遜、是非の心、その爲めに塞がれて發するを得ず。金氣を得ること重き者は、差惡の心常に多くして、惻隱、辭遜、是非の心、それが爲めに塞がれて發するを得ず。火水も亦然り。故に氣質の性の完全なる人は陰陽德を合せ、五性全く備り、中正なるものにして聖人これなり」と。

朱子は更に進みて心と理氣との關係を説けり。性は心の具有する理にして心の體なり。而して心は氣の精爽なるものなり。故に心は理に依りて刺動せらるべく、又氣に依りて刺動せらるゝを得べし。理に依りて刺動せられたる心は即ち道心にして、惻隱、差惡の如きは道心の作用なり。氣に依りて刺動せられたる心は即ち人心にして、一切の嗜慾皆これより出づ。斯くの如く心は道心と人心との二面を有す。而してこの二面は、上聖賢より下匹夫に至るまでこれを具有せざるはなし。故に曰く、道心はこれ義理上に發出し來たるもの、人心はこれ人身上に發出し來たるもの、聖人と雖人心なき能はず。飢食渴飲の類の如し。小人と雖道心なき能はず。惻隱の心の如しと。

朱子は上述の如く、本然の性氣質の性を立て、人の賢愚は一に氣の清濁に因ると説くを以て、その修養説の如き亦程伊川とその軌を一にするものあり。伊川は寡慾を重んじ、是非の別を明かにせんが爲めに窮理を主張したり。朱子も亦氣質の性は氣の濁れるに依りて惡となるもの、而して人の昏塞して通ぜざるは物我の關係明かならず、窮理に於て闕くるところあればなり。故に格物致知の用あり。格

物致知とは畢竟窮理の異名のみ故に曰く、物に格^{きやく}り知を致すこれこの理を窮むと。而してその手段として讀書の努むべきを獎勵せり。こゝに於て、伊川の窮理説に比して經驗的知識換言すれば謂はゆる聞見の智を重んずる傾向顯はれたるといふべし。

斯くの如く讀書の功を積み、格物致知によりて事物の義理を明らむるは修爲の第一段なり。既に書を読み義理を明らむと雖、而もこれを體認するとなくんばその功全きを得ず。こゝに於てか、第二段の工夫を要す。朱子は第二段の工夫として夜氣を存する説を唱へたり。夜氣を存すとは人念を靜に抑へて道心を涵養する方法なり。即ち孟子の説と同じく内省的工夫を積むことをいふ。この手段として朱子は靜座を推奨せり。靜座は心の散亂を防遏し、心をして湛然止水の如くならしむる爲めに行ふ方法なり。斯くの如くにして怠らずんば終に聖賢の域に至るべきなり。これを朱子修爲説の梗概となす。

(ハ) 陸子

陸子名は九淵、字は子靜、存齋と號す。象山はその廬居せし山名に因りて名づくる

ところなり。金谿の人。父の名は賀、子はその季子なり。幼にして穎悟、屢天地の何物たるに心を潜めしといふ。嘗つて人の伊川の語を誦するを聞きて曰く、伊川の言、何すれぞ孔孟の語に類せざると。人以て奇となす。少時古書を読み、宇宙の二字に至りて推究す。解に曰く、四方五間を宇といひ、往古來今を宙といふと。こゝに於てか、かれは、宇宙と人との關係を覺悟し、宇宙は大なる人にして、人は小なる宇宙なることを了せり。曰く、宇宙内のこととは乃ち己分内のこと、己分内のことは乃ち宇宙内のことと。又曰く、宇宙は乃ちこれわが心、わが心は即ちこれ宇宙。東海聖人の出づるあり、この心同じきなり。この理同じきなり。西海聖人の出づるあり、この心同じきなり。この理同じきなり。南海聖人の出づるあり、この心同じきなり。この理同じきなり。千百世の下、聖人の出づるあり、この心同じきなり。この理同じきなり。子の學説の根本こゝに既に成れり。乾道八年進士に擧げられ、淳熙元年、靖安主簿を授けらる。翌年、呂祖謙、子の季兄九齡と共に信州鵝湖寺に朱子と會し、問難論究大にその學を論じ、數日に互る。互に見るところを殊にして決せず。終にこれを止む。後屢書

贖を以て朱子と道を論じ又朱子の白鹿洞書院に至りて、論語を講ず。斯くの如く
 兩賢の交誼淡如掬すべきものあり、誠に一代の盛觀と謂ふべし。後、臺州崇道觀の
 主管となり、幾何もなくして、廬を象山に結ぶや、門下の士來り集るもの數百人、道
 風大に扇ぐ。光宗の紹熙二年、知荆軍門に際し、治績あり。同三年十二月十四日病み
 て卒す。享年五十四。人あり子に勸むるに書を著はさんことを以てす。子肯んせず
 して曰く、「六經われを註す。われは六經を註す」と。又曰く、「學びて苟も道を知れば、六
 經皆わが信仰なり」と。その識見の高きを見るべし。嘉定十年、文安の謚號を賜ふ。そ
 の平生作るところの文章を編したるもの、象山集(三十三卷)あり。外に語錄(二卷)あ
 りて又象山集に附載せり。

今、象山の學説を説くに當りて、宋學の系統を一瞥するの要あり。初め周濂溪起り
 て大極圖説を唱ふるや、門下に二程あり。その學統相同じと雖、その性質の異なるよ
 り、明道の學と伊川の學とはその風を異にするに至れり。明道は理を説く、疎なる
 が如き渾然たる氣象あり。伊川は圭角ありて、學も又精密なり。明道の學風は直截
 簡易、直下に箇の精神底に洞見せんとする傾向を有するに對し、伊川の學は修爲

工夫を尙ぶと共に、窮理を唱道せり。茲に於てか、朱子は伊川に受けて格物致知の
 論を立て、讀書窮理を推奨せり。陸子は朱子の學風に慊焉たらず、直ちに明道に溯
 りて心即理の説を立て、單刀直入、見性底の學風を立てたり。茲に於てか、朱陸の二
 派起り、長く儒學史上の學風となれり。今これを表示すれば左の如し。

程明道……………陸象山
 周濂溪……………程伊川……………朱熹

陸子の朱子に反するは、格物致知を排して直下に箇の明々の心地に徹見する
 にあり。その學説として、特色と認むべきは、道心、人心の二心論を排して渾然朗々
 たる統一的心を認め、この心即ち理となしたるにあり。心即理の説即ちこれなり。
 陸子が人の性の善なるを認め、宇宙を一貫せる理を認めたるは、宋儒一般の説と
 何等の異るところなし。かれ曰く、「人の性はもと善なり。その不善なるものは物に
 遷ればなり」と。又曰く、「蓋し人は天地の中を受けて生る。その本心不善あることな
 し」と。これ性善説を肯定せるものにあらずして何ぞや。一貫の理に就いては曰く、
 「天下の事々物々、只一理ありて二理あることなし」と。かれは進んで學者の道心、人

心の別を認むるを排せり。書經に「人心惟れ危く、道心惟れ微なり」といふと雖も、心は渾然たる一箇照々底のものにして、危といふも微といふもこれ別物にあらず。人よりいへば則ち危く、道よりいへば則ち微なるのみ。朱子は理に依りて刺動せられたる心を道心といひ、氣に依りて刺動せられたる心を人心といふと雖、陸子は理氣の二元論を認めざるを以て、宇宙にはたゞ一貫の理あるのみ。天理を以て静とし、人欲を以て動となし、これによりて善惡を立て、道人二心を立するは蓋し陸子の許さざるところなり。何となれば性は一のみ、善のみ、焉んぞこの一箇の性を以て或は是となし、或は不見となすことを得んや。静も動もたゞ箇の一箇の性のみ。こゝに於て、陸子は道人二心を棄て、渾然なる一心を認め、この心皆性より出づといへり。茲に於てか、陸子の所謂心は即ち理ならざるを得ず。

果して然らば人に善惡あるは何に依りて然るか。陸子に依れば性は善なり。而して理氣の二元を認めず。更に人道二心の對峙を認めず。心は即ち明々たる一心。而してこの心即ち理なりとすれば、惡の起原は如何にこれを説くべきぞ。陸子は茲に於て氣質の存在を認めざるを得ず。人に善惡堅忍あるは、氣質に強弱厚薄の差

あるに基づく。個性の別は實にこれに因りて生ず。故に「氣質偏弱なれば、則ち耳目の官、思はずして物に蔽はる」といふに至る。頗る窮せりといはざるを得ず。而も彼は唯常識的に氣質の差を説きて、此難關を會通せんと努めしものゝ如し。

心は即ち理なり。而も氣質の偏弱に依り、物慾に蔽はれて、吾人は愚となり。惡となすとせば、陸子の修養法の反省的なること知るべし。故に陸子にありては窮理は唯自己の心の靈々昭々底のところを自覺するにあるのみ。これをなす如何にせば可なる。たゞ物慾を除却すれば可なり。茲に於てか、陸子の修養法は禪家と其軌を一にするを知るべし。従つて陸子に取りては格物致知の爲めの讀書の如きは末の末なるものゝみ。故に曰く、物に格るとは此に格るなり。……然らずんば謂ふところの格物は末而已矣と。又曰く、凡そ物必ず本末あり。且らく樹木に就いて之を観るが如く、則ちその根本必ず差大、わが人を教ふる、大槩その本をして常に重からしめ、末に累せられざらしむ。然るに今世の學者は却りてこれを悦ばずと。以てその主張を知るべし。人の物に蔽はれて理に悖り、義に違ふは思はざればなり。却りて内省すれば、是非釋然としてその本に復るを得。故に人は静思熟慮、直ちに

自己の心地を明らめんことを努むべく、これ教育の大本にして、記誦講學の如きは之れに比すれば、末の事たるを免れざるなり。これを陸子修養論の梗概とす。

(二) 王陽明

朱子、陸子の後、宋は絶えず金の壓迫を蒙り、國勢萎微して振はず。宋末の學者多くは朱陸の間に彷徨し、殊に朱子學盛んにして又開發するところなし。元の統一に至りて文字を製し文學を獎勵せしと雖、その特色は寧ろ文學戯曲にありて、また思想家と稱すべきものなし。明起るに及びて初めて一個の英傑を得たり。かれは陸象山に基づき、程伊川に溯り、遠く孔孟に採りて、大學の一書に其據を得て、知行合一、致良知の新教説を建てたり。これ支那の儒學史上に於ける最後の光輝にして、後世に及ぼせる影響も亦敢へて二程、朱陸の下にあらず。王陽明即ちこれなり。陽明名は守仁、字は伯安、餘姚の人。明の憲宗成化八年を以て生る。其先は右軍王義之より出づ。陽明人となり、豪邁不羈にして小節に拘らず、慨然として四方の志あり。弘治十二年、試みられて進士となる。武宗の位に即くや、劉瑾、谷大等専ら權りて横恣なり。南京科道戴銑、薄彥徽等これを彈劾せしが、武宗の旨に忤ひて却りて獄

に下さる。時に陽明刑部に主たり、即ち上疏してこれを救ひ、又旨に忤ひて答せられ、貴州龍場驛の丞に謫せらる。陽明謫せらるるや、途野廟を過ぎ壁に題して曰く、「險夷原不滯胸中、何異浮雲度大空、夜靜海濤三萬里、月明飛錫下天風」と。其自得の狀想ふべし。幾何もなくして復た召され、四方の亂を征して功あり。南京兵部尙書に陞り、新建伯に封ぜらる。時に正徳十五年なり。嘉靖四年十月、門人相謀りて陽明書院を越城に建つ。六年、廣西を討ち、思田を平ぐ。事に依りて賞行はれず、翌年病んで、南安に薨す。享年五十七。實に十一月廿九日なり。著はすところ、「王陽明全書」、「王陽明全集」あり。傳習錄は門人の子の語を録するところにして、三輪執齋初めてわが國に翻刻せり。

陽明學説の根本はこれを陸象山に得たり。故に心即理の説に於ては象山に異るところなし。子は更に程伊川に汲みて知行合一の説を立てたり。子に依れば知と行とは同一物の二端にして、知は行の始、行は知の成なり。若し知にして行を離れたる知ならんか、これ知と稱すべからず。行にして知に離れたる行ならんか、これ眞の行と稱するを得ず。知りて行はざるは未だ眞に知るにあらずればなり。故

に曰く、知はこれ行の始、行はこれ知の成。若し會し得たる時、只一個の知を説けば、既に自ら行のあるあり。又一個の行を説けば、既に自ら知のあるありと。然り、而してその根柢は心即理にあり。故に曰く、心を外にして以て理を求む。これ知行の二なる所以なり。理をわが心に求む。これ聖門知行合一の教なりと。而してこの知なるものは伊川の徳性の知たるや明かなり。

子は心即理より知行合一を説き、進んで良知を説けり。良知とは心の靈昭不昧なる状態を名づけ、先天的に何人にも具はり善惡を知るものをいふ。故に曰く、善を知り惡を知るはこれ良知と。又曰く、天命之性粹然堯然、その靈昭不昧なる者、皆それ至善の發見、これ即ち明德の本體にして謂ふところの良知なるものなりと。而して良知をして行爲上に實現せしむる動力となるものは意なり。而も意は常に智に伴ふものなり。故に曰く、其虛靈明確なる良知、應感して動くものはこれを意と謂ふ。知ありて後意あり。知なければ則ち意なし矣。知は意の體にあらず乎と。

既に心即理なれば、心の本體は正しからざるなし、而も意念の動くに時として不善あるを免れず。故に修養の第一段、意を正さざるべからず。故に曰く、心の本體

は本正しからざるなきなり。何すれど、これを正すの功を用ひん乎。蓋し心の本體は本正しからざるなし。その意念の發動より然る後正しからざるあり。故にその心を正さんと欲せば、必ずその意念の發する所に就いて之を正せむ。子はこれを呼んで誠意と言へり。意を誠にするは、實に修養の第一段なり。吾人は善と知り惡と知りても、時としてこれを好み、これを惡まず。良心昏塞することあり。茲に於てか致知の要あり。致知とは良知を致すなり。換言すれば良知を明かにして善惡を明知する様になさるべからず。果して然らば致知の法如何。曰く、格物にあり。格物とは意中に存在する善は直ちに之を行ひ、惡は直ちに之を棄て、換言すれば良知の善とするところは直ちに之を行ひ、良知の惡とするところは直ちに之を去るを要す。茲に於てか物格いんらざるなきなり。これを格物致知といふ。陽明は又修養法として靜坐坐禪を推奨せしこと、陸象山に同じ。

五 儒教の現状

儒教の信仰は形式的にして、その精神の如きは殆ど全く閑却せられたるの觀あり。而も困習の久しき上は天子より下は庶人に至るまで、日用の行爲より祭儀式典の重きに及び、一として儒教の儀禮に準據せざるもの稀なり。實に儒教は今も尙支那の國教として、深く廣く人心に染着し居るなり。然れども今日の儒教は理論的組織を有するものにあらず。一に宗教儀式として用ひられ、その崇拜の對象の如きも幾千載の星霜を経て、漸次變更せられ、附加せられ、多くの民間信仰と融和抱合して迷信に墮せるものといふを寧ろ適當とせずやと思はる。今儒教の信仰を分析すれば左の如き結果を得べし。

- (一) 自然崇拜
- (二) 祖先崇拜
- (三) 英雄崇拜

の三種にしてこれに附加せる幾多の神格の崇拜せらるゝあり。靈鬼の恐怖せらるゝあり。今各項を簡單に叙述すべし。

(イ) 自然崇拜

支那人の考に依れば、凡そ物には精氣あらざるなく、物大なれば精氣も亦大なり。而して精氣は變化發揚して人類に禍福を下すの力を有す。自然崇拜の對象となるものに三種あり。

- (一) 天象 天、日月、星、辰の類
- (二) 空象 風、雨、雷、雲の類
- (三) 地象 地、山、川、海、洋の類

天は帝、昊天、上帝等と稱へ百神の主たり。これに對して地は后土と稱せられて何れも抽象的神格を有し、天地は天子にあらざれば祀ること能はず。北京に祭天地の設あり。天子これに就いて天を祀る。これ天子は天の命を受けて人民を治むとの思想あるに因る。天地に亞ぎて崇拜せらるゝは日月、星、辰なり。日は大明の神、月は夜明の神と稱せられ、北極星、南極星、文昌星、魁星、木、火、土、金、水の五星、二十八宿等は星辰崇拜の對象中有名なるものなり。

空象崇拜としての對象は、風伯(風神)、雨師(雨神)、雲師(雲の神)、雷師(雷神等)として恐怖せられ、地象崇拜の對象としては前記の后土(地神)最も重く、靈山、靈河、悉く封號

ありて、祠を建て、これを祀ることわが國の風習と相似たり。右の外、土神(社)、穀神(稷)、火神(赭面三目の火德星君)、龍神、門神、城隍神、廁神、破神等も亦崇拜せらる。就中社稷最も重く、省、府、州、縣皆祠ありてこれを祀れり。古は天子は祭壇上に五色の土を敷きて天下の土を祀り、諸侯は一色の土を敷きて一方の地を祀りき。城隍神は各城これを祀らざるなく、破神は八旗軍の祀れる兵器の神なり。

(四) 祖先崇拜

祖先崇拜は支那人の最も重んずるところにして又實に三代の古俗なり。これに凡そ三種あり、一は國家の祖先及び先靈にして、歴代の皇帝及び皇后、前代の皇帝の如き即ち是れなり。二には業務の開祖に對する崇拜にして、先農、先蠶、先醫の崇拜の如きこれなり。三には一族一家に關する祖先崇拜にして、族祖、父祖の靈を崇拜す。凡そ靈魂不滅の思想は昔より支那人の頭惱を支配し、之を人鬼と呼び人間に禍福を下すこと精氣に異らずと信ぜり。太廟、陵墓は歴世の皇帝皇后を祀り、太古よりの先皇の靈は皇陵あり、又北京に合祀廟あり。先農とは初めて農事を教へたる神農のことにして、先蠶は蠶業の祖たる西陵氏即ち黃帝の妃なり。先醫は黃

帝、岐伯、俞跗、雷公、巫影、桐君、その他古の名醫を合祀す。これ黃帝が岐伯に命じて内經を作り、俞跗、雷公に命じて人身生息の脈理を講究せしめ、巫影、桐君に命じて藥劑治術を調査せしめしといふ傳説に據るとぞ。

(ハ) 英雄崇拜

英雄として崇拜せらるるものは聖賢あり、國家の功臣あり、その他郷閭に於ける忠孝の士、節義の士、名官、郷賢等その主なるものにして、又儒教の特色なり。聖賢崇拜には文廟、武廟あり。文廟には孔子、顔回、曾參、孔伋、孟軻の四配、孔門の十二哲、その他、古聖、古賢を祀り、武廟には唐朝に齊大公呂尚を祀りたるを始として、文廟の四配、十二哲に擬して古の名將、勇士を祀り、清朝に至り、關羽の崇拜著るしく起り、關帝廟は至るところの市街村落これあらざるはなく、忠神、武靈、德仁、勇、關聖、大帝の封號を上れり。

英雄崇拜と關聯して除災捍害の神靈を祀ること一般に行はる。即ち兵亂外寇等の魔除神なり。これ「禮記」に「能禦大災則祀之、能捍大患則祀之」とあるに基づけり。大裁は風雨等の災害にして、大患は兵亂外寇等の災害をいふ。

(二) 幽鬼崇拜

儒教には「祀典なるものありて、これに記載せらるる諸神は正神にして、これに記載せられざる諸神は邪神と稱せられ、その祀祠は淫祠と稱せらる。これ民間信仰の儒教に聯關して起りしものと見るべし。淫祠と稱せらるる邪神には、全然心理的に神格の成立せしものと、史上の人物の神格化せられしものとあり。玉皇上帝、東岳大帝、北極大帝、白顯大帝、大衆爺、福德正神、灶君等は前者に屬し、福建地方に祀らるる天后、保生大帝、水仙尊王、開漳聖王、廣澤尊王、臨水夫人、元帥爺、王爺等は後者に屬す。

玉皇上帝は天公と稱せられ、皇天を通俗的に見てこれに人格を附與したる神なり。毎年正月九日下降し十二月二十五日上天すと信ぜられ、各地に祭らる。東岳大帝は五岳中の東岳神のことにして、毎年三月廿八日を生日とす。五岳とは泰山(東岳)、衡山(南岳)、華山(西岳)、恒山(北岳)、嵩山(中岳)の五山をいふ。北極大帝は眞武君と稱せられ、北斗七星のことなり。白顯大帝とは五帝のことにして、一に五行大帝と稱せらる。青帝(東方)、赤帝(南方)、白帝(西方)、黒帝(北方)、皇帝(中央)これを五帝といふ。大衆

(ホ) 廟 祠

爺は有應公ともいひその神體明かならず、毎年清明、中年、過年(歳末)に祭らる。福德正神は普く屋内、路傍等に祀られ、俗に土地公と稱せらる。灶君は竈神なり。周禮の司命神に基づくものにして、毎年十二月九日に祭り、一家の地命福德を支配すと考へらる。

以上に列擧せる諸神を奉祀する殿堂を廟又は祠と稱す。廟に官廟と私廟との別あり。官廟とは官設の殿堂を指し、祀典に記載せられたるものをいひ、その他のものは即ち私廟にして、民廟又は民祠と稱せらる。

次に廟祠の配列を記さんに、省、府、州、縣の城内には、必ず文廟ありて宏壯なり。關帝廟又同じく宏麗文廟に亞げり。文昌廟は必ず省城内にあり。賢良祠は又省城内に必ず設けらるる祠にして、總督、巡撫等の民利を擴め、民徳を進めたるものを祀る。これと同じく、その地方々々出身の官吏、郷勇等の戦歿者を祀れるもの、各省及び各府城にあり。これを昭忠祠といふ。又各地に義民祠なるものありて、義民を祀る。その他、名官祠、郷賢祠、節孝祠等各地にありて、各府縣文廟の左右に建てらる。

廟祠法は官廟と民廟即ち(私廟)とに依りて異れり。民廟は民間の經營崇敬に一任するものにして、多くは寄附金より成る。唯民廟民祠を創立せんとする時は、地方官を經由にして皇帝の裁可を経ざるべからず。官廟の設立及び管理法は政府の管轄に屬し、典禮の規定に依りて設立せらるるものと、地方官の申請に依り禮部これを審査し、皇帝の裁可を経て設立せらるるものとあり。社稷壇、神祇壇、先農壇、大成殿、關帝廟、昭忠祠の如きは前者に屬する廟祠にして、名山、大川、風雷、龍火等の諸神、忠節名臣の祠の如きは後者に屬するものなり。

一族一家の祖先を祀れる家廟は至るところにあり。これに大宗及び小宗の二種あり。大宗とは十世以前の始祖を祀れる廟にして、小宗とは近き祖考を祀れる廟なり。大宗は姓を同するもの、その族祖を祀れるところなれば、貴富貧賤に拘はらず共同して經營す。小宗は宗族關係の明かなる數家に於て、祀れるものなれば數家の經營に成り、又その共有の廟たり。

(一) 祭祀及び其禮儀

儒教の祭祀を重んずるとは、敢へて近世に始まりたるにあらず。遠く周代にそ

の源を發す。今日儒教が民間信仰と融合したるより、祭儀益々煩雜に陥れり。凡そ一定の神祇を祀るには、その神祇有縁の祭日ありて紊りに變更するを許さず。これ等の祭日は典禮に記載せらる。例へば社稷の祭日は毎年仲春と仲秋の上戊日を用ひ、風雨、雲雷、城隍等の諸神は春秋仲月上旬の吉日を選び、孔子は春秋仲月の上丁日、歷皇、忠臣、義士は春秋二回に吉日を選びて祀るが如し。但し既定の祭日にして國忌日に丁るときは、臨時これを變更せざるべからず。祭儀は一に典禮に準據してこれを執行す。次第左の如し。

- (一) 就位 祭祀官着席す
- (二) 迎神 神明の來たるを迎ふ
- (三) 初献禮 舞樂を奏し、爵帛を奠し、祭文を讀む。
- (四) 亞献禮 同上(祭文なし)
- (五) 終献禮 同上(同上)
- (六) 撤饌 酒饌玉帛を撤す、奏樂